
精霊騎士物語

せんだいとりや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊騎士物語

【Nコード】

N2887L

【作者名】

せんだいとりや

【あらすじ】

騎士の国レギンレイブ、その下町である11番街に住む「精霊騎士」と呼ばれる少年アイン。

父の背中を追い求め亡き母の夢である騎士になった時、“精霊”と“魔法”そして“人間”が当たり前共存する世界で少年は少女を守る事を誓う。

これは、精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争の中の物語。
少年は選択する。

―世界でも無く

王女でも無く

一人の少女が想い描いた夢物語を―

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称全てに関して、名称が同一であっても何の関係もありません。

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争により、世界は二つに割れた。

そこで少年達は選択する。

こちらは”精霊と魔法そして人間が当たり前に共存する世界”の物語です。

お楽しみ下さい。

プロローグ

燃え広がるように伸びる真紅の絨毯。

その延長上では、海のように真つ青な外套を身に纏った者達が綺麗に列を成していた。

隊列者達は皆が青地に剣を胸に抱いた翼を持つ女性、レギンレイブ王家の紋章を背負っていた。

ここに並んでいるのは、今日この日騎士の仲間入りを果たした者達。正装した騎士達は口を結び凛々しい表情で前だけを向いている。

その周りにはきらびやかな衣装を纏いし貴族達、それに同じ外套を纏った騎士が並んでいた。

「人が人より生まれ、精霊は世界より生まれる」

その大観衆の視線は一箇所に集中している。

視線の注目の中、男は跪いていた。

「精霊と供に存りし者、その軀に宿し理で法を世界に刻み」

目の前には細い腰から広がる純白のドレス。

サラサラと淡く煌めく腰まで伸びた白銀の髪

「この剣で神に奉仕するすべての人々を守護すべし」

キンッ

静寂を断ち切る抜刀の音。

白い手袋に肘先まで包み込まれたしなやかな指は銀色に鈍く光る剣を握り、一條に伸びた閃光は首筋に冷たくも熱いたぎりを感じさせて

いる。

白い肌にほのかにピンク色の花卉のような形の良い唇。

「我が名は、アシェラ バーンネット レギンレイブ」

凛々しく威厳に満ちた声はそこにいる全ての人達に響き渡り、石床にさえ染み渡る。

「アイン ソル ツウ アイ レウ アンテ」

剣先から滴り落ちる赤い雫は、首筋に当てられた刃から真紅の絨毯に吸い込まれ黒い染みを作る。

下げた頭上を感じる剣を思わせる鋭い視線、その瞳は美しく澄みきった紫色をしていた。

「汝、忠誠を誓いますか」

――この日、少女の為に一人の騎士が生まれる――

王都レギンレイブ。別名「騎士の国」。

人口約50万人が住む王都はレギンレイブ王が統べる大都市だ。

城壁に囲まれた王都は12の街に区分され、大きく分けると内周部に1〜6番街、外周部に面した街が7〜12番街と呼ばれている。

そして、12の街に囲まれるように中央にはこの国の象徴である国王の住まうレギンレイブ城がある。

その11番街・・・

「ばかやろつが・・・」

夜なのに真昼のように明るい広場の中央に、ソレはいた。

崩壊した地面に立つ真つ赤な大きな獣、それは精霊。

臓物に響くような雄叫びをあげる精霊は、身体中から火の粉巻き散らしているようだった。

それは紅く紅くその身から放たれているものは精霊自身を形創る魔力。

少年は思った。

これこそが精霊の本来の姿なのかもしれない。

むしろ、この姿を見てしまつと精霊を内包している人間にこそ恐れを感じてしまう。

長い長い大戦の中で誰かが言った。

『人は魔力という名の禁断の果実を手にした』

別の誰かが言った。

『魔法など手に入れなければ人は幸せに暮らせたのではないか』

もう一人が言った。

『だからこそ、人として地に降りたち選択するのです』

精霊と供に在るといふ運命は望めば手に入る訳では無く、どうするかは選択するという事

少年は一人選択する。

「いま、楽にしてやる・・・」

オレにはもう、殺す事でしか、この哀れな精霊を救う事が出来ない。
どろっと左目の瞳が赤く染まり、苦しげに雄たけびを上げる紅い獣
へと跳躍した。

プロローグ（後書き）

やっと載せだす事が出来ました。

だいが先の話まで出来ているのですが、投稿するためのチェックが
とても追いつかず少しずつこれから投稿していきたいと思えます。

登場人物一覧についても、伏線等をバラしてしまわないように投稿
具合に合わせて試行錯誤しながら載せたいですね。

ああ、早くお気に入り的人物の紹介をしたい・・・。

『精霊騎士物語』『ヒトというナの』

二つの世界の物語を少しでもお楽しみ下さい。

第一章 ” 精霊騎士と呼ばれる少年 ” 第一話 「騎士叙任式」 (前書き)

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争により、世界は二つに割れた。

そこで少年達は選択する。

こちらは” 精霊と魔法そして人間が当たり前に共存する世界 ” の物語です。

お楽しみ下さい。

第一章 ” 精霊騎士と呼ばれる少年 ” 第一話 「騎士叙任式」

―それほど遠くない昔、大きな大戦があった―

始まりは些細なものだった。

「精霊は使役するものだ」ある国が言う。

それに対し

「精霊はともにあるものだ」と別な国が言った。

異なる思想を持った二つの国は完全に決別。

精霊と魔法を駆使して戦い合い、争いは大陸全土に拡がり全ての人間を巻き込んだ。

数年の長きに渡る戦いは北と南に大陸を二分し、その戦争は『精霊大戦』と呼ばれた。

終わらない争いの中で一人が言った。

―滅ぶべきは人間ではないか・・・―

精霊とともにある人間と、精霊を使役する人間の戦いは仮染めの締結を迎えた。

決着が着いたのは、お互いの敵が変わる事で共闘したからだった。

終わらない大戦に割り込んだ第三者『精霊』

人と人による戦いは、人と精霊の戦いへと変わった。

人と精霊の争いは長く続かず、人が勝利した。

しかし、人は愚かなモノであり第三者の存在は少数を除き闇へと隠れ、人は二つに分かれたままであった。

結局、長きに渡る争いは両者を疲弊させ遺恨をかかえたまま争いの火は影を潜め、人々は平和を取り戻し平穏に暮らした。

その平穏が束の間だとは知らずに・・・

く 燻っていた争いの火種を抱えたまま精霊大戦の終結から20年く

――――

「姫様、そろそろ時間ですよ」

ステンドグラスの光に照らされる小さな精霊像の前で膝を着き、神に祈りを捧げる少女がいた。

石畳に花卉のように広がる純白のドレス。

糸のように細い髪は石床に着きそうな程長く、キラキラと小窓から差し込む朝日に照らされる髪の毛は宝石のように銀の輝きを放っている。

「式の準備を始めましょう」

重厚な造りの石畳に木造の長椅子が立ち並ぶ最後尾から、声をかけたのは白い司祭服を着た青年。

メガネをかけた清潔感溢れるこの青年が国の司祭だ。

「叙任式の準備に戻るぞ」

柔らかな司祭の物腰とは対照的な厳格な声。

「それと、誕生日おめでとう。アーシェ」

司祭の隣から声をかけた男性は白髪を後ろ髪でまとめていた。その声を聞いて、少女は頭を上げてゆっくりと瞼が開かれる。大きな瞳は紫色をしていた。

王都レギンレイブ。

人口約50万人が住む王都はレギンレイブ王が統べる大都市だ。城壁に囲まれた王都は12の街に区分され、大きく分けると内周部に1〜6番街、外周部に面した街が7〜12番街と呼ばれ、12の街に囲まれるように中央にはこの国の象徴である国王の住まうレギンレイブ城がある。

そしてこの国はレギンレイブの他に別名がある。

『騎士の国』

この国は騎士を育て、騎士となった者は自国と諸外国を守るために各国へと派遣される。

そして、今日は精霊降臨祭。

新たな騎士が誕生する特別な日だ。

この国で騎士見習いとして騎士の元で鍛えあげられ認められた者は、王の洗礼を受ける事で正式な騎士となる。

外周部にある11番街

ここは自然が豊かで比較的一般階級の人が多く住む住宅街。
その民家が立ち並ぶ街道から外れた小高い丘の上の一軒家に、騎士
になるうとする少年がいた。

ー起きて！

「いいかげん起きなさいよアイン！」

ガクガクと揺らされて黒髪の少年が眼を開ける。
ぼやけた視界に入るのは、茶色の瞳の少女。

「うん・・・起きてるよティア」

それが赤い髪が印象的な彼女の名前。
近所に住む彼女はいわゆる幼なじみで、小さい頃から寝起きが悪い
俺をよく起こしに来てくれる。

「今日は早く無いか・・・？」

上半身だけをベツトから起こして、寝ぼけ眼でティアを見る。

燃える様な肩口までの長さの真っ直ぐな赤い髪。

猫の様な大きな瞳は愛らしい茶色で、今は呆れ顔でアインを見つめている。

太もも辺りまで剥き出しにしているスラツと伸びた足。

白い半袖のジャケットを着て、その上から茶色い革のベルトを腰に巻いている。

首に付けている赤色の首輪は彼女のトレードマーク。

短いパンツを好んで穿く活動的なティアは今日も朝から元気だった。

「こんな日にお祈りもしないで寝てるのはアインくらいだわ。」

腰に手を当ててため息を吐くティア

「それと、さ・・・」

僅かに頬を染めて、首輪をもじもじといじりだす。

緩めているとはいえベツト用の首輪を付けれる程、ティアの首筋は細い。

「誕生日おめでとうアイン。」

早く着替えて来なさいよ、バカ。と言って自分の家へ帰るために部屋から出て行った。

「祝ってから罵るか・・・」

照れてるティアを弄るのがアインは楽しみでもあったが、誕生日を

祝ってくれたのがさりげなく嬉しかったし逃げられたから仕方ない。

「んじゃ、さつさと起きて朝食でも食いに行くか」

アインの毎日は朝、幼なじみのティアに起こされる事から始まる。

着替えてからパン屋を営んでいるティアの家に行き、朝食と一緒に食べる。

これが一人暮らしをしているアインの毎朝の習慣であり、ティアの習慣だった。

さして広くも無いアインの部屋には、窓が二つと小さな椅子とテーブル、ベッドと箆笥の他にはティアの趣味で集められた小物コレクション（アインにとっては良い迷惑だが怒るので何も言わない）が並べられた棚がある。

窓の近くの椅子にティアが用意してくれた服が畳まれて置いてあった。

パジャマから用意してくれた白いシャツと黒いズボンに着替えて、二階にあるアインの部屋から一階に下りていく。

アインの家は二階建てで二階にあるアインの部屋と一階の客間以外はまず使われていない。

空室と今は使われていない部屋を合わせると全部で7部屋ある。

階段を下りると玄関フロアには丁度、老女が家に入って来る所だった。

「おはよう。ばあちゃん」

「ああ、おはようさん・・・アイン様」

彼女はテミ婆ちゃん。

婆ちゃんといっても祖母では無く、血縁関係ではない。

彼女はオレが生まれるずっと前から、今でもこの家を面倒みてくれているオレに残された数少ない大切な家族だ。

夫を随分昔に亡くし、ここから数百メートルの家に一人暮らしをしている。

何年か前に、一緒に暮らそうと言っているが亡きご主人と想い出の詰まった家を離れられないのだそうだ。

その気持ちはアインも、痛い程分かるから、それ以来口にはしていない。

「誕生日おめでとうございます。奥様が今日という日をどんなに喜んでなっていた事やら・・・」

「喜んでくれてるかな・・・母さんは」

ふと、視線を向けた方向の部屋。

今は使われていないその部屋は、母の部屋だ。

母さんにずっと仕えていたばあちゃんは、涙を流しながら微笑んでいた。

アインにとって誕生日は喜んで良いのか悲しめば良いのか分からな

い特別な日。

しかし、自分を祝ってくれた幼なじみと、そんな幸せそうに笑ってくれるばあちゃんの、家族の姿が心底嬉しかった。

「ありがとう。そうだな、今日という日は良いモノなんだよな。」

そう思うと身体が軽くなり、よりお腹も空いてきた。

それじゃ、行ってくるよ。と婆ちゃんに手を振って家を出て行く。

「行ってらっしゃいアイン様……。」

玄関先で婆ちゃんは目元にハンカチを当てながらいつまでも深々と頭を下げたままだった。

我が家を後にして、緩やかな傾斜を下っていく。石畳になっている通りの先には朝を迎えたレギンレイブの街が広がっていた。

朝日でグラデーションに照らされた街はいつ見ても気分を爽快にさせる。

通り沿い並ぶ１１番街の家々は、煙突から朝食の匂いが上り始めていた。

ティアの家は、傾斜を下ってスグの１１番街のメインストリートに

面した所にある。

赤い屋根のレンガ造りの建物で入口は二つある。

一つが家族用の家の入口。もう一つがお客様用のパン屋の入口だ。自宅兼店舗のパン屋はこの１１番街で人気のパン屋で、別の街からもよくお客さんが買いに来る。

「おはようオバサン」

「あら、おはようアイン」

ティアの家に入るとスグに見つけたのテーブルに食器を運んでいたティアのお母さん。

俺が小さい頃から騎士として外国へ派遣されているティアの親父さんに代わり、パン屋を営みながらこの家を支える大黒柱だ。

「アイン！おはよう！」

「やっと来たあゝ。僕もう、お腹ペコペコだよ」

開口一番挨拶と共に飛び込んできた金髪の女の子が MARIA で、テーブルに食器を運ぶおばさんの手伝いをしている茶髪の男の子がルーだ。

「おはよう二人とも」

MARIA が 7 才、ルーが 13 才で二人はティアの妹と弟。

ティアは三人いる姉弟妹で一番上の長女だ。

「やっと来たわね。ちょっとアインも手伝って今出来たところだから。」

エプロンを付けたティアが台所から顔を出していた。
朝食はいつもおばさんとティアが作っている。

「了解。マリアも一緒に準備しようぜ」

「うん！」

しがみ付いていたマリアの小さな手を握って台所に歩いていく。
これも、毎朝お決まりの出来事だ。

「そういえばアインお誕生日おめでとう！これで今日からティアと同じ17才ね。」

「そうよ母さん。だから私と一緒に儀式に出られるのよ」

食卓に並ぶパンやサラダ、食べ盛りの子ども達に合わせて作られた
数々の料理を囲んで席に着く。

皆で揃って朝食を食べる時、四角いテーブルの席は決まってる訳じ
や無いがいつも同じだ。

オレ、ティアが並んで、マリア、そして対面側におばさん、ルーの
位置。

一番下のマリアをティアとおばさんで挟む座り方だ。

まあ食べ終る頃には、トコトコとやって来てちよこんとオレの膝の
上に移動して来るのだが。

「なら、今晚は二人のお祝いとアインの誕生日のお祝いをやるうか
しら！」「わあい！お祝いお祝い！」

席をアインの膝へ変えて喜ぶマリア。

一人っ子のアインにとって多少食べづらかったりもするが、この時
間は幸せだった。

「良いのかいオバサン？」

ハッキリ言ってティアの料理も美味いが、オバサンの作る料理はパンだけでなく全部がメチャクチャ美味しいのだ。

「もうダメよ母さん。」

それは嬉しいけど、私とアインは今夜式典のパーティーがあるんだから」

「そうよね。今年は姫様が17才で成人なさるから、儀式を行う事になったのだね」

「そうよ。王様が床に伏せてから久し振りの儀式なんだもの、20人も新しい騎士になる訳だし盛大なパーティーになるらしいわ。儀式に出る私達が出ない訳にはいかないじゃない。」

「そっか、ゴメンなルー。オバサン」

膝の上で小さくなるマリアの頭を撫でながら、オバサンに謝る。

向かいに座るルーも、お兄ちゃんだからか声に出して喜ぶ事はしなかったが、嬉しそうにしていたからだ。

それなら婆ちゃんも誘おうと思っただけにアインも残念だった。正直城のパーティーなんかより、こうして大切な人達に祝って貰った方が余程嬉しい。

しかし、今日行なわれる叙任式はレギンレイブ王が病に伏せてから、ここ数年間から行われていなかった久し振りの儀式。

当然、儀式が行われていない間は一部の例外を抜かせば新しい騎士は生まれていない。

久し振りに儀式が行われる事になったのは、病のレギンレイプ王の病状が快復した訳じゃ無い。

病のレギンレイプ王に代わり、今日、17才の成人となる王女が行う事になったからだ。

おかげで17才になったアインとティアも見習い騎士から正式な騎士になる為に儀式に参加出来る。

「それにしてもシェーラ姫はどんな方かしらね」

「そついやアイン兄ちゃんも城で見たこと無いの？」

オバサンとルーの疑問にアインも首を傾げる。

『アシェラ王女』

その名前を聞いておきながら見た者はまずいない。

噂と想像は広まり、綺麗だとか、大女だとか色んな話を聞くが、噂の王女を皆『シェーラ姫』と呼んでいた。

街ではどこか堅苦しい『アシェラ王女』よりコツチの呼び名の方が馴染みがあるのだろう。

「うーん。城の人達でもほとんど見たことも無いらしいな。

ジジイは会ってるらしいけど、一部の人以上は姫様のいる塔に近付く事も禁止してるしな」

「コッラッ！ジジイじゃないでしょう！

もうアインの先生じゃない！」

「良いんだよ！実際爺さんなんだから！」

ジジイは俺が見習いとして付いていた騎士で、全ての騎士達を率いる將軍でもあるが齡90才、立派な老人である。

「あらあら、ダグザさんをジジイなんて呼んじゃダメよ。まだまだ元気なんだから。」

ダグザというのがジジイの名だ。

オバサンもティアの親父さんもジジイとは仲が良い。

実際に、ジジイはこのパンがお気に入りです。部下を連れてよくパンを買いに来るのだ。

10才からジジイに見習いとして付いていた俺は、何度となくパンをさせられていた。

ちなみに、ティアはヴァーリという騎士に見習いとして付いていた。

「まあ、近いうちに街を凱旋するらしいから今日じゃなくても皆見れるさ」

限られた一部の人間を除き、誰も見たことの無い若き王女。数年振りに行なわれる儀式。

それだけに、今日の叙任式は多くの参加者が集まるだろう。

「ねえねえアイン！今日の私どおかな？」

「んっ、今日も相変わらずカワイイよ」

城に行くまでの間、まだ時間があるアインは食後のお茶も兼ねて、
いまだティアの家に行った。

ティアとオバサンは朝食の後片付けの後、店舗の商品であるパンを
作るのに大忙しだ。

さつきからパンを焼く香ばしい匂いが室内に立ち込めている。

たまにオレも手伝ったりもするが、今日のオレは食後からずっと
膝に座ったままのマリアとルーの相手をしていた。

膝に座ったまま終始ニコニコ顔をマリアはお世辞抜きに可愛らしか
った。

「久しぶりにこの髪型にしてみたのっ！」

金髪の少女は前髪を上げてカチューシャで留めている。

少し思考を探り、脳内のアルバムをめくっていく。

・・・見つけた・

「えっと、確かその髪型は・・・ああ！半年振りか！」

「エヘヘ〜当たり〜」

「相変わらず記憶力が良いのねアインは」

手伝いが終わったのかポットに紅茶のお代わりを持ってきたティア。
おつかれっと言葉をかけると隣に座ったティアは

「お母さんと私の作るパンを誰かが喜んで食べてくれる。」

ポットから自分のカップに注ぐ

「そう思うと嬉しくて疲れなんて感じないわ。あちいうっ！ふう〜ふう〜」

基本的に猫舌なティアは、案の定淹れ立ての湯気が上がる両手で持ったカップにそろ〜っと舌の先を伸ばしてはビクッと全身を震わせている。

「アハハッ相変わらず熱いのが苦手なんだな」

「こればかりは鍛えてどうにかなるもんじゃないの」

いつも聞きなれたセリフを笑って言う幼なじみを見てて思う。

家族思いで弟妹思い、人に尽くすのが好きなティアはいくら父のよう
に人を守りたいからだといっても剣を振るう騎士なんかより、
パンを作っている姿の方が似合っている。

いつの頃か、この考えを口に出した時にえらい剣幕で怒られてしま
って、今じゃその理由も聞き出せない。

「アインアイン！

じゃあ姉ちゃんの胸は先月に比べておつきくなった！？」

「ぶっ！？ア、アンタ何て事聞くのよ！」

テーブルに身を乗り出して声を出すルーの爆弾発言に口に含んだ紅
茶を噴出すティア。

ティアの気持ちも分かるがオレとしても・・・聞かれたからには仕方ない！

「んん、これは・・・」

目の前で顔を真っ赤にして震えているティアの胸元に視線を向ける。

・思考を再び巡らせる・

左手で左目を覆うと、脳内に浮かぶのは写真の様に正確に見たものと寸分違わぬ記憶たち

「ア、アア・・・」

ソコにある記憶には残念な結果しかない。

「全く変わらんっ！」

「アンタも真面目に答えるなああっ！！」

「グワハアゝっ！」

声に出した瞬間にティアの拳によって、身体は家の壁面ごと通りに吹き飛ばされていた。

「くたばれ変態っ！巨乳マニアっ！」

「ティアゝそういうのは外でやってゝ。

壁直すの面倒なんだから」

穴の向こうからそんな言葉を言っている二人の言葉を最後にアインの記憶は途絶えた。

いちおうティアの名誉のために言っておくがティアの胸は決して小さくなく理想的な大きさと言っておこう。

通りに転がるアインを街行く人々が笑って見ても誰も助けてはくれない。

これも、この街では見慣れた光景だった。

「ハイ！ 私からのプレゼント！」

儀式の時間も近づき、そろそろ行く準備を始めた頃だった。

背伸びして頬に口付けするマリアは、やはり腕にしがみ付いて離れない。

父親としばらく会っていないマリアはアインが大好きで、ティアの家にいる間中はいつもくっついてる。

「おませさんだな、マリアは。」

「そっぴや、ティアからのプレゼントは？」

「ほお、拳だけじゃ足りないよ・・・」

拳を握り締めてすくむティアの姿に慌てて首を横に振る。

「そんなこと言っていないでさっさと着替なさいよ」

そう言つて、黒と赤で作られた生地に金の刺繍が入った服を手渡し
てくる。

「どうしたんだこれ？初めて見た服だなオヤジさんのか？」

ちよつとした豪華な服は儀礼用なのか作りがしっかりしていて今
で見たことが無い。

アインの服は小さい頃はバアチャンが用意してくれていたのだが、
眼が悪くなつてからはもっぱらティアが選んでいた。

「いいから早く着てみて。サイズが合わないかもしれないんだから」
言われるがままに袖を通してみる。

「ピッタリじゃん」

「ちよつともう、えりが立つてるよ・・・」

首に手をまわしてエリを直してくれるティア。
赤毛が揺れて茶色の愛らしい瞳が近くにある。

「うんっ、カッコイイっ」

自分の見立てに満足したのか嬉しそうに笑うティアはなんていうか・
・・・卑怯だ。

「勿論オレが、だろ？」

「なあゝに言つてんのよ。」

洋服の事に決まってるでしょつ。バカなこと言っていないで行きましょつ」

だから、照れてそんな事を言ってしまう。

それも分かっているのか付き合いの長い幼なじみの返しは素早い。

「まっ、でも・・・

中々似合ってるよ！アイン！」

やっぱり、そんなティアは卑怯だ。

何も言い返せない。

「じゃあ行ってくるわね」

「行ってきます」

いつてらっしやゝい、という元気な声に押されてティアに続いて玄関を出て行く。

その時、ティアには聞こえないぐらいの小さな声が聞こえた。

- 後でティアにお礼言っておあげてね。

その服あの子がアインの誕生日プレゼントにつて、用意したんだから・・・-

石畳の緩やかな傾斜の丘の先に輝くような白い城が建っていた。
レギンレイブ城である。

白い石材を基調にして作られた城は、太陽の光を浴びて騎士の国に

相応しい威光を放っている。

城内に建つ一際大きな二本の巨塔はそれぞれ、騎士達の為の鍛練所や武器庫等がある「騎士の塔」、それと主君であるレギンレイブ王やその家臣が住む居塔「王家の塔」だ。

二つの塔の天辺には翼を持った人間が剣を横に抱えた姿、レギンレイブ王国の紋章が入った旗がなびいていた。

そして、二つの塔に隣接して間にあるのが宮廷であり、礼拝堂や今日の式典が行われる玉間がある本館だ。

玉間は、異様な雰囲気にもまれていた。

荘厳な石造りの柱と壁面に囲まれた室内には、豪華な衣装にもまれた貴族や王族の他、青い外套にもまれた騎士達が立ち並んでいた。中央には赤い絨毯が敷き詰められ、赤い絨毯の先の壇上には金と赤で彩られた玉座があった。

その対面側では、今日これから新たな騎士として生まれ変わる200人の者達とその玉座に座る者が入ってくる瞬間を今か今かと心待ちにして並んでいた。

やがて、玉間の脇にある木製の扉が開かれ、数人の騎士や神官が入って来た後

「レギンレイブ王女！

アシェラ バーネット レギンレイブ！のお目見えであるっ！」

その言葉にざざっと、全員が片膝を地に付き頭を垂れ、一斉にその空間が引き締まる。

まず出てきたのはこの国の司祭。

司祭服に身を包まれたメガネの青年が司祭様だ。

ついで、出てきたのは二人の騎士。

開かれた扉の両脇に立つ、護衛の騎士は二人共よく知った顔だ。褐色の肌に白髪の手髪で21才長身の青年がウ、アーリ。

ティアの付いていた騎士であり、あの若さで騎士隊を率いる騎士隊長を務める実力者だ。

もう一人が左目に眼帯をした筋骨隆々の巨漢、通称「ジジイ」のダグザ。

あんな見た目をしているが齡90才というデタラメなジジイだ。

そして、ついにその瞬間はやってきた。

光輝く純白のドレスに身を包まれて、腰まで伸びた美しい銀の髪は光沢を放ちフワフワと風より軽く揺れていた。

陶磁器のように白い素肌に薄い桃色の可愛らしい唇。

大きな瞳は透き通った紫色をしていてどんな宝石よりも美しい。真っ直ぐ伸びた背筋に玉座に進むゆっくりとした足取り、堂々とした立振る舞いは神々しささえ感じてくる。

息を呑む美しさだった。

玉座に座る姿は、まるで絵画を見ているような錯覚で魅とれてしまう。

様々な彫刻が施された柱や鏡の様な大理石の床も、ここにある空間は彼女という芸術を飾るための額に過ぎなかった。

ここにいるほとんどの人間は初めて見るアシェラ王女の美しさに誰もが眼を奪われていた。

本来は、王女が入って来た時に管楽器を吹くはずだった音楽隊も、その仕事を忘れて見惚れていた。

アインもその一人であり、当然、これまで姫の御身を見る機会は無かった。

しかし、それもほんの僅かな間だった。

王女の次に入って来た人物。

白髪を後ろで結わえた男。

この国の総司令官であり「聖騎士」と呼ばれる騎士最高の称号を与えられ、ダグザとレギンレイブ王に並ぶ大戦の英雄だ。

その男が視界に入った瞬間から、アインは全ての思考さえもその男に注がれていた。

嫉妬にも似た、怨嗟の感情が浮かび上がる。

- そんなに姫様が大事かよ！

母さんの命日だって帰って来なかったじゃないか！ -

それは遠回しのわがまま

アインの母はアインを産んでスグに亡くなっている。

つまり、今日という日はアインの誕生日であり母が自分を生んで死んだ命日でもあった。

しかし、あの男は10年もの間帰って来る事は無かった。

その時、視界の中でピコピコと動くモノが見える。

いつの間にか集中していた視界は広がると動いていた正体に気づいた。

- 何やってんだあれ？

動くモノの正体、それは王女の手だった。

儀式の始まっているというのに、王女はコツチに向かって手を振っている。

吸い込まれる瞳は自分を見ているようだった。

「姫様がオレに向かって手を振ってる？」

その言葉に後ろを振り向けば誰もが似たような言葉を口にしていた。要は皆が自分を見ていると思っていた様だ。

- バカバカしい・・・

王女の前で文言を唱え続ける司祭がそれに気づいたのか、わざとらしく咳をするとその手は引つ込められた。

しかし、それでもなお視線はコツチを向いていた。

- もしかしてヒマなのか？

この場にいるほぼ全員が先ほどから彼女に視線を向け続けているのに気づいていないとは思えない。

その中で儀式の最中に手を振ったりするのは、ここに並んでいる新米の騎士をからかっているのかもしれない。

そんな事を考えている間に儀式は進み、次々と名前が呼ばれていく。もうすぐ、自分の出番だ。

名前を呼ばれて王女の前に行く。

それは、王女の斜め後ろにいるあの男に近づくという事だ。

- もうすぐだ、もうすぐであの男に近づける -

「アイン ソル ツヴァイレヴァンテっ！前へ！」

王女が声に出す名前に周囲がざわつき出す。

大観衆の王女に向けられていた視線は一気に王女の前に行くアインへと向けられた。

『アイン ソル ツヴァイレヴァンテ』

それが王女の前で片膝を付く少年の一生に纏わり付く名前だった。

「人が人より生まれ、精霊は世界より生まれる」

凛々しく威厳に満ちた声。

しかし、アインはスグ近くにいる憎き男を前にしてなんて王女の言葉なんて聞こえちゃいなかった。

「精霊と供に存りし者、その軀に宿し理で法を世界に刻み」

無表情の白髪のを睨みつける。

男の名は、アッシュ。

『アッシュ ソル ツヴァイレヴァンテ』

アインと同じ青い瞳をしたその男は紛れも無いアインの父親だ。

久し振りに交わす視線と親子対面は、王女の後ろから見下ろす父親と、片膝について見上げる息子の図だった。

「この剣で神に奉仕するすべての人々を守護すべし」

10年振りに見た父親の姿。

10年でやっと近付けたこの距離。

―アンタは息子の誕生日と自分の妻の命日――にソコで何を
してやるっ!!

立ち込める怒りが沸点を越え、腰が浮き上がる瞬間だった

キンッ!!

まさに爆発寸前だったアインの怨嗟の炎を断ち切るような抜刀。

肘先まで包まれた白い手袋が握る鈍く光る剣は、閃光のように首筋
へと続いている。

いつの間にか首筋に当てられていた刃は氷のように冷たく、首筋か
ら抜けていく熱いたぎりが頭を冷静にしてい

く動けば斬られる・

刃先から伝わる波動に、初めてアインは彼女の瞳を正面から見つめ
た。

「我が名は、アシエラ バーネット レギンレイブ」

あれだけ心を燃やしていた火は水のように静まっていく。

「アイン ソル ツヴァイレヴァンテ」

彼女の言葉が沁み込んでいく。

「汝、忠誠を誓いますか」

間近にあるどこまでも真っ直ぐな紫水晶の瞳。

その瞳を見ていると、心臓が激しく鼓動する。

「オレ、は・・・」

剣先から滴り落ちる赤い雫は、首筋に当てられた刃から真紅の絨毯に吸い込まれ黒い染みを作っていた。

ざわつく儀式の中、アインはその場で誓うことが出来なかった。

白く聳え立つ騎士の塔の前、城の敷地内にある屋外鍛練場は、騎士叙任式の後に行われる御前試合で盛り上がっていた。

幅50メートルの四角い石壁に囲まれた中で新たな騎士となった者同士が試合をして王女にその実力を拝見してもらったためだ。

刃引きされた武器での試合だったが、武器は好みのものを使えるし

魔法に関して制限は無い。

一般人はいないものの儀式参加者はそのまま会場に流れていき、試合をしない者たちは全員が観戦者となっている。

闘技場となる鍛錬場を中心におわん型に見下ろせるように作られている席に座った観戦者達は高い位置から見下ろすように歓声を上げていた。

当然そこには王女とアッシュもいるわけで、良い所を見せ付けようと新米騎士達は張り切っている訳だ。

試合は無作為に決められた一対一の一回勝負。

つまり、今日騎士になる者は200人だから丁度100組の試合が行われている。

試合が行われている会場の裏手、数メートルはある高い石壁の日陰に男達はいた。

試合は既に半分くらい終わっていて、アインはあと数人の後に来る自分の出番を新参の騎士達と一緒に待っているところだった。

そんな中、目の前にいる男は暑苦しかった。

「よお坊主！さっきは面白かったな！」

ガツハツハ！と豪快に笑う男は、アインの師である騎士ダグザだ。180センチはあるアインの長身を軽く上回る巨漢の持ち主で、左目は大戦時に負った傷らしく、装飾が入った黒い眼帯を外す事はない。

「もう坊主じゃねえ！今日から17だ！」

「オレから見りゃオマエもオマエのオヤジもまたまだ坊主よ！」

『聖騎士』とまで呼ばれた親父が見習いの時に付いていた騎士というのが、目の前にいる筋肉ムキムキで争いでも自ら最前線に行く90歳から見れば、確かに坊主かもしれない。しかし、

「アイツと一緒にされんのは我慢できねえ！」

「相変わらずだなオマエは」

ジジイのため息が聞こえたと思ったら目の前に星が飛んだ。

「少しは姫様を見習え」

ゴソツ！と頭蓋骨に拳を当てられたときは石でぶん殴られたと思った。

ティアとは質の全く違う拳に思わず蹲る。

ティアのがキレの良いパンチなら、ダグザの拳はひたすら硬くて重いのだ。

骨まで響く痛みで頭を撫でているとガハハと頭上から聞こえる笑い声が少し苛立たしい。

- 姫様は今日この日まで塔から出ることさえ許されていなかった。

そんな姫様の前でオマエのさっきの行動はなんだ。

彼女の大人の行動に感謝するんだな -

そんな言葉が聞こえてきて、痛みは引いたのに地面からしばらく立ち上がることが出来なかった。

「やあっ大丈夫かいアイン」

「いや、まだ頭がクラクラするぜ」

金髪を揺らせてくくつと笑っているコイツはシン。

同じ年のせいかな、今は同じ11番街に住んでいて仲の良い男友達だ。

「そりゃ災難だね。しかし、シェーラ姫もアレはないよな」

11番街の人間は王女の事を『シェーラ姫』と呼んでいる。

シンの言ってるアレとは、シェーラ姫が刃を首筋に当てた事だろう。

本来は肩口を剣の腹で叩くもので、決して首筋に寸止めとはいえ抜刀するものではない。

ダグザの様にその真意に気づいていない者から見れば、

- 斬り付けたシェーラ姫に対してアインが返事をしなかった -

おそらくその様に見えたのだろう。

「しかし、どうするんだいソレ・・・」

手に持つ青い外套。

それはレギンレイブ王家に認められた騎士だけが身に纏うことを許されるレギンレイブ王家の紋章が入った外套だ。

結局、儀式の後で司祭から渡されはしたもののシェーラ姫から肩にかけられる事は無かった。

これを着る者は、自らの背にある王国を守るという責務と誇りをその肩に乗せる覚悟が無くてはならない。

誓いをしなかったアインは騎士になる資格はあっても、騎士になる事は認められていないのだ。

「なれないなら仕方ないさ。それに・・・」

誓いを問われた時に言葉が出なかったのは、首筋に剣を当てられていたせいでも無けりやシエーラ姫に腹を立てた訳でも無い。

あの紫色の瞳は、心の奥までも見透かしているようだった。

「オレは心の底から騎士に成りたかった訳じゃなかったみたいだ」

結局は他の誰でもない自分自身の問題。

- 問題は、それだけじゃない -

場を考えずにいたアインを鎮めて場を治め、かつ、アインを悪役にせずに悪役を引き受けた。

あそこまでされなければあの時の自分は止まらなかっただろう。

大多数の人間はシンのようにあの場でのアインの愚行と、それを止めてくれたシエーラ姫の器量と采配に皆気づかずにいる。

アインも先ほどダグザに言われなければ気づかなかった事だ。

- 彼女にはなんとかして謝らないとな・・・ -

手の内にある外套を見ると、なにやら遠くが騒がしくなってきた。

「お、丁度ティアの試合が始まったんじゃないかな？」

隣の会場から盛大な歓声が聞こえてくる。

「ああ、アイツは城の中でも人気者だしオレと同じ時間くらいだから、この歓声はティアの試合だろうな」

対戦相手が決まった時ティアが自分の対戦相手じゃないことにほっとしたが、いくらティアが強いとはいえ別な会場で試合するティアが少し心配だった。

――
――

分厚い岩石の中はとにかく暑い。

足元の硬い土は所々深くえぐれ、繰り返された先の試合を物語っている。

四方を取り囲む壁の向こうには何百という視線。

それらは好奇心と期待で塗り固められたものだ
敵意でも殺意でも信頼でも無い視線。

「訓練でもない闘いでもないただ、観せる為の試合」

アインはこれだけ多くに観られながらする闘いは初めてだった。

しかし、緊張も何も無かった。

腰にぶら下げられた鞘にあるのは刃引きされた当たり所でも悪くない限り死ぬ事はまず無い剣。

ここには命のやり取りも、得るものも何も無い。

「オレはジェラルだ」

だから、目の前にいる剣を構えている相手も、大勢に観られていようとも関係は無い。

「アインだ」

「知ってるよ。良いのか後ろの名前は言わなくて？」

ただ気になるのは上で見ている二人だけだ。

「その名前をここで言う必要は無い」

「隣の会場では」

――

刃引きされた少し短めのショートソードを二刀構えたティアは少し劣勢だった。

風で前髪が持ち上がると、緑色の刃が飛んでくる。

後ろに高く跳躍して刃をかわし、風使いの騎士と距離を取る。

「やっぱ、魔法は少し不利、か・・・よしっ！」

右手に持つ剣を青い外套の下、腰のベルトの背にある鞘に挿して意識を集中する。

空になった右手を前方に突き出すとティアの意識に反応して赤く発光していく。

手の周りに絡み付いて光るモノはティアの魔力。光る色はティアの心の色であり属性だ。

そして、その言葉を心で詠み上げる。

・精霊と供に存りし者

・その軀に宿し理で、法を世界に刻む

・人が人より生まれ、精霊は世界より生まれる

「来いっ！！」

右手から解き放たれた赤色の魔力は詠唱の言葉を帯状に円を形を作り、魔法陣を前面に描いていく。

赤色の浮び上がった魔方阵は、そこに描かれた法を持ってティアの精霊を世界より呼び出す。

光より生まれたモノはなんとも可愛らしい叫び声を上げた。

ティアの首にかかる赤い首輪と同じ物を着けた猫。

それがティアの精霊だった。

「ヘタに加減してあなたに余計な怪我をさせたくは無いの」

腰から剣を抜いて再び二刀を構えるティアと赤茶の毛並みをした精霊が並ぶ。

「悪いけど、一気に終わらせて貰うわ！」

くアインの試合会場く

盛り上がる歓声と熱気の中、アインは既に戦っていた。

「精霊もいやしないのに良くその年で騎士になれたもんだ！さすが英雄様の御子息ともなれば違うねえ！」

目の前に振り下ろされる剣をアインは身を僅かにずらしてかわす。

スグに真横に振られる横薙ぎは、一足飛びの元に後方へと跳躍する。

「『精霊騎士アイン』 オマエの噂はオレの国でも有名だったぜ！」

騎士は走り、着地したアインに向かって縦に剣が迫る

「英雄の息子は精霊もいなくせに精霊のようだったな！」

が、剣は空を切り地面をえぐるだけだった。

「ちっ！」

舌打ちをする男は20才程の外見。

ジェラルルという名前のアインが今相手をしている騎士は、この国で見たことが無かった。

おそらく、別な国に派遣されている騎士の見習いになって、今日の儀式に来たのだろう。

「あそこで見ている親父もさぞ鼻が高いだろうなっ」

ジェラルルはアゴで、闘技場の石壁の上の方向を指す。

アインは、その先を見ずに答える。

「違う。アイツはオレが見習いになった時から何年も話さえしていない」

「ならお前は何ために騎士になった！息子のお前なら英雄のしてきた事は分かるだろ！」

再び剣を肩に担いで疾走してくるジェラルルの言いたいことは分かる。

・アツシュは、元々騎士でさえなかった。

生まれがものを言う旧騎士の体制では貴族しか騎士に成り得なかったからだ。

しかし、かの大戦で戦った一人の男は強かった。群を引き入る名家の騎士なんかより、個である一人の方が強かったのだ。

そして、かの大戦は次烈を極めた。それこそ、身分に関係なく皆が戦う程に。

そして大戦は終わり、いつの間にか男は英雄になっていた。

・ただその男には欲が無かった

望めば国さえ得られただろうに、男が自ら望んだものは二つだけ。住んでいた街の自由と、旧体制を崩して才能ある者でも騎士になれる現体制を作っただけだった。

しかし、望まない男に対して国は何かしらの恩賞を与えようとした。男が手にしたのは、腹の足しにもならない称号と名声だった。

後に、男は国は総司令官という地位を与えられ城に住むようになった。

「かの英雄に今の体制を作ってくれた事に感謝しよう、おかげでオレもこの力で騎士になることが出来た」

ジェラルルが剣を持っていない右手を前に伸ばす

「だが、オレはこの力でのし上がり富を手に入れる！」

赤い輝きとともに魔方陣が浮び上がった。

ーグオオオオオオオオオオオッ！！

現れたのは大きく茶色の毛並みをした獣。

二本足で立っていた長い爪を持った獣は、軽くアインの背丈を上回っている。

ーウオオオオオオーッ！！

咆哮とともにドスンと両手を地面に着いたジェラルルの精霊は四足を使ってアインへ突進してきた。

直進的な動きを跳躍して宙へ逃げる。

着地した所へ向かってジェラルルと精霊から放たれた赤く燃える火の玉が迫っていた。

「ちいっ！」

アインは火の玉よりも早く避けて、炎は地面だけを黒くする。

精霊が向かった反対方向、ジェラルルが背面に振り向くとアインは既にそこにいた。

「いつまで舐めてんだてめえ！何で戦おうとしねえっ！剣を抜け！魔法を使って見せろ！」

ジェラルルが怒るのも無理はない。

試合が始まってからアインは避けるだけで、まだ一度も攻撃を仕掛けてはいない。

それどころか、腰にぶら下げた剣は鞘から抜いてさえいない。

青い外套も纏っていない白いシャツの少年は、精霊とジェラルルに攻め立てられた今でさえも左目に手を添えているだけだった。

「噂の英雄の息子様は腰抜けなのかっ!？」

持っていた剣を地面に突き立てて、観衆を焚きつけるように吠えるジェラルル。

「それとも、精霊もない剣も魔法も使えないから『精霊騎士』なのかっ!？」

そこで見ている者達に聞かせるために上げた声高らかな挑発は、見ている観衆を大いに盛り上げた。

その歓声に答えるようにジェラルルは『魔法』を唱え始めた。

アインはジェラルルが己の魔力を用いて世界に刻み込んでいく魔方陣を見つめる。

アインは展開されていく赤い魔方陣を一瞥すると、白熱する会場とは裏腹に低い声で答える。

「魔法や精霊はオマエが思っている程簡単なもんじゃない。

そんな事も分かっていないヤツを相手するのに剣も魔法も必要ないからだ」

左目を塞ぐように覆っていた手をゆっくりと外す。

現れたのは、真紅の左目。

青色の右目と、明らかに試合前とは違う紅く光る左目。

少年は剣を握む事はせずに、空いている右手を使って手招きする。

「それを実力の差で教えてやる」

そのあからさまな挑発に会場は最高潮に達した。

闘技場を囲う席より更に上。

二つの会場を見下ろせるように特設に作られた高台に、その様子を楽しむ者がいた。

「ねえオジサマ！アインは剣も魔法を使わずに何をするのかしら！？」

椅子から二人の騎士を交互に見ながらアシェラは、今、隣にいる男の息子がこれから何をするのか楽しみで仕方なかった。

「眼を反らさない方が良いア－シェ」

自分を『ア－シェ』と呼ぶアッシュの言うことは、何でも言う通りにしてしまうシェーラは、見逃さないようにしなきゃ！、とスグに視線を中央の少年に向ける。

－それにあんなったアイツは強い。一瞬で決まるぞ－

珍しく口数が多いから、横目でちらつと見た。

－オジサマもやっぱり息子を見て嬉しいのね－

少年の父親の横顔は、息子の姿を眩しいものでもように穏やかに眺めていた。

アインは試合開始直後からずっと観察していた。

『魔法』

魔力を触媒に、己が持つ属性と法を世界に刻み込む事で具現化し発現するモノ。

『魔法』は、体現されるモノはあくまで本人の魔力のみで構成される。

それは、己が世界に刻む法則に僅かでも綻びがあれば、発現しようとした『火』その分の魔力は体現しようとした本人へと還っていく諸刃の剣。

目の前のジェラールが具現化している円形の魔法陣。

その魔方陣から発現されるのは「火球」の魔法。

火を発現し魔力が無散しないよう固定するだけの火の属性としては基本の魔法だ。

魔力量により発現する火の大小差は出るものの火の属性の魔法を扱える者ならば持つ者ならば誰でも扱える魔法。

しかし、そんな基本的な魔法にも拘らず、ジェラルルが唱える魔方阵は端の方の帯状に描かれた文字に確かな歪みがある。

それでも唱える魔法は発動し、ジェラルル本人に何も変化が見られない。

なら、魔力が返るところはただ一つだった。

- この男の精霊かつ！ -

魔方阵から放たれた火球と咆哮を上げた赤い精霊が目前に迫った瞬間に、見えた。

ジェラルルと繋がっている赤い精霊は苦しそうに表情を歪ませていた。

「デメエはっ！！」

左目が紅く光を放つと同時に、身体に感じる躍動する魔力の奔流。

その場に僅かに巻き上げらる砂塵と紅い残光を残して、予備動作も無しに高速移動を開始する。

『魔術』

己が持つ属性と法のみを用いて発現する『魔法』とは違い、道具と

いったモノに術式と魔力を組み込む、または注ぐ事で発現するのが『魔術』である。

その中でも最も多く使われるのが、

『魔術行使』

『魔術行使』は、自分の身体を道具として自身に魔力と法を注ぐ基本魔術。

そこで体现されるモノは魔力を添加剤にした身体能力の向上で、その効力はあくまで本人の魔力に比例する。

観戦していた者達とジェラルルの視線を置き去りにして、一瞬のうちにジェラルルの真横へとスライドしたアイン。

純粋な魔力を推進力に爆発する如くジェラルルへ向かって疾走する。

「デメエにはコレで十分だっ！！」

突き出された右手の拳が、ジェラルルの顔面へと突き刺さった。

ジェラルルの体は地面に落ちる事も許されず、立っていた位置から15メートルもの距離を飛ばされる。

石壁に当たる事でようやくジェラルは地に落ちる事を許された。
何が起こったのかも分からずに壁に叩き付けられたジェラル。

彼が意識を失う前に僅かに認識出来たのは、爛々と怪しい紅い光だけだった。

「もう良いんだ、戦わなくて」

人は精霊を選ぶことはできない。

生まれてくる僅かな者だけが、人が人より生まれる時に、世界より精霊が共に生まれる。

しかし、精霊もまた、どの人間が自分と共に生まれ在る者なのか選ぶ事は出来ない。

背中を見せて去っていくアインに闘いの終わりに気付いた赤い精霊は、声もあげる事なく世界へと姿を消していった。

太陽が沈み、月が彩る夜の時間。

城の二階にある大広間のホールでは、叙任式の参加者達を集めてパーティーが開かれていた。

天井から吊るされた豪華なシャンデリアに照らされて、煌びやかな衣装に包まれた人々は流れる音楽とステップに身体を躍らせる。

足を止める者は並ぶ料理とトークに舌を唸らせていた。

そんな皆が胸を躍らせているホールから離れ、パーティーの灯りから隠れるように分厚いカーテンの向こう側。

月明かりに照らされて、バルコニーの手すりに寄りかかる二人の男女がいた。

「アインも見惚れちゃったんでしょ」

「うつ・・・少しだけな」

「やっぱりっ！でも、あんな綺麗なら仕方ないかなっ」

結局、本気を出したティアは試合に圧勝していたらしく、試合自体もアインより早く終わっていた。

二人して無事に試合に勝つ事が出来て、ティアは上機嫌だった。

「ホント姫様は綺麗だったね」

「ああ・・・そうだな」

記念すべき今日の出来事をこうしてティアはずっとアインと振り返

っていた。

「オジサマ・・・元気そうだったね」

「会話どころか10年ぶりの親子対面が壇上の上と下で、息子の誕生日に労いの一言さえ寄越しやしなかった」

手すりを握る手に力がこもっていく。

父親の姿を浮かべると心が苛立ってくる。

そんなアインの姿をティアはずっと見続けてきた。

「きつと、心の中では喜んでたよっ！」

父親と違い、ずっと傍にいる幼なじみの明るい笑顔は何よりも心を落ち着かせてくれる。

「そうかあゝ？ティアには優しくったからなあのおヤジは」

「むうつ・・・またそうやって皮肉を言うんだから。良いじゃない、久々にオジサマの姿を見れたんだから少しは喜んだって良いじゃない」

まだ、二人と一緒に暮らしていた時からティアはあんな男の事を今でも尊敬している。

たぶん、息子のオレ以上に尊敬しているし、オレなんかより余程会えた事が嬉しそうだ。

「オレは別に親父のために騎士になろうとしたんじゃないさ」

隣にいるティアから、自分の手元に視線を落とす。

手に持った青い外套は、まだ肩に掛けられていないままだった。

「それに・・・オレはまだ騎士にはなっていない」

小さい頃からアインを知るティアには、アイン持つ苦悩も、騎士になろうとした理由も全て分かっていた。

だからこそ何も言えなかった。

月明かりのみが二人を照らす中、二人の空間はより明るい光によって映し出された。

「こんなところにいらしたのティアお姉さま！」

「わわっ！？ちよつとまだ話の途中、きゃあっ！」

ジャツとカーテンを開けて光の中から現れた女達にティアは有無を言わず連れ去られていった。

「なんなんだいったい・・・」

あつという間の出来事に止める間もなくバルコニーに一人残されたアイン。

ティアの誰にでも優しく明るい性格は、男女共に城で人気だった。

騎士達や城で働く者、貴族や王族達の中では特に淑女達に若き女性騎士の姿は憧れなのだろう。

開いたままのカーテンから漏れてくる光と音楽は相変わらず眩しく、室内にいる豪華な騎士や貴族の姿は見ていて別世界に感じた。

だからこそ、ココは落ち着かなかった。

「レギンレイブ王国の騎士・・・か」

少年は、逃げる様にその場を立ち去っていく。

「やはり騎士にするにはまだ早かったのではないのでしょうか？」

「いや、今日で良いのさ。」

アイツは騎士になるために生まれてきたようなものだからな」

城から段々と離れていく背中を、先程まで少年がいたバルコニーから二人の男が見下ろしていた。

「ただ、アイツの不幸は目標にした身近にいた騎士が大き過ぎた事さ。」

だからこそ、ただの騎士になる事に戸惑う」

ゴクゴクと水を飲むように大きなジョッキに入ったワインを一気に飲み干す眼帯をした男。

「ぶはあゝ、まあ騎士は誰かを守るもの。」

だが、その守るものを選び、騎士になる事を決めるのは自分の意思だ」

ダグザは空になったジョッキから、今は見えなくなった自分の弟子の去った方を見つめる。

「まあ、何のために、誰のために騎士になるかはアイツ自身が見つける事だ」

「・・・そうですね」

黒衣の青年ヴァーリは、同じ師を持つ少年が去っていった街並みを見つめる。

そんな二人の背後から、二つのジョッキを持った司祭が姿を現した。

「二人共、ココにいらしたんですか。さっ、ダグザさんっ！今日はめでたき日ですっ！ヴァーリもっ！」

「おおっ！丁度切れた所だっ！」

「いえ、私は酒はっ・・・」

二人の様子は気にしないといった風にマイペースに手に持ったジョッキを二人に握らせる司祭。

この若さで大国の司祭を務める司祭服に身を包まれたメガネをかけた笑顔の好青年は、二人が見ていた街並みを笑顔のまま見つめる。

「必ず見つけますよ。彼の運命は動き出しているんですから」

「そうだな。そのためにワシが鍛えたんだ」

三人が見つめる先は城より低い位置に広がるレギンレイブの城下町。

あの少年はここから見える景色を守る道を必ず選択する。

三人とも同じ考えで眼下に広がる夜景を眺めていた。

――
手に持っていた外套をベルトにくくり付けられたサイドポケットに閉まっていると、後にした城がさつきより騒がしく感じた。

街に出るための城門をくぐり抜ける所だった少年は今一度城を振り返る。

外にまで聴こえてくる優雅な音楽は、夜にそびえるレギンレイブ城を改めて場違いに感じさせた。

「まあ、パーティーなんてこんなもんか・・・」

だから、少年は去っていく。

自分の居場所であり、守るべき街へ帰る為に。

少年が一人自分のいるべき居場所へ帰る同時刻――

城にあるとある一室。

豪華絢爛な部屋の壁面が一枚手前に開いていた。

「姫様を探すんだ！」

開かれたばかりの壁面の中にはどこかへ続く階段があった。

壁の遥か向こうに広がるのは、夜の喧騒を上げレギンレイブの街並み。

街は城の騒ぎとは関係無く今日もまた変わらない日々を過ごしていた。

今いる飲食店街には沢山の店が立ち並び、街道には貴族こそいないものの、客引する店員や買い物をしている馬車を引く行商や旅人、或いは遅めの夕食を食べようとする住人等が声を上げていた。

シャンデリアの灯かりとは違う生活感の感じる松明の火。

夜の１１番街はさつきまでいた華麗な城のとはかけ離れた喧騒に包まれていた。

アインはこの慣れ親しんだ雰囲気を久々に吸う酸素のように懐かしく感じた。

「なんだアイツは・・・」

だから、この街の雰囲気壊す者には舌打ちもするし、同時に溜め息も出てくる。

街道のど真ん中にいる者は明らかにこの街の人間とは異質な身なり。金の刺繍が入った白の外套を頭からスッポリと被り、道に迷ったのかオロオロと挙動不審だった。

「おいっ！おまえっ！」

急な背後からの呼びかけにビクツと肩を震わせるその不審者は近くで見るとやけに小さい。

目立たない為の変装のつもりだろうが、逆効果に尚更街道の人々の視線を集めていた。

「ちょっとコツチに來い！」

いきなり手を暗い路地へと無造作に引かれて驚いたのか、抵抗するがその力はひどく弱かった。

- 随分細い腕だな -

小さい身体に細い腕、女か子どもか、それにしても厄介なものを見つけてしまった。

もし、誰か他の人が先に助けていたら、その方が良かった。

しかし、自分が見かけてしまった時点でそんな希望は無いということになる。

通りから外れた路地に入って辺りを見回して人がいない事を確認してから、不審者の腕を掴んでいた手を放す。

「おまえはバカかっ!!」

振り返つての怒りの咆哮は静かな路地にこだまする様に響いた。

しかし、それだけでアインの怒りは収まらない。

「どこの貴族様だか知らないが、そんな立派なマントを頭から被つてこの街をウロウロするヤツがあるか！」

この11番街は他の街と違う！

この国の住人じゃない連中が自由に出入りして、そこらへんに危ないヤツらがゴロゴロいるんだ！」

『11番街』

ココはこの国で唯一自由が認められている街。

この街は身分による規制も無ければ、この王都の中にながら統治する国への税も存在しない上に誰にでも解放された街である。

その自由は、貿易も入居も自由であり、その為に貿易も盛んであるが出入りする人物のチェックも存在しない。

従ってこの街の住民は、裕福でない者、国を追われた者や、訳ありの人間等が多く集まり、まず貴族や裕福な者はこの街には来ない。そして街には、騎士による恩恵は無く、騎士に守られる事も無い。

「この街は誰のモノでもない、その代わりに騎士も守ってくれはしない。」

当然日常的にイザコザも起きている。

だから、この街は自分の身は自分で守っているんだ。

オマエみたいな街の住人じゃないヤツは誰も助けてくれないんだぞ！」

この街が守るのはこの街の住人だけであり、目の前いる者の行動はあまりにも軽率だった。

明らかにこの街の住人には思えない豪華な外套を身に纏って一人でフラフラしている姿は、街に出入りする盗賊や荒くれ者達に攫ってくれといっているようなもの。

そんな事も分からないコイツはどここの貴族様だ？

「知ってるわアイン。」

あなたのお父様が作った街だもの」

だから、その言葉を聞いて驚いた。

いや、それ以上に聞き覚えのある声に心底驚いた。

白いフードを脱ぐと流れる髪の毛からは微かな甘い芳香が鼻をくすぐり、銀色の髪が風に揺れた。

月光に照らされる瞳は、紫色の輝きをしていた。

「こんばんはアイン。綺麗な夜、それに素敵な街ね」

目の前にいた白い外套を纏った不審者。

それは紛れも無く城にいるはずのアシエラ王女だった。

再びアインは11番街の街道を歩いていた。

先ほどと違うのは隣を歩く人物。

銀髪に紫の瞳は、相変わらず挙動不審でキョロキョロと辺りを珍しそうに見渡していた。

「ここがどこだか分かってるんですか？アナタみたいな人が従者も連れずに一人でノコノコ歩くような場所じゃない」

「分かっていますっ。この街の事はオジサマからいつも聞いていましたからっ」

そんな事を言いながらも、伊勢の良い客引きが声を荒げたりする度に、アインの影に出たり入ったりを繰り返す王女。

身なりと立場を抜かせば、彼女の姿は市街地をもの珍しく歩く只の女の子だった。

そんな彼女の姿を見ていると納得してしまう事がある。

城の人間達が慌ただしかった理由が眼の前にいるからだ。

- 自国の姫君がよりによって誕生日に行方不明じゃそりゃ城中大騒ぎだろ -

彼女がここにいる理由を先程聞いて、それはもう驚いた。

「何でこんな所に一人で？城のパーティーは？」

「アナタが城から出るのが見えたから出てきたの、隠し通路で」

即答だった。

我らがレギンレイブのお姫様はそんな気軽に散歩に出かけるような軽い口調で、

- 城の外に出るのは初めてだったからドキドキした -

と、大それた行動を何とも楽しそうに話していた。

だから、アインはスグに城に返すような事はせずに、初めての城の外が夜の１１番街というのが優雅さに欠けるが街を案内していた。

城をそのまま抜けてきたらしく、白いドレスは外套のおかげで見える事は無い。

「なんでか知らないが街を歩くのならそんなの被っていないで堂々として下さい。その方が目立たない」

路地から出る時に言ったアインの一言で彼女は顔を隠す事なくさらけ出していた。

叙任式の参加者や、城に勤務するものならまだしも、この街にいる一般人はまず王女である彼女の顔なんて知らないからだ。

「そのドレスは分かるが、姫様の顔を街の人間はまだ知らないんだから隠す必要無かったんじゃない・・・」
「私もそう思ったのですが、街に来てみると皆が珍しそうにしているもので」

そこまで言って、それは大きな間違いに気づく。

さっきからすれ違う人のほぼ全てがその足を止めて、こちらを振り返っている。

さっき自分は王女の彼女がいたから驚いた。

街の人間は王女としての彼女を知らないから、豪華すぎるドレスさえ隠せば問題無いと思った。

隣を歩く少女。

改めてよく見ると、淡い光沢を放つ白銀の髪はソレ自体だけでどれほどの人を魅了するだろうか。

気品漂う愛らしくも整った顔立ち、そして紫色の瞳はどんな宝石も敵わないだろう美しさをしている。

確かにアインと街を歩く彼女が、よく街で噂するシェーラ姫本人だとは誰も思わないだろう。

それに、この王都は外交も盛んで近隣諸国から多種多様な人種が入りし、約50万人が生活している。

しかし、彼女はそんな多くの人に住む世界にあまりにも馴染まない。

およそ、普通の人間がいて当たり前前の場所の方が不自然に感じてしまう程、彼女だけで高貴さと芸術性を放っていた。

例え、今着ている純白のドレスと外套から、そこらを歩く人と同じ服を着たとしても彼女という存在だけが浮いてしまうだろう。

それこそ、人がいるべきじゃない場所の方が溶け込むかもしれない。

持つて生まれた気品と風格、彼女の素顔自体があまりにも人目を集めていた。

「やはり、マントを被った方が良いのでしょうか？」

あまりにも多くの人が足を止めて見てくるもので、彼女は少し怯えてしまっていた。

それも無理もない。

考えてみれば王女でありながら彼女は視線を浴びるというものに慣れていなかったのかもしれない。

それこそ今日という日まで塔の中から出る事なく、信頼出来る人間としか接触を許されなかったのだらう。

ならば、自分がどれだけ人目を引く存在なのかなんて考えた事も無いのは仕方ない。

通りに出てからオレの服の袖を不安げに摘んでいる彼女は昼間見た彼女とはまるで違う姿だった。

初めて城で見た彼女は近より難く、神々しく高貴な存在だった。

例えるなら、王女の彼女は額に飾られた美術品で触れてはならない存在。

今の彼女は、街に生える一輪の花ようだ。

触れられる距離にありながら、摘む事を憚れる眺めるだけで愛らしい存在。

王女として近より難い存在の彼女はその実、気品と風格を越えて歩みよるとこんなにも身近な女の子なのだ。

もしかすると、彼女が自分に会うまで視線を集めながらも何もされなかったのはそんな理由なのかもしれない。

「これはこれは精霊騎士じゃないか！どうしたんだ今日は？」

威勢の良い声に振り向くと、この通りで出店をしているオジサンだ

った。

鉄板の上で焼いているソーセージの匂いが香ばしい。

「止めてくれよ、その呼び方は」

「ハハハ相変わらずだな！我等が精霊騎士様は！」

「昼間も聞いた言葉ですが、アインが精霊騎士とはどういう事でしよう？」

いつ間に隠れたのか、背後からひょこつと顔を出して会話に入ってくる王女。

その仕草はどこか可愛らしかった。

『精霊騎士』

この言葉はいずれにしてもアインのみとめていない通り名だが、その言葉に込められた意味合いは二つある。

一つは、昼間アインと試合した騎士が言っていた意味。

「精霊もいない、騎士でもない。オレに対する皮肉ですよ」

「でも、昼間の彼は昔からって・・・」

・あまり話したくもない内容だからシェーラ姫には悪いが話す必要も無いだろう・

「それはだな嬢ちゃん！このアインって男はオレらに取っっちゃ騎士様だからよ！」

「っ！？いいよオツチャン止めてくれ！」

「いいや！このままオレらの騎士が勘違いされるのは見過ごせねえな！」

「ダメだ！もう話す気満々になってる！」

アインの制止も聞かずにソーセージをひっくり返すのも止めて鉄板焼きのオジサンは語り出した。

こうなるともう話終わらないと止まらないだろう。

背中に隠れていた姫様も前に出てきていて聞く気満々だった。

「この１１番街はこの国で唯一自由が認められてるのは知ってるかい？」

「ええ」

「それは、税も無ければ入国や流通にも何の徴収が無い、その代わりに国の騎士達による庇護も無い。だから、この街の住人は自分の身は自分で守らなきゃなんねえ」

オジサンの話にコクコクと相槌を打って話を聞いているシェーラ姫の表情は真剣そのものだった。

「しかし、それは街自身にもいえるのさ！こんな居心地が良くて出入りも自由な街だ、アチコチから色んな奴らがやってきてしょっちゅうイザコザ起きてる。

だから、オレ達１１番街の住人は協力して自分の街を守ってんのさ」

ウインナーを掴む為の鉄バサミをブンブンと振り回す。

「でもって、この精霊騎士様はそんなオレら街の住人と街を守ってくれてるこの11番街唯一人の騎士様な訳よ！」

鉄板越しにオレの肩をバシバシと叩くオジサンは、オレを自分の息子のように自慢げだった。

オレもそんなオジサンが嫌いじゃない。だから大分恥ずかしいが話を中断する気にはなれなかった。

あの男の話が出るまでは……。

「ガキの頃のコイツの言葉がまたアツシユ様そっくりでな！その時のセリフが……」

「っ！？おいっ！もう良いだろその辺で！」

「『オレにとつてこの街は家族なんだ！家族を守るのは当然だろ！』だつてさ！いやゝ子どものセリフとは言え痺れたねえゝ。やっぱり血は争えないね」

さすがに限界だった。

この腕組んで楽しくなってきたオヤジは話し始めたらどこまでも止まらない。

- なんて今日初めて会った姫様にガキの頃の恥を話されなきゃなんねえんだ！ -

「もう良いでしょう！そろそろ次の所へ参りましょう！」

二人の会話を遮る様に姫様の前に割り込み肩に手をかける

「どうしたんだアイン？そっぴや随分丁寧な話し方じゃねえか」

「しまったっ！」

気づいた時にはもう遅く、アインが庇う様にしている姫様にオジサンは首を傾げて疑問の視線を向けていた。

「このお嬢さん、そんなに偉い方なんかい？」

「そりや今隣にいる人がこの国の王女様なら誰だって敬語使うだろうが！」

路地裏で会った時は驚いて普通に喋ってしまったが、あれから意識して敬語を使おうとしたのが裏目に出た。

急いで思考を駆け巡らす。

へたに回答に時間がかかると余計怪しまれるだろう。

それに、このまま去ってしまうと話好きのオジサンの事だ、仕事を放つてでも町中に話を広めるだろう。

あつという間に彼女の存在は町中に知られて、彼女が噂のシェーラ姫だということもバレるかもしれない。

まだ、一般の人知らない噂の姫様がパーティーを脱出して騎士なんかに会いに街に来てたなんて知られた日には、どうなるか分からん。

「それは・・・」

何の答えも出ないままとりあえず場を繋ごうと口を開くと、

「どうしたんですかアイン？敬語なんてらしくない！いつもみたいにアーシェって呼んで下さい！」

「えっ！？」

急に腕を組んできて、それが当たり前の様にシェーラ姫は微笑んできた。

ようするに俺の意図を読んで合わせてくれたのだ。
城での一見の時といい、彼女の判断力には驚かされる。

「ほお・・・アーシェちゃんっていうのか！良い名だ！どうだい！食べていかないかっ？」

「まあっ！ありがとうございます！えつと・・・」

「しかし、オツチャン・・・知らないとはいえあんたが今ちゃん付けで呼んでるのはこの国のお姫様なんだぜ・・・」

そんな悩みは読んでもくれないのか、姫様はオジサンがハサミに掴んで差し出している湯気を上げる焼きたてのソーセージとオレを交互に見ていた。

なんか二人のやり取りを見てたら色々と気にするのもバカらしくなってきた。

「はあっ・・・で、食べてみたいのか？」

コクコクツと頷く時の姫様は好奇心の塊なのかもしれないな

「オツチャンこれ一つくれるか？」

「あいよっしかしアインツ！えらい可愛い子じゃないかい！どっかの貴族のお嬢さんかい？」、

ウインナーを串に挿して姫様に差し出すオツチャンは会話しながらでも手際が良い。

- まさか王女様だなんて言えないよな・・・ -

結局なんて答えようか、なんて考えてると別の疑問が沸いてきた

- あれ・・・姫様なんか到下町の料理なんか・・・ -

「おいっ！」

- きつと城でしか食べたことの無い彼女はこんな下町の料理は味はおろか、ましてや串にかぶりつくなんて -

「とってもオイシイです！王宮の料理と違って、スパイスが独特な味付けですね！」

なんの心配もいらなかったようだ。

隣の彼女の手元には串だけが握られていて、既に空になった口からは評価まで出ていた。

「カハハハハ！王宮の料理ときたか！嬉しい事言ってくれるね嬢ちゃん！

もつとどうだい！なんなら食べるだけここから食っていいぞオツチャンからのサービスだ！」

「いいんですかっ！？いただきます！」

完全に前言撤回。

パクパクと鉄板から直接串で挿してソーセージを食べる彼女は高貴というよりワイルドだ。

「・・・・・・・・いや、マジかよ・・・・」

その小さな口の割りにあまりに見事な食いつぷりは呆れるというより啞然としてしまう。

「いやあゝカワイイお嬢ちゃんじゃないかアイン。しかし、良いのかアイン？」

「何がだよ？」

オジサンはまた腕を組んでいた。
しかも今度はいやらしい笑み付きだった。

「ティアちゃんがいるのに、こんなカワイイ子連れちゃってよ」

「ティアというのは、ティア ブリギットの事ですか？」

口をモゴモゴさせたまま会話に混ざってくるお姫様。

「そうだよ！そのティアだよ！良いからソーセージ食ってる！」

はい、と確認だけ取りたかったのか再び食べ始めるシェーラ姫は素直だ。

「ってか何でここでティアが出てくるんだよ！！」

「まあ怒るなよっ！ヒッヒ」

予感的中した。

やはりこのオヤジが喋り始めるとろくな事を言わない。

「ごちそうさまでした。」

鉄板の上は信じられないことになっていた。

「えっ！？ソーセージ全部食べちゃったのかっ！？」

さっきまで、軽く20〜30本はあっただろうソーセージは話に夢中になっていたほんの僅かの間に忽然と鉄板の上から姿を消していた。

「ハーツハツハツハ！いや驚いたよ嬢ちゃん良い食べっぷりだ！今日は全部奢りだ！」

「良いのか？」

さすがにあれだけの量だと逆に奢って貰うのは悪い気がしてしまう。

「良いつて！オレはアーシェちゃんの食いっぷりが気に入った！」

こちら辺がこのオツチャンの良い所だろう。

生活がかかった商売でありながら、粋な所がある。

「すまねえな」

「また来なよ！お嬢ちゃんなら大歓迎だ！」

「ハイッ！またいただきます！」

「またいただきますってなんかオカシクないかつ？」

その粋さに乗ってか知らずか、遠慮を知らないお姫様。

あまりに流石過ぎて思わずツツコミをいれてしまうくらいだった。

周囲の視線にも慣れたのか、本当に楽しそうに街を眺める彼女と街を歩く時間がアインは楽しかった。

視界に入るもの全てに目を輝かせては腕を引っ張っていく、そのはしゃぎようはそれこそ子犬のようだ。

「ねえアイン！アレもコレも同じお金なんですか！？」

「ホントにお金を知らないんだな」

「見たのは初めてです」

街を歩く彼女はあまりにも世間知らずで、どんな事でも好奇心旺盛で、些細な事でもよく笑った。

「それにしてもシェーラ姫はどんな方かしらね」

それは、立場が王女というだけで彼女も年頃の普通の女の子だという事。

「そっぴやアイン兄ちゃんは城で見たこと無いの？」

そして、そんなタダの女の子は塔から出たことの無いという事実を裏付けていた。

「姫様は今日この日まで塔から出ることさえ許されていなかった。

そんな姫様の前でオマエのさっきの行動はなんだ」

彼女がずっと塔にいたというのは本当の事なんだろう。

彼女が何故今日まで城から出る事も許されていなかったのか理由は知らない。

それに過ぎ去った過去は変えられない。

なら、初めて外に出ることが出来た日くらいは迷惑をかけたオレが少しでも楽しませてあげたくて、彼女の行きたい所を案内した。

――

自宅に向かう為のゆったりとした上り坂からは、うつすらと灯火がいくつも点いているレギンレイブ城が見えていた。

――パーティーはまだ続いているのだろうか

もしかすると彼女がいない事で大騒ぎで、出席者も総出で探しているのかもしれない――

街をある程度見たのに彼女は城には帰らなかった、何故か俺の家を見たかった。

「ほんとに城に戻らなくて良いのか？」

何たって彼女は王女様でおまけに今日は誕生日で、今城で行われているパーティーのメインでもあるのだから。

「あら、だったらあなたもでしょう？私と同じ誕生日でパーティーを抜け出して来たんだから」

後ろを付いて来るシェーラ姫は、あなたも私と同罪よ、と一指し指を立てていた。

「そっぴや誕生日同じなんだよな」

「オジサマから聞いたわ。私と同じ誕生日で同じ年のあなたの事」

「オヤジがつ！？」

あまりに想定していなかった言葉に身体が固まってしまふ。

ずっと家にも帰らず、今日まで十年間顔を見ることさえなかった父親が自分の事を話していた。

明らかになる父親の存在は、喜べば良いのか、怒れば良いのか分からなかった。

ただ、一つ言えるのは、決して息子の存在を忘れた訳では無かったということ。

「今日まで塔から出れなかった私は、いつもあなたの事を聞いていたの」

「えっ？」

後ろで腕を組んでいた彼女は、懐かしむように眼を閉じて微笑みながら先を歩き出す。

「名前は『アイン』私と同じ日に生まれた黒髪の男の子」

塔から出ることも出来ず、ただ目の前に広がる世界を眺め続けた彼女。

「男の子は、11番街のお城が見える小高い丘の上にお父さんと二人で住んでいました」

昔話を語るようなその口振りは、これまで何度と無く繰り返し聞き続けたのだろう。

「やんちゃな男の子は家のお世話をしてくれてるテミおばあちゃんが大好きで、いつも心配をかけていたわ」

彼女の話聞いていて気づいた事がある。

- 7才の時から家に帰ってこない父 -

見習いになって城に出入りすることがあっても父の姿を見かける事は無かった。

「たった一人の血の繋がったお父様を本当は尊敬しているのに素直になれない男の子」

そんな父が今日まで何をしていたのかがやっと理解できた。

「私はそんな男の子とお父さんのお家が見てみたかった」

17年間ずっと外に出れない彼女にとって、親父から聞かされる同い年の男の子の話は唯一つの娯楽だったのかもしれない。

- 父親は17年の間城から出ることが出来なかった彼女の傍にいた -
その衝撃の事実が、これまであれだけ心の中に巣食っていたドス黒いモノを不思議と消し去っていった。

「そして・・・私はその男の子と今日会える日をずっと楽しみにしていたの」

言葉を止めてクルツと振り返った彼女の髪は夜空に新円を描く月の光を纏っている。

「あなたの事よ、アイン」

彼女は、本当に綺麗だった。

今、彼女がいるのはオレの自宅一階にある客間だ。

「せっかく初めてアインから声をかけてくれた最初の言葉が『おい、

お前』、だなんて運命も何も感じないわ!」

「いや、あんな全身マントで隠されたら誰でも気付かないって・・・

」

「そこをアインに気付いて欲しかったのっ」

なんてムチャクチャな事をコートを脱いでドレス姿のシェーラ姫は細い腰に腕を当てて大声で怒鳴るっている。

「なんでこんな事になってんだ・・・」

それこそ家に入って直後は、

「ここがオジサマとアインのお家なのねっ!アインの部屋は二階でしよっ!」

「ちょっと待てっ!何で部屋の位置まで知ってたんだ!勝手に部屋に入るな!ベットに寝るな!」

オヤジから聞いてたのか、部屋まで勝手に行くわベッドに寝たら寝たで、「固い、小さい」、「部屋は思ったよりも狭いの」に片付いててつままない」と、好き勝手し放題だった。

だから、首根っこを掴んで客間に運んだら、路地での出会い方を思い出したようで今に至っている。

「だって、ずっと会えるの楽しみにしてたのよ!それに儀式の時だって手を振ったのに無視するし!オジサマを睨んでばかりで私を見ようとしなかったんだから!」

あまりの不満の爆発振りに手が付けられなかった。

一部は仕方ない気もするが、彼女に迷惑をかけたのも事実だし、何よりもアインは女の子が怒り出すと何故か頭が上がらないのだ。

これが男なら殴って終わりなのだが、幼なじみのティアも一番怖い時は手を出してこない時だったりする。

「せっかく城から会うために抜けてきたのに急に暗闇に連れて行って怒鳴るし！お腹空くし！」

「最後のは違うでしょっ、てかもう腹減ったのかよ……」

客間の入口で椅子に腰も下ろさず烈火の如く怒る暴君だった。

今の状況は二人きりだけで助け舟も出ないし、どうしていいかわからない状況だった。

次の瞬間までは、

「おや、何やら声が聞こえると思ったら……アイン様帰ってらしたのね」

「ばあちゃんっ！」

ドアから出てきたは、大好きなティミばあちゃんだった。

シェーラ姫の脇を潜り抜けて、救いの天使に駆け寄る。

「まだ、帰って無かったのかい？」

いつもなら、ばあちゃんは日が沈む頃には11番街の外れに帰っている。

だから、とつくに日が沈んでいるこの時間にまだ家にいるとは思っていなかった。

「ええ、奥様の部屋で絵を眺めていましてねえ」

「母さんの？いつもと何も変わらないじゃないか」

「いいえ、今日はあの絵を見ていたい特別な日でしたから・・・」

「そつか、そうだよな」

そつ、長年この家に来ているばあちゃんにとっても今日は特別な日なのだ。

「こんばんわ。テミおば様」

二人の会話を見計らって、シェーラ姫はドレスを摘んで可愛らしく挨拶する。

その仕草は先程までと同一人物とは思えない完璧な淑女の姿だった。

「ああ、紹介するよいつもオレがお世話になってるテミばあちゃんだ。んで、この人は・・・」

さてなんて言おうかな、ばあちゃんに嘘は付きたくないし、姫だと

教えてもばあちゃんなら問題は無いよな。

なんて考えていた時だった。

「これは、奥様っ！ユミル様じゃありませんかっ！？」

「「えっ？」」

唐突にシェーラ姫に向かってばあちゃんは叫んだのだ。

「え、私はアシェラ、ユミルという名では・・・」

「そうだよばあちゃん！この人は母さんじゃない！アシェラ バーネット レギンレイブ 街で噂のシェーラ姫だ！」

ばあちゃんの取り乱しようは幽霊でも見たように慌てていた。だから、落ち着いて貰うのに必死で下手なごまかしなんかしていらなかった。

「シェーラ様・・・先程はおばが勘違いなどをして申し訳ございませんでした」

「いえ、私は気にしていませんから頭をお上げになって下さい」

「ほんとに送って行かないで良いのか？」

「良いんですよ。毎日往復してる道なんですから。それでは、おやすみなさいませアイン様、シェーラ様」

二人の説得で落ち着いたばあちゃんは、二人に紅茶を淹れて送ることも必要とせずに一人で帰っていった。

――
――
オレとシェーラ姫は、ばあちゃんが客間で帰り際に淹れていった紅茶を飲んでいた。

「ゴメンな、さっきはばあちゃんが勘違いしちゃって」

「ううん。驚いたけど別に気にしていないわ」

ただ紅茶を飲み込み呼吸するだけの思い沈黙。

- 気にしていない -

確かにそう言っているがあれだけ口を動かしていた彼女は、ばあちゃんが帰ってから自分から何も言い出していない。

シェーラ姫はさっきからずっと両手の中にあるカップから上がる湯気をただ見つめている。

まるでずっと何か考え事をしているようだった。

「何か気になることでもあるのか？」

「……あのねアイン」

「ん？」

カップを置いた彼女は久しぶりに目を見て話したような気がした。

「アインの、お母様の部屋を見せて欲しいの」

そこはアインにとっても、きつとばあちゃんにしてもそうだろう。

決して家族と呼べる人意外は、他人を入れたくない領域だった。

「やっぱり他人を入れたりしたくは無いと思う。でも見てみたいの！お願いアイン！」

何が彼女をそこまで必死にさせるのか分からない。

そこに今までのような我侭な雰囲気はなく、彼女のそれは懇願だった。

淡いランプの灯火は板張りの母の部屋をやけに広く感させる。

何度入っても生まれた時からここは何も変わらない。

この室内で変わるものといえば、持ち主のいないテーブルの上にはあちゃんが毎日飾る花くらいだった。

整理整頓されているというより物が無い。

衣服や身に付けていた物、ベッドや家具、持ち物のほとんどは亡くなった後スグに父が処分したそうだ。

「オレの母さんはオレが生まれたすぐ後に亡くなったんだ」

「オジサマから・・・聞いたわ」

「そう思ったよ・・・オレもさすがに赤ん坊の頃の記憶なんて無い。触れることも出来ない、記憶に無い血の繋がった家族の存在。」

「でもさ、ここに来ると確かにオレにも母親つてのがいたんだなって感じれるんだ」

ここに唯一つ残された母の持ち物。

もう使われることの無い窓際にある花瓶が置かれたテーブルと、そして壁に飾られた四枚の絵。

「ここに飾ってある絵は全て母さんが描いたんだってさ」

「素敵な絵ね・・・」

「母さんの趣味だったらしいんだ」

もともと身体が弱かった母さんは家をあまり出ることが無くて、いつも絵を描いていたそうだ。

部屋に飾られた四枚の絵は、今後書き足される事も無ければ変わる

事も無い。

物心付いた時から眺めてきた、母がいたという事を感じれる物。

「これは、黒髪の男の子ね」

右手の絵には、ベットで寝ている男の子が描かれている。

「こっちは少し小さいけど、さっきの絵と同じ子かしら」

その下の絵は、赤ん坊を白髪の男性が抱いている。

「これも、同じ男の子・・・」

シェーラの前にいる黒髪の少年は剣を握っている。

「これ・・・は、全部同じ男の子が描いてあるわ・・・」

身体の大きさに違いはあるものの、描いてある絵には全て黒髪の男の子が描いてあった。

「この男の子達はアイン・・・この絵は全部成長したアインを描いたものなのっ!？」

四つの絵には黒髪の男の子が成長していく姿が描かれていた。

「ああ、ここにあるのはオレの成長していく姿だ」

それが物心付いた時からずっと眺めて続けてきた、唯一母が残した確かな物。

「そんな事が・・・」

「ばあちゃんの話だと出来たらいいな。いつもオレの成長する姿を想像して楽しそうに描いてたらしいんだ」

アインと入れ違いのように亡くなった母親。

「これは全部、オレが生まれる前に母さんが描いた夢物語なんだ」
まだ生まれてきてもないのに、亡き母は生まれてくるだろう子の姿に夢を膨らませていたのだろう。

絵の中で成長していく息子の姿を見つめながら、その顔に語りかけていたのかもしれない。

そのどれもが描いた人の心が読み取れるようで、絵の男の子は皆幸せそうだった。

ゆっくりと一つ一つ絵を眺めていたシェーラは左に飾られた絵を見る。

「では、この大きな絵のアインは・・・っ!？」

それは、四枚ある中で一番大きな絵。

絵の男の子も随分成長していて、今のアインと同じくらいだろうか。

草花が生い茂る野原、そこに立つ一本の大木の元に彼がいる。

蒼い外套を風に羽ばたかせて、絵の中で一番幸せそうな笑顔で黒髪の少年は笑っていた。

「やっと分かりました。これがあなたの理由なのですね」

「ああ、オレがこの国の騎士になろうとした理由。そして、母さんの夢だ」

そこに飾られた絵のアインは、紛れも無くレギンレイブの騎士の姿をしていた。

「そう、オレはこの１１番街と家族さえ守ればいいのに騎士になろうとした理由はきつとコレなんだ」

目の前にいるこの少年はあまりにも純粹だった。

- これがアインが騎士になろうとした理由 -

父親から聞いていた通り。

いえ、実際に会って、見て、話した彼はそれ以上だった。

この少年は、”この街さえ守れば良い”と言った。

たしかに、この街は例外的に騎士は守る義務が存在しない街だ。

なら、この街を守っている彼は騎士になってもならなくても何も変

わらない。

街を守るのに対しては”家族、居場所”という自分の理由がある。

それは間違いじゃないだろう。

でも、違う。

私には分かる。

でも、この事実をこの少年自身気付いていないのかもしれない。

昼間の彼の姿を思い出す。

”もう良いんだ、戦わなくて”

試合では相手の精霊を傷つけ無かった。

相手は、この国の騎士では無かったのに。

”オマエみたいな街の住人じゃないヤツは誰も助けてくれないんだぞ！”

でも、私を彼は助けた。

その時の私は、姿を隠し明らかに街の住人じゃなかったのに。

どちらも、彼の家族とは関係も無い。

彼は自身に関係も無いのに守ったのだ。

それが本来の彼の姿。

「あなたは、誰かを守る事に理由を必要としていないの」

「何を急に・・・」

そして、この少年は誓いを立てる為にその理由を求めてしまった。

だからだろう。

あの時、騎士になる誓いに戸惑いを感じてしまったのは。

誓いとは他ならぬ己自身に立てるもの。

・母の夢だった騎士・

それはなんて優しいものなのだろうか。

でも、それはあくまで母の夢を叶えたいという願望であり、自身の理由では無かった。

彼の居場所であるこの街自身の存在も理由にはならない。

「でも、騎士になる事に理由を求めている」

その誓いを立てる為の”自身の明確な理由”が見つからなかったのだ。

「あなたのお母様も私も考えはきつと同じ。あなたは騎士になるべき人なんです」

「でもオレには騎士になる理由も、その誓いも分らない・・・」
下を向いている彼の姿は、この絵にある男の子の姿とはほど遠く、とても小さく感じた。

だから、近づいていく。

昼間のように上から王女としてなく、同じ高さで彼と同じ目線で。

私自身も彼に彼に近づきたいから。

そして、彼自身に与えよう。

心優しく純粋なこの少年にふさわしい理由。

誰よりも尊く、そして明確な理由。

私自身が考えるその理想を。

「今から話す事はアシェラ王女としての言葉ではありません。

お母様と同じ、今あなたの目の前にいる一人の女としての夢であ

り願いです」

落としていた視界の中に、昼間と同じ白いドレスが広がっていく。

「私が塔から眺め続けた街は、世界はこんなにも楽しくて、そして美しい」

目を上げた光景は儀式の時と少し違う。

「私はこの街が好きです。そして、私がこうしていられるこの世界がとても愛しく思います」

城とは違う、街での彼女と同じ目線に紫水晶の瞳がある。

「あなたが騎士として理由を必要とするなら、私があなたの理由になりましょう」

今日何度見惚れただろう。

心の奥に入ってくるような真っ直ぐな瞳。

心臓の鼓動は昼間の比ではなかった。

「他の誰でもありません。あなたに私が愛するこの世界を守って欲しいのです」

「何の冗談だよ」

普通の人が言ってるならばどんな冗談だと思うだろうか。

しかし、彼女の言葉は脳へと染み渡り、その言葉はなんと甘美で思考を夢心地にさせてくれる。

「あなたなら出来るわ。私はアインを信じています」

彼女が信じると言ってくれるだけで、あらゆる感情が心を満たしていく。

自分の誓い、彼女の願いはあまりにも純粹で身を心底震わせる程綺麗なものだった。

- だから -

どうしてしまったんだろう。

その視線、言葉、まるで彼女の熱が身体に入ってくるようで、熱いモノが全身を駆け巡っていく。

彼女が胸に手を当てるだけで、胸が高鳴る。

「私の騎士になって下さいアイン」

昼間とは違う。

オレは、アーシェという一人の少女の本当の姿を見つめ続ける事し

か出来なかった。

「ちっ」

顔を腫らした男が舌打ちをする。
本来なら今頃城で豪華な飯と酒にありつけていたはずの男は、
11番街で酒をあおっていた。

「そんな飲んで大丈夫なのかい？」

「うるせえ、城の豪華な飯を諦めてこんな下町いるんだ。酒くらい好きに飲ませろ」

怪訝そうな瞳でバーの店主が見る。
既にベロベロに酔っ払っている男は、その肩に青い外套をかけている。

この11番街は街の特色状、多くの品も安く流れるし、店も遅くまでやっているから騎士が客として来るのは珍しくは無い。
しかし、今日ここに国の騎士がいるのは不自然だった。
この街の騎士も城に行ってるはずなのだから。

「アンタも騎士なら今日は城でパーティーなんじゃないのかい？この街のアインだって」

その単語は腫れた頬に痛みと屈辱を思い出させる。

「うるせえ！その名前を呼ぶんじゃない！」

騎士には慣れたもののあんな屈辱を与えられてパーティーなんか顔を出すことは出来なかったのだ。

この国の人間じゃない男は、金は儲ける前であり儀式参加者の貴族や王族が住んでいないこの11番街しかまず身の寄せ所が無い。

「アハハあんたもしかしてその顔アインにやられたのかい？」

「そりゃ運が無かったねーなんたってオレらの精霊騎士だからな！」

別な卓で飲んでいた住人はこれ見よがしに笑った。

この街の住人にとって、国の騎士は守ってくれる存在ではない。したがって、その騎士が信頼する街の騎士にやられたとなったら笑話の自慢話以外何ものでもないのだ。

しかし、こんな所にいる原因を昼間に付けられたジェラルルにとっては禁句だった。

「オレの前でその名前呼ぶなあああ！」

男の手から赤い魔方陣が前面に浮かび上がる。

魔方陣から現れたのは狭い室内を埋め尽くす程大きい赤い獣。

「グウオオオオオオオ！」

四足を地に付け内腑に響くほどの叫び声。

「うわああ精霊を呼びやがったっ！」

精霊を前にしては、店主も客も逃げ出すしかなかった。

「英雄がなんだ！精霊騎士がなんだってんだ！」

刃引きなんてされていない自前の剣でテーブルを真つ二つに叩き割り、差し出した手から出る火の玉がカウンターを燃やし上げる。怒りを剣と魔法に乗せてジェラルルは店を破壊していった。

「オレには精霊がいるんだ！魔法を唱えまくるだけの膨大な魔力がある！なあっ！？」

しかし、そこで破壊しているのは自分だけに気づく。一緒にいるはずの己の精霊は何をしているのか。

「どうしたっ！」

精霊は動くことなく固まっていた。

「何してんだオマエもやれよ！」

ジェラルルは室内の形が残っている箇所には火を放つ。

「おい！どおした！何で暴れねえ！」

ジェラルルは怒りと酒に酔っていて気づいていなかった。

己の精霊が茶色の身を真っ赤に焦がす程苦しんでいる事を。

- ウウウオオオオオオオオオオオオツ!! -

太陽の様に赤い輝きを発して精霊の身は弾けた。

「なっ!?! うわああああ・・・!」

赤い爆流はジェラルルの身と断末魔の声を建物ごと根こそぎ吹き飛ばした。

夜の11番街に轟音と火柱が立ち上がる。

燃え盛る火の中で、全身から魔力を火の粉のように撒き散らす紅い獣が慟哭の呻き声を上げていた。

第一章 ” 精霊騎士と呼ばれる少年 ” 第一話 「騎士叙任式」 (後書き)

文章構成、表現等、未熟な私にお付き合いして戴き有り難う御座います。

やっと本編が始まりました。

記念すべき第一話はいかがだったでしょうか？

世界観を伝える為にほぼカットせずにお伝えしました。

本来なら次話に続く激しい魔法戦も含めての一話でしたが、長過ぎたために次話に持ち越させて貰います。

御拝読下さった皆様、自身の向上の為に御指導御鞭撻、感想の程、今後とも未永く未熟な私にお付き合い下さいます様宜しくお願い致します。

それでは！

” 精霊 ” と ” 魔法 ” そして ” 人間 ” が共存する世界の神秘的で不思議な異世界譚！

お楽しみ下さい！

次回予告

ついに会ったアインとアーシェ。

彼女が望む真の姿、発覚する人柄。

夜の11番街で暴走する精霊。

精霊と激しい争いを繰り広げるティア。

第二話

「きみと精霊と騎士」

燃え上がる11番街でティアは選択する。

同時進行で進めていきます、

『ヒトというナの』

”精霊と魔法が混在する隠された真実世界”の物語。

良ければ併せてお楽しみ下さい！

第二話 「きみと精霊と騎士」 （前書き）

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争により、世界は二つに割れた。

そこで少年達は選択する。

こちらは”精霊と魔法そして人間が当たり前に共存する世界”の物語です。

お楽しみ下さい。

第二話 「きみと精霊と騎士」

「助かったよオバサン。パーティーでは何も食べてなかったから」

「元々あなた達の為のお祝いだったから、いなくても家族の分も作るわよ」

カチャカチャと流し台で皿を磨く。

俺が洗っているのは先程食べ終えた夕飯の食器類。

その俺の隣で洗い終えた皿を受け取っては布で拭いているのはティアのお母さんだ。

毎日ティアの家でタダ飯を食べさせて貰っている俺としては、食事後の皿洗いくらいは手伝せて貰っている。

本当ならこんな事をいくら手伝つても恩は返し切れないのだが、これくらいしか手伝わせて貰えないのが実情だ。

おかげで俺の皿洗いスキルだけはそらの主婦に負けないレベルだと自負している。

「でも、良かったのか？ティアの分もあつたんだろ？」

「良いのよ。あの子は城のパーティーで食べてくるだろうから」

口を動かしながらも二人の作業は手慣れたもので、綺麗になった

食器を次々と重ねていく。

「それに、きつと断つても他の皆さんに無理やり食べさせられてるわ」

「そうだね。実際俺と話している最中に騒がしい人たちに連れてかれてたよ」

「あらあら。それは悪かったわねアイン。あの子断ることが苦手だから」

「アハハッ。俺は気にしてないし、それだけ人気があるってことさ」

柔らかい喋り方と微笑みのオバサンと話しているといつも空気が暖かい気がする。

一緒にいるだけで自然と笑顔が溢れてくる。

娘のティアも、そんなオバサンに似たのか種類が違うが人を寄せ付ける魅力があると思う。

なんといえは良いのか分からないが、ティアという人物は面白いというか一緒にいて飽きさせない。

会話でも仕草でも、ティア自身を見ているとウズウズしてきて次々と構いたくなってしまう雰囲気を持っている。

決してティアが頼りないからとか、情けないとかでも無い。

実際、女でありながら17歳という若さで正式な騎士に成るというのは実力の証であり、多くの女性の憧れにもなっている。

そんな偉業を達成しておきながら本人は一切高飛車な態度を取ることも驕る事も無い。

頼りになる上に、老若男女誰に対しても面倒見も良く、強引さに弱

くてイジリ易いのだから、身近な存在に感じさせるのだ。

だからこそティアはこの街も城の人達にも人気があつて、よく本人の意思に関係無く引つ張りだになっている。

それだけに、途中でパーティーを抜け出てきた俺とは違って他の出席者が帰る事を許さないだろう。

「それでアイン・・・」

「な、何かな」

食器の片づけが終わって前掛けを外したオバサン。

そのあまりに急激な声のトーンの変化に戸惑ってしまう。

小さい頃からティアと一緒に何度も怒られていた俺は、この声を聞くだけで萎縮してしまうのも仕方ない。

「あの子はどこのお嬢さんなのかしら？」

居間からは三人の笑い声が聞こえる。

「アーシェってどこかのお姫様みたいっ」

「あら、どうして？」

「だってこんなドレス着てとってもキレイなんだもん」

「ばっかだな」マリアは。ホントのお姫様は部下も連れずにこんな街に来たりはしないんだぞ」

「だってお肌だってスベスベだし凄い良い匂いするんだもんっ！」

「う、確かにアーシエはキレイだけど・・・それでもウチみたいな所に来たりはしないっ！」

「ふふっ二人ともありがとう。きつとね、あなた達みたいな素敵な子達がいる街なんだからお姫様が遊びに来るんじゃないかしら」

「お兄ちゃんが赤くなってるっ！」

「うるさいなっ！別に赤くなってるってないっ！」

床の絨毯の上に白いドレスを広げて座るアーシエとその膝の上に座るマリア。

椅子に跨る様に反対向きに座っているルー。

居間では食事を終えた三人が楽しそうに笑っていた。

その様子を見て微笑んでから、オバサンは言った。

「アインっ彼女が街で見かけた貴族のお嬢さんだなんて、オバさんにウソ付いちゃダメよっ」

「い、いや嘘じゃないよっ、たまたま一人で暇だったらしいから街を案内してたんだって。それで腹減ったって言うから連れてきたんだよ」

「違うわよ。どうしてか知らないけど、それは本当の事でしょうね」

「じゃあ、どこが嘘付いたっていうんだよ」

「彼女が貴族だって言った事よ」

「どこからどう見たって貴族のお嬢様じゃないかつ」

苦しい嘘だった。

というよりも嘘を付くしか無かった。

居間でマリアが嬉しそうに乗っかって抱きついている銀髪の少女。

彼女は貴族のお嬢さんでも、マリアの言うように何処かのお姫様なんかでも無い。

正真正銘、このレギンレイブのお姫様なのだ

そもそも、何故そのお姫様をこの家に連れて来る事になってしまったのか。

それを思い出すと頭が痛くなってしまう。

街で遭遇してしまったアーシェことアシェラ王女。

俺は彼女の希望通り街を案内した後、俺の家を見たいというから連れて行った。

自宅に來た彼女はお宅探索を楽しんでから俺の部屋で好き勝手に散々寛いだ後、急に『お腹が空いた』と言った時は驚いた。

基本的に俺は幼なじみであるティアの家で食事をするから、自宅に食べ物なんてまず置かない。

唯一つあった、ティアお手製のビスケットもあっさり平らげられてしまったのだ。

出来る事なら、一部の人間しか知らない彼女をもう一度街を連れ歩くのは避けたかった。

彼女の容姿は目立つのだ。

着ている白いドレスは外套で隠されたとしても、あの銀髪に白い肌と紫の瞳は視線を否応にも集め過ぎる。

勿論、城に帰る事も薦めたのだが、

「イヤ」

の一言であっさりと棄却されてしまった。

さてどうしようかと悩んでいた時に、今朝、オバサンがオレとティアのお祝いでご馳走を作ると言っていたのを思い出した。

姫様だという事さえ誤魔化せば大丈夫だと思って、彼女をこの家に連れて来たのだが、最初に家に入った時の三人の驚き方は予想以上に凄かった。

オバサンとルーは彼女を紹介する前に脱兎の如く俺を台所に連れ込んで犯罪者のように尋問してくるし、喜んだマリアは真っ先に彼女に飛びついてそれから食事が終わっても離れなかった。

三人はドレスを着た女性が入って来た事よりも、俺が急に珍しく客人、しかもドえらい綺麗な女の子を連れて来た事に驚いたらしい。

その時にした彼女の紹介が・・・

『彼女はアーシェという名前で、城のパーティーから抜け出た貴族のお嬢様。街で散歩していた所にパーティーから早めに切り上げた俺と出会い、街を案内してお腹が空いたので夕飯をご馳走になり連れしてきた』

三人に嘘を付くのも彼女に嘘につき合わせるのも心苦しかったのだ

が、彼女が街で噂のシェーラ姫その人だ、と正体を言っていたら真面目なオバサンは城に彼女を帰そうとする。

彼女が帰る事を望まなかったからついた嘘だったが、単純に俺自身、彼女ともう少し一緒にいたかったのもある。

三人は信じてくれたようで、俺と彼女は一緒に夕飯をご馳走になった。

少しだけ彼女が食事に対して好き嫌いの我儘を言わないか心配だったが、誰よりも先に食べ終わっておかわりまでしまうのだから彼女の食欲を心配すべきだった。

そして、食事後は三人で楽しそうに談話しているものだから、すっかり安心していた。

しかし、それは誤りだった。

「ふう、アインがいくら誤魔化そうとしても私には彼女がアシェラ王女にしか見えないわ」

心臓が飛び出るかと思った。

「彼女が着ているドレスに施された刺繍。あれはこの王都で王家御用達の店による代物よ。それを着る事が許されるのは王家の血縁だけなの」

「やれやれ、そんなの知らなかったよ」

そんな自分が知らない情報まで捕捉されてしまったては、もうどうしようも無かった。

「まだまだね。女は観るところが違うのよ、マリアとルーでも本質的には気付いてるわ、それに一番の理由はあなたよアイン」

「オレ？」

自分としては、咄嗟に出たにはなるべく嘘を混ぜずに上出来な言い訳だったと思う。

「長年あなた達を見てきたのよ。あなた嘘がヘタなんだから」

「はあっ分かったよ。オレの負けだよ、嘘付いてた事を認めるよ。」

ジト目でにやけているオバサンに俺は完全に観念するしか無かった。降参するように両手を挙げる。

「それにしても気付いていながら、よく黙っててくれたね」

「たしかに少しお城に帰すべきか悩んだわ。でもね・・・」

台所から見える三人の姿。

「私、アーシェのお友達になってあげるねっ」

「まあ、嬉しいわマリア」

「し、仕方ないからオレも友達になってあげるよ」

珍しく人見知りのルーもマリアと一緒にたってお客さん（アーシェ）と楽しそうに今も談話している。

それにアーシェも二人の子どもに合わせるといいうのでは無く、本人

が楽しんで接しているようだった。

「彼女自身があんな楽しそうにしてるし、息子^{アイン}が連れてきたお客さん（アーシェ）に失礼な真似は出来ないでしょっ」

そう言つてウィンクしたオバサンは居間へと向かう。

- やっぱりオバサンには頭が上がないな -

出てくる溜息と笑顔をその背に向けた後、四人の笑い声の中に俺も入っていった。

時刻は既に人々が寝静まる時間。

オバサンとルーは二階で寝床の準備をしている。

俺とシェーラ姫は居間に隣合つて座っていた。

肩が触れそうで触れない。

でも、眼を瞑つても存在を実感出来る、そんな距離だった。

何か口にして話す訳では無い。

ただ近くいる、それだけで十分だった。

言葉を話すよりも、今の時間を大切に楽しみたかったのかもしれない。

静かにゆつたりと時間が流れていた。

「・・・楽しかったか？」

「ええ・・・とても」

アーシエは膝の上ですうすうと可愛い寝息を立てているマリアの髪を撫でている。

マリアを見つめる視線は柔らかく、愛しいモノに触れるように手付きは優しい。

本当は彼女が楽しんだかなんて聞くまでも無かった。

ただ、彼女の口からどうしても聞きたかったのだ。

”アーシエとしての時間は終わりにしないとならないから”

「私が城にいる時はね、ただ塔から街を眺めてるだけだった」

「そうか」

「城の人は皆アシエラに優しいわ。勿論信頼もしている」

アーシエは城へと帰り、アシエラ王女に戻らなければならない。

彼女もそれを分かっている。

「でも、そこでアーシエにはお友達と呼べる人さえいないの・・・
ううん、家族と呼べる人以外、アーシエは存在していない。いくら私がそう接しても、人から見れば私は王女だから」

生まれながらの王女としての宿命。

しかし、その宿命は一人の少女としての存在を確実に奪い去った。

だからだろう。

アシェラ王女としての顔が知れ渡る前に、今まで眺めて来た街を楽しみたかったのは。

「ありがとうアイン・・・私は本当に楽しかった」

それは儚くて消え入りそうな笑顔だった。

彼女は、アーシェでも無い、街で噂のシェーラ姫でもない、レギンレイブ城に住むアシェラ王女に戻る。

「オレは、キミを・・・」

アーシェという一人の少女の姿。

そして、彼女の願いと夢の本当の意味をやっと理解した。

その瞬間だった・・・

ドンッ！！！

地響きの様な轟音。

「ぎゃっ！」

「なんだ!？」

ドドンッ!!!!!!

再び連続してが鳴り響いた音は建物全体を揺らすようだ。

「外だ!」

椅子から立ち上がり、玄関のドアから外へ飛び出す。
通りに飛び出して身が震えた。

「南東の空が赤い・・・」

日はとうに沈み、西の空には星さえ見えるのに建物の向こう側、南東の空が夕方の様に赤く彩られていた。

- あの方法は商業地区・・・ -

11番街はレギンレイブの外周部、南側に位置し、旅の窓口でもある街だ。

ティアの家は、民家が立ち並ぶ居住区にあり、11番街でも西側に位置する。

空が赤く染まる南には商業地区がある。

ドンッ!

ドンッ！

断続的に爆発音が続く。
次いで鳴り始めた警鐘。

一瞬だが建物の向こうにデカイ火柱が上がるのが見えた。

「おかしい・・・あの位置は商業地区といっても、宿屋が主で爆発物なんて・・・」

左目に手を添える。

「火事かしら・・・」

音を聞きつけたオバサンとルーも家から出てきた。

「ただの火事じゃないっ！」

―あれはっ―

急いでウチの中に戻り、壁に立掛けてた剣を取って外へ出る。

「行くのアイン？」

その様子を玄関先から見ていたオバサンは心配そうに聞いてくる。

「ああ行ってくる！オバサン！彼女を頼む！」

「アインっ！私も一緒に行きます！」

「ダメだ！ここにいるんだ！」

南の夜空を紅く染める街並み。

―あそこには精霊がいる―

アインはその中心に向かって走り出した。

――

燃え盛る炎は原型が分からない程周囲の建物を焼き崩し、夜を昼のように明るくしている。

広場の石畳には木材やレンガ等の残骸が所狭しと散らばっていて、その隙間を縫うように悲鳴を上げて逃げる人々。

その紅く照らされた景色の中で、一人の女の子が戦っていた。
青い衣を翻し、首にトレードマークの首輪を付けた若き騎士。
燃えるような赤髪をしたティアだ。

「早く逃げて！」

剣を両手で構えているティアは後ろに向かって背中越しに叫ぶ。
その後ろでは逃げ遅れた宿屋の主人が腰を抜かして地面に尻餅を付

いていた。

「あああああ・・・」

宿屋の主人は恐怖した。

威勢の良い少女の叫び声じゃなく、ティアの前面にいるモノにだ。

グウオオオオオオオオオオ！！

咆哮を上げる赤い獣。

それは火の属性の精霊。

熊のような獣から立ち塞がるティアの脳天に向かって右手が振り下ろされる。

真上から落下してくる爪をティアは剣の腹で受け止める。

ガキィッ！と金属同士がぶつかるような音と共に押し潰すような衝撃と重圧。

全身で力を込めているが、重圧に負けて片足の膝が地面に着く。

「くうっ！アンタ根性出して逃げなさいっ！死ぬわよっ！」

「はっはいいいいいっ！！」

宿屋の主人は、ティアの一喝に驚いて犬のように両手両足を使って走り去っていった。

とりあえず、周囲の人間を避難させる事が出来たが今の状況は危険だ。

「なんて力なのよっ！」

自分の数倍もある精霊に対して、両手で持っている剣に全身の力を込める。

一瞬でも弱めたら、その鋭い爪で引き裂かれるからだ。しかし、必死に受け止めているのは片手だけ。

グウアアッ！！

案の定、真横からもう片方の左手を振るってくる。

っ！？ -

とつさに両手剣を左手だけで支え、腰に差している剣を右手で抜き放ち左の爪をガードする。

「っああ！」

剣の上からでも、ティアの全体重は身体ごと真横に軽く5メートルは弾き飛ばされる。

素手の打撃なのに、それはウォーハンマーを大の男数人で振り回したかのような衝撃。

骨の髄まで響く攻撃に、受けた剣が折れなかったのが奇跡だった。

- 何て重い魔力の籠った一撃っ！ -

地面に当たる直前にそれぞれ片手で持った二刀の剣の右手の一刀を地面に突き刺し、それを軸に体制を立て直し着地。

それを見た精霊が雄叫びを上げる。

「大丈夫ですか騎士様！」

スグには立てないティアに二人の男が駆け寄る。

彼らはレギンレイブ城と、この国を守る兵士。

城で行われていたパーティーは王女が行方不明という一大事で一時中断、即座にパーティー出席者も含めて城総出で王女の搜索となっていたのだ。

そこで、ティアもアシェラ王女を探していたのだが、まさかとは思いつつ城の兵士と一緒に11番街に搜索に来た所だった。

「騎士様！我等も加勢致します！」

「おおおおっ！」

た二人の兵士は剣を構えて左右から挟むように精霊の元に走った。

「だっ！だめええっ！！」

二人の兵士の行動は、勇士というより無謀。

ティアは咄嗟に声しか出なかった。

「がはっ」

「ぎゃああっ」

兵士の剣はどちらも精霊には届かない。

一人は剣ごと爪によって引き裂かれ、もう一人は辿り着く前に炎に身を焼かれた。

二人とも即死だった。

しかし、やられたのは二人だけではない。

ティアが火の手に気付き、広場に駆けつけた時にはこの一角は既に地獄と化していた。

燃え盛る炎で既に焼け死んだ者、吹き飛んだ建物の残骸に潰された者、引き裂かれ肉塊と化した者、建物だけじゃなく多くの者が命を奪われた後だった。

ティアは視界に映る景色に齒を噛み締める。

「マキ！」

ブウウンと音を立ててティアのすぐ斜め上の空中に赤い線が引かれていく。

それは一周して円になると二重になり、空間を指定する。帯には文字が浮かび上がり、世界に法則を描く。

「援護して！」

輪の中で呪文同士のパスと相乗効果、因果を結び付ける線が入ると魔法陣が完成する。

発光する魔法陣から赤い猫、ティアの精霊が現れて可愛い鳴き声を上げた。

「許さないっ！」

—これより、魔力を行使する—

下半身を包み込む薄く青色に発光した膜のようなモノは魔力。
ティアは魔力を添加剤に、通常の筋力では出せない速度で弾け飛ぶ
ように一直線に精霊に向かって疾走する。

精霊は人間の速さを逸脱して走る赤髪の人間に唸り声と共に赤い魔法陣を作り出し、炎を飛ばす。

精霊が生み出した火球はティアには見えていない。
今のティアに見えるのは仲間を傷付けた精霊だけだった。

しかし、直進するティアに火球は当たらない。
直撃する前に精霊が放った火球は、ティアの精霊が火球を放ち相殺する。

ドオンッ！

激突する魔法は広場に二階建ての建物よりも遥かに高く爆炎を巻き起こす。

その立ち上る火柱から・・・

「ハアアッ！」

双刀を振るってティアが飛び出す。

キキイン！キキイン！

グアアア！

肉薄する、赤い髪の少女と赤い獣の精霊。

広場にティアと獣の叫び声と剣と爪の激突音が響く。

ティアは両の手に握る二本の剣を縦に横に振り、獣は両の爪を持ってそれを防ぐ。

「よくも！街を！仲間を！皆を傷付けたな！」

次々と繰り出す双刀による剣撃。

踊るようにステップし、時にしゃがみ、飛び、回る。少しずつ後ろに後退する精霊。

「しっ！」

追撃するように右手に持つ剣で胸元に向かって突きを放つ。

ギャリリン・・・！！

剣先が胸元まであと僅かな所で毛に届く前に剣芯が左の爪で抑え込まれる。

「くっ！」

剣を引き抜こうとするが万力の様な力で挟まれた剣はビクともしな

い。

猛禽類の如く叫び声を上げる精霊の空いた右手が真横の死角から暴力的に振るわれる。

それを本能でパツと右手を剣の柄から放し、その場に身を屈め回避する。

ゴオッ！と、頭上を通過した暴力は髪の毛を数本切り裂いていく。

ティアは屈んだまま逆時計回りに旋回。

―狙うのは剣を掴んでいる爪！

左腕を斜め上に精一杯伸ばし、獣の右手と交差するようにもう片方の剣を掴んだ左の爪目掛けて振り向く。

ギンッ！

と、その一線は剣を挟んでいた獣の爪の根元辺りを切断する。

爪にも神経があるのか苦痛の叫び声をあげる獣。

その一瞬の隙をティアは逃しはしない。

―ここで決める―

カッと見開いた茶色の瞳は獣の隙とその場にこぼれ落ちた剣を捉える。

剣が地に着く前に柄を再び右手に掴むと時計回りに旋回する。

しかし、今度はさつきとはまるで違う。

両の手に強く握られた双刀の剣。

左足を軸にして捻る身体。

強く踏み込む右足からは青い火花が散る。

そして全身は強く発光する。

それはティアという自分の最も身近な身体（道具）に魔力と術式を注ぎ込み、爆発的な身体能力を生み出す魔術。

更に剣さえも魔力で包み込むのは、これから起こる衝撃を倍加させ、剣自身を破壊してしまわない為だ。

ティアは円運動の遠心力と全体重を込めた両腕を振るい、

「ハアッ！！！」

気合いと大量の魔力を双刀に込めて獣に叩き突けた。

ドッゴオオオン！と砲弾のように数十メートル吹っ飛ぶ獣は、破壊音と共に三階建ての建物の壁面へと突っ込みかろうじて半壊に留まっていた建物を完全に崩壊させた。

レンガ造りの建物は瓦礫の山と化し、獣を三階分の重量の下に埋める。

「はあっはあっ」

崩壊が止み静寂する広場に響く荒い呼吸。

大きく肩を上下させているティアは精霊が埋った瓦礫の山から視線を逸らす事は無い。

その視線の先では崩壊が止んだ瓦礫の山が、まるで心臓の鼓動のよ
うに膨れ動いている。

吹き飛ばした精霊がまだ動いているのだ。

ティアはその様子に驚きもせず右手の剣を腰の鞘へと納める。

「マキ！大きいのかますわよ！」

ニヤ〜と、とても場違いな癒し系の鳴き声を上げて、マキと呼ばれ
るティアの精霊は霞んで消えた。

ティアは消えた精霊を見る事もせずに一度深呼吸する、

そして右手を建物の上空へと向かって伸ばして、ゆっくりと瞳を閉
じる。

「我が魔力で

法を刻み

その理りを唱えよう」

その言葉で外界からの意識を全て遮断する。

魔力とは内から生み出されるモノではなく、世界から与えられる僅
かな力。

しかし、精霊を共に在る者は違う。

精霊は世界より生まれ、その精霊と共に在る者は、

” 精霊が内に在る時に精霊を通して世界とのパスが繋がり魔力の供給を受ける ”

その量は通常の人とは異なり、比べ物にならない程の量の魔力で、それによって自分の器に比例して魔力を蓄える。

” 精霊が現界している時は、供給は受けられず器に蓄えた魔力を使用する ”

精霊から流れる魔力は世界へ放出する時に精霊と同じ指向性（属性）が付加される。

ティアが持つのは ” 火 ” の属性。

足元から頭の先まで包み込んでいた何の属性も持っていなかった純粹な魔力。

その青い光は、ボフツと火の粉を噴くように赤色に変わり瞬く間に全身を包み込む。

上空へ広げた手の平からは赤いオーロラみたいな帯が上空へと伸びていた。

ジ、ジジ、ジジジ・・・

セミが鳴き声のような音を立てて赤い文字が宙へ弧を描きながら環を作り出す。

「燃え上がる炎

赤熱の剣を掲げ

一筋の閃光となりて我が的を貫かん」

その声を起点に手の平が赤く輝く。

文字の環を補足するように文字から文字へお互いの呪文を相乗するために線が走り、それらを囲む輪が上掛けされ、魔法を発動するための完成する。

口から発する詠唱は文字通り呪文であり、魔力を用いて自分だけの内なる法を描く為だ。

ただ浮かべるは一つの事柄、自分だけの『魔法』。

それは”剣”

「燃えろ！

炎剣フランベルジェ（揺らめく炎）！」

更に上空にもう一つ一回り小さい赤い魔法陣が浮かぶと中から、赤い猫が現れて口から赤く燃えた刃を吐き出す。

その刃は上空に浮かんだ複数の魔法陣を貫き、閃光となって瓦礫の山へと突き刺さる。

ズ、ドンンンッ！！！！

その瞬間、大気と地面が揺れた。
地に刺さる灼熱の火柱は一瞬の内に瓦礫の山と土を抉り上空へと撒き散らす。

「はあっ！はあっ！くっ」

髪を巻き上げる熱風と黒煙は広場を埋め尽くし、火の粉とその残骸がバラバラと広範囲に舞い降ちた。
ティアは掲げた右手を下ろして左手に持つ剣を地に立てると、その場にペタンと座り込んでしまう。

いくら呼吸しても、酸素が足りない。

これは単なるスタミナ切れだけでは無い。
身体に巡る魔力は精霊から輸血されてくる第二の血液のようなモノ。精霊を現界していない時は輸血され続け、現界している最中はその供給が絶たれてしまう。

今の状態は、魔力行使と魔法によりティアという貯蔵タンクをギリギリまで使い切り、尚且つ供給も絶たれている状態。
先の魔力行使で身体を増強して動かした反動で身体は軋み、魔力不足による貧血の様な現象が起こっているのだ。

地に手をついて頭を垂れ、ひたすら苦しそうに呼吸を繰り返すティア。

赤毛の猫がトコトコと歩みより心配そうにティアの姿を見つめる。そして何も声を上げる事無く、少しでも魔力を供給する為に世界へと消えていった。

グアアアアアアアアアアア！

地響きのような怒りの咆哮。

視界を前方に向ける。

薄くなつていく煙の隙間に二本足で立つ赤い獣の姿が見えた。

予想外の事では無かった。

「同じ属性なんて、やっぱり相性が悪いわね・・・」

同じ属性を持つ相手に、同じ属性は効きにくい。

これは魔力を使う上での常識。

ティア自身火の属性には耐性がある。

常に外皮に薄い膜があつようなモノで、多少火の中に突っ込んだとしても火の属性でティアがダメージを受ける事は無い。

そして、同じ属性の魔法だとしても直撃した場合は傷を負う。

自らが常に持つ魔力は同じ属性を弾き易いだけであって、それ以上の魔力を当てられれば容易く防御を突き破り負ってしまうのだ。それは精霊も例外じゃなく、目の前の同じ属性を持つ精霊も無傷では無かった。

剣によるものか、魔法によるものか分からない。
おそらくその両方だろう。

陥没した地面から這い出て来た獣は、肩から腹部にかけて大きく切り傷を負い、そこからはダラダラと流れる血液が毛を黒く染めていた。

しかし、それだけだった。

「全力だったのにな・・・」

同じ属性で耐性があるのは分かっていた。
だからこそそれを見越しての全力の魔力を込めた攻撃だった。
それでも精霊を仕留めるには至らなかった。

グルルルル・・・

精霊の瞳には、ティアに対する殺意が籠っている。
火の粉を放つように爛々と全身から魔力を放っている精霊。
それは、この戦闘がまだ終わらないという事を感じさせるには十分だった。

左手に力を入れて、剣を支えに立ち上がる。

しばらく、魔法は使えない。

自分の精霊から魔力の供給があるから徐々に魔力は溜まっていつて
いる。

でも、それでも2、3日立たないと簡単な魔法程度しか使えないだ
ろう。

先程使った魔法は、ティアという器に溜まる魔力を限界ギリギリま
で籠められていた。

剣で戦うしか無い。

地面に刺さる剣を左手で抜き放ち、シャツの上から腰に巻き付けら
れたベルトの鞘に収まる剣を右手で引き抜く。

「つつ!？」

腕に走る激痛に抜きかけた剣は右手から滑り落ち、地面へと倒れ込
む。

右手を見ると、手袋はボロボロに焼け焦げて、その下の皮膚は火傷
によりボロボロだった。

しかも、その火傷は手の平だけじゃなく肘辺りにまで追っていた。

「・・・まだ早かったかな」

白い半袖のシャツを着たティアが火傷しているのは、剥き出しの右
腕だけ。

精霊による攻撃による火傷なんかでは無い。

これは代償。

さっきの魔法は、不完全だったのだ。

今のティアが使うには法も、それを描く魔力も足りていない。

結果として、精霊を討ち損じた上に還った魔力は自身の手を焼いた。

右手は使い物にならない、その上魔力は空、身体はガタガタ。

「それでも負ける訳にはいかないっ！」

頭と視界に入るのは、戦いの余波で既に残骸と共に広場の端に転がってしまった無念の数々。

状況は最悪だが、戦う理由がある。

歯を食いしばり、左手に握る剣を両手で握り締めて精霊を睨みつける。

目の前の敵は既に攻撃態勢に入っていた。

ほんの一瞬自分の身を抱きしめるように縮み込ませ、溜めたものを一気に開放するように両手を広げた。

グウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

雄叫びと共に、精霊を包み込んでいた魔力は精霊を中心に球状の魔方陣を作り上げて魔力は弾け、全方位に炎を飛ばす。

「なんてムチャクチャなヤツっ！」

精霊の攻撃はティアを狙っただけでは無い。瞳に写る全てに対する無差別な攻撃だった。

破裂した炎は上空で弧を描いて火の雨となって広範囲に降り注ぎ、地上のあらゆるモノを襲った。

ティアの身長を上回る火球は宙から絶え間無く落下する。それらは建物の残骸も動かぬ遺体も焼き尽くし広場を火の海と化した。

ティアは無理やり身体を動かして交わすのが精一杯だった。

「この状況、どうすれば良いのよっ！」

その中心にいる精霊に近付く所か、火球が飛ぶ範囲は一層広がっていく。

そして、まだ倒壊していない建物にも火を付けて、侵食していくように次々と建物が崩れていく時だった・・・

・・・え・・・ええ・・・

自分の耳を疑った。

・・・ええ、ええん・・・

確かに聞こえる子どもの泣き声。

そして、その割り込んできた存在に精霊も気付き炎が止まる。

くっ、精霊にも気付かれたっ！どこなの！？ -

一瞬訪れる静寂。

それは、ティアが子どもを見付けるのが先か、それとも赤い獣が新たな敵を見付けるのが先か。

・・・グ・・・ウオオオオオッ！

急に方向転換をして四足で走り出す精霊。
その先を視線で追うと、積み重なるの瓦礫の隙間から泣きながら這い出てくる小さな男の子が見えた。

「くっ！」

持っていた剣を放り捨て走る。

精霊からの距離は10メートル程で、ティアはその倍近く離れた所にいた。

その上、先に気付いたのは精霊。

遅れたティアだが、ほんの僅かだけ回復した魔力が足に青い輝きと一瞬の加速を弾き出す。

「間に合ってっ！」

爪を振り被る精霊。

しかし、その爪が子どももの柔肌へと届く前に、魔術行使で精霊を追い抜き子どもを抱き抱えて距離を取る。

「う、あああ・・あああ」

「・・・良かった」

腕の中で、泣き始める3才程の男の子。その重みと暖かさに笑みが溢れる。

しかし、その安堵も束の間だった。

グウアアアアアア！

叫び声に顔を上げると、精霊は既にティアに向かって火球を放っていた。

身体は動かそうとしても、震えるだけで動いてくれなかった。

「避けられないっ！」

せめて子どもの盾になる為に地面に座り込んで、その身体を強く胸に抱いて迫る火球に眼を瞑った。

頭に浮かぶのは死への恐怖では無い。

腕の中にある一つの命と胸の中にある一人の少年の姿。

ドオオンッッ！！

地に渦巻く火の柱。

男の子が這い出た建物も巻き込んで紅蓮の炎は物質を燃やし尽くす。

その中でティアは瞑っていた眼を開ける。

視界を埋め尽くす紅い奔流は、自分らを避けるように左右を走っている。

やがて、炎が収まったティアの瞳にはよく見知った背中が写り込んでいた。

黒と赤の生地金の刺繍の上着、それは自分が着せたくて用意した

物。

いつも見てきたその姿は、どんな時も何よりも頼りにしている胸の内と同じ姿。

「無事で良かった、後は任せろ」

その声を聞くだけで心が安心する。

「こら、遅いぞっ」

茶色の瞳に涙が滲んでくる。

視界の中、手の届くスグ傍には剣を構えた黒髪の幼なじみが立っていた。

第二話 「きみと精霊と騎士」 （後書き）

次回予告

暴走する精霊に対峙したアイン。

一方で、アーシエは精霊と戦っていたティアの母親ソフィアと対峙していた。

王女であるアシエラとアーシエ、同じ人間でありながら他者から見られる姿は二面性を持っている。

心の中で葛藤しながら、アーシエは想いを胸に歩みを進める。

第三話

「アシエラとアーシエ」

騎士となるべき少年の姿を胸に秘めて少女は選択する。

同時進行で進めていきます、

『ヒトというナの』

”精霊と魔法が混在する隠された真実世界”の物語。

良ければ併せてお楽しみ下さい！

第三話 「アシェラとアーシェ」（前書き）

本来は、第二話の続きの予定でしたが、仕事の都合により期間が空いてしまったので投稿のため第三話としたいと思います。

そのため、第二話のその1を削除し、あとがきに次回予告を加えました。

ついでに前書きも統一しました。

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争により、世界は二つに割れた。

そこで少年達は選択する。

こちらは”精霊と魔法そして人間が当たり前に共存する世界”の物語です。

お楽しみ下さい。

第三話 「アシェラとアーシェ」

丘の上にある太陽の光を照り返す白き堅牢な城壁。

その中に聳え立つ二本の塔はレギンレイブ城の象徴といえる巨塔。

片方は騎士や兵士が多く出入りする「騎士の塔」。

それとは違い、城の最奥にありながらも威厳を放っている「王家の塔」は王族を含め一部の限られた人間しか近づく事さえ許されない。そこが、私が生きる小さな世界だった。

決まった時間に起こされて、用意された衣服に身を包み、与えられる食事で胃を満たす。

教育係、先生と呼ばれる人達から作法を学び本を与えられて知識を得る。

毎日同じ事を繰り返しては窓を眺める。

そこから見える景色だけが、いくなれば自分で見つけた唯一つのものだから。

次の日も、その次の日も。

その繰り返し。

その時は自分の境遇について何も考えていなかったし、何で大人達が子どもの自分に対してだけ態度が違うのかもよく分からなかった。

城の中にある書庫には色んな本も沢山あったし、色んな知識も教えて貰った。

しかし、それが結局箱庭の中の世界で得た仮初めのモノだという事

を私は知ってしまう。

塔にある書庫は小さな頃の私のお気に入り場所。

大人でも梯子を使わなければ取る事が出来ない高い棚が立ち並び、所狭しとあらゆる知識が詰まっている。理解出来ない言語で書かれた本や巻物も合わせれば一生かかっても読みきる事は出来ない程の世界がそこにはあったからだ。

一冊の本を見た時だった。

青い染料で描かれた『川』というものの絵。

レギンレイブ王国には幾つも川があるらしく、それはそのうちの一つの川について書かれた本。

それだけならなんてことの無い絵だったのに、急な不安に駆られた私は書庫を駆け巡った。

記憶と書庫を漁り、本を持てるだけ引っ張り出す。ひんやりする石床に何冊も広げては本を見比べる。

片方は青いうねりが描かれていて、もう一冊は激しく荒々しい。更には穏やかな絵もあれば、子ども達が遊んでいる絵もある。

文章を読んでみても書いてる言葉も違うし、絵も違うのに、どれも同じ川について書かれた本だった。

別な事を書いているのに、それが同じ川を書いているというのが何故か私には理解出来なかった。

私はいつも本を持って来てくれる先生を呼んで貰い、疑問を投げつけた。

先生は言った。

それは同じ川について書かれたものだけど、本を書いた人の見たものの感じたものがそれぞれ違かったんだよ。

先生の言葉の意味がよく分からなかった。

だけど、時間をかけて説明された私は理解した。
そして同時に衝撃を受けた。

私を読んできた本や絵というものは、本物が外の世界に存在していて他人がそれを見て感じて書き記した物で、それを通じて知った知識は疑似的な物ではないという事。

そして、結局は自分で見て聞いて感じない限り真実、本物は得られないという事。

それはいとも簡単に容易く私という存在を打ち砕いた。

だって、お城の中しか知らない私の世界では、本や誰かを通じないと外の世界を知る事が出来ないのだから仕方ないのでは無いだろうか。

どうすれば良いのだろう。

私自身、私の存在を否定されたような気分だった。

その日は、床に臥せているお父様にずっと泣き付いた。

お父様もただ涙を流し続ける私に困惑してた。

きつと私の涙の意味は理解出来なかっただろう。

私も何でこんな寂しくて怖いのか説明できないんだから。

いつも、頭を撫でて貰えば泣き止んでいた私も、その日はずっと泣き止まなかった記憶がある。

それ以来、私は本を読まなくなった。
そして気付いた。

城の大人達は私自身を見ていないという事。
小さな世界の中にしかいられない私にとって、私の世界（城の中）は時間が止まった牢獄だ。

私は書庫に自ら行くことは無くなった。

それでも私の教育は続いた。
一人、新しく私の教育係が増えた。

『アツシュ ソル ツヴァイレヴァンテ』

白髪のを後ろで束ねた男性。
物心付いた時からの私とお父様の護衛をしてくれている優しいオジサマ。

お父様も城の大人達も一目置いているし、私の事をお父様と同じく『アーシエ』と呼んでくれる人。

オジサマは他の教育係と違って私に何かさせるといふ事はあまり無かった。

私がすることといえば、部屋にある椅子に腰かけるかバルコニーに足を運ぶくらい。

オジサマがする事はただお話を聞かせてくれるだけ。

でも、それが私にとって楽しみに変わるのに時間はかからなかった。

オジサマが聞かせてくれるのは全て私の知らない外の世界のお話。お城の外には連れて行ってくれなかったけど、バルコニーに連れて行っては色んな所を指差して話してくれた。

「3番街では今お祭りをやっているんだよ」

「7番街から馬車が出て来ただろう？あの馬車にアーシエの服が積まれているんだよ」

「あそこに見える11番街に我が家があつて、今は息子がまだ寝てるかもしれない」

オジサマのお話は面白かった。

どんな話しても耳に聞こえる外の世界は私にとって生きた世界で、毎日オジサマのお話しに胸を踊らせた。

バルコニーの向こうに広がる景色は生きた絵本で、オジサマから聞かされるお話は絵本の物語だ。

小さな世界の中にいる事が当たり前の私。

それからは毎日オジサマから聞かされるお話しを楽しみにしていた。

一際興味が惹かれるのは一人の男の子のお話し。

オジサマの息子で私と同年という事がより一層私の心を引き寄せる。

オジサマにとっては手のかかる息子らしくて、勝手に木に登って落ちて怪我したした事、叱ると男の子が大好きなお婆さんの所に逃げ込んでしまう事、仲の良い女の子とよく遊んでいる事、どんな些細な事でも男の子の事を話すオジサマは嬉しそうで、私も聞いていて

楽しくて仕方なかった。

話を聞いているバルコニーから景色を眺める日々が続く。いつしか話の中で男の子が成長していくのが私の楽しみになっていた。

見たこと、会った事の無い男の子が確かに存在していて、成長している事で私の時間が動いているように感じた。

小さな世界に閉じ込められていた私にとって、世界は生きた物語。オジサマから聞かされて景色を眺める私にとって、その男の子は物語の中の主人公。

私は今日もまたこの窓から夢を見る。

窓から先に広がる景色を覗くたびに、一枚、また一枚と絵本のページがめくられていく。

しかし、そこに物語の主人公はいないから・・・

だから、心の中でまだ見ぬ男の子を描いていく。

男の子は笑っていて、隣には私が並んでいる。

どこかそっぽを向きながら私に向かって手を差し伸べる男の子。

私は顔を見たいけど、男の子が照れているのが分かるから、それが嬉しくて手を握って彼に笑いかける。なんて・・・

それはとてもとても楽しくて幸せな一時。

いつかこの小さな世界を飛び出すことが出来るなら、私も物語の中に入りたい。

そこで『アイン』という名の男の子と出会うその日をただ信じて。

そして、彼は唐突に何の前触れもなく訪れた。

私は運命と呼べるその日を忘れない。

私の物語はその日から『アイン』という名の男の子の登場により本物になった。

「そこを通して下さい」

言葉を発する姿は威厳があつて気高く。

「私は行かなくてはなりません」

紫色の瞳は淀み無く美しく、意思と志を真つ直ぐ貫く為にある。

その視線通り、この少女は何事にも貫く姿勢を崩さない。

それは、純粹に我が道には間違いは無いと信じて疑わない心の在り方の表れ。

しかし、立ち塞がる者はより強固な意志で心を固めている。

「行かせる訳にはいきません」

現状で私が抱えてる最大にして乗り越えなければならない障害。
玄関の前で仁王立ちする門番。

私の視線から逃げる事無く正面から受け止め続ける茶色の髪的女性。

『ソフィア ブリギット ウェングス』

長い間一人でこの家と三人の子どもの母親にして、一人の少年をも
守り育ててきた。

その心は下手な王宮の兵士よりも逞しく強いだろう。

彼が立ち去った後、まるで私がそうするのが分かっていたかのように、
オバサマは家に私を引き込み玄関から退こうとしなかった。

本来、パン屋も営んでいるこの家には外に出入りする入口が三つ存
在する。

しかし、それが初めてこの家に来たところか、城以外の一般の民家
に入ったのも今日が初めてだったアーシェには分かるはずも無い。
それに、どんな時でも別の道、別の選択を探すという事を知らな
かった。

私には他の選択肢が思い付かない。

「お願いです、私には行かなくてはならない理由があるんです」

彼の後を追わなくてはならない。

しかし、私の懇願も目の前の人物は眉さえ動かさない。

「それが何であろうとあなたを通すわけには行きません」

彼の幼なじみである昼間城で会った彼女、その母親であるオバサマ
との押し問答はキリが無かった。

「何故、私をそこまで止めるのですか？」

何故、彼女は初めて会った私をそこまで通さまいと頑なになるのだろうか。

疑問が頭を横切っていく。

私は貴族の者という事になっているのでは……。

鉄面皮だった顔が一瞬悩むように苦悶の表情に変わり、ふう、と溜息をつく。

オバサマはスグに、その疑問を解消してくれた。

「あなたを……いえ、あなた様をお守りするのは国民の義務です」

言い直したオバサマは、今日初めて会った気がしなかった。
今日初めて見た顔なのに、見慣れた表情。

「……アインが話さなくても、そのお召し物を拝見した時に気づいていました。私は以前城で給仕を務めていましたから」

「そう、ですか」

それは落胆する私を氣遣う言葉。

私はアインが話したという事は気にしていない。
オバサマが向ける視線、氣遣う言葉、私に接しようとしなないその表情に息苦しくなる。

彼女達の瞳に見られるだけで私は殻に閉じ込められる。
アイシエ

「この国の王女であるあなた様を危険な所に行かせる訳にはいかないのです」

今、目の前にいるオバサマは城の者達と同じだ。

ずっと向けられてきた視線は私を見ているのでは無く、傾けている耳は私の言葉を聞いているので無い。

彼女達は私^{アシーエ}という個人に触れはせず、私（アシーエ王女）という存在を守っている。

17年間私を閉じ込め続けた存在が、城（牢獄）を出た今でも縛り続ける。

それが少し悲しくて、でも、だからこそこんな所で止まっている訳にはいかない。

胸に手を当てて、一歩踏み出す。

「尚更私を止める必要はありません」

瞳を閉じてまた、一歩踏み出す。

「今ここにいる私はアシーエバーネットレギンレイブではありませんん」

私は城から飛び出した。

ずっと城の中にいる時から決めていた事。

「ここにいるのはただの一人の女です」

彼と会った時に運命を感じた事。

「彼は・・・アインは、そんな私の騎士になる人です」

誰にも譲れないし、引くことも出来ない。

「自分の騎士が戦おうとしているのに、私が見届けない訳にはいかないんです」

私は歩みを止める訳には行かない。

踏み込む先に彼がいるのだから。

「・・・・・・・・っ、ふふ・・・あはははははははははは」

耳を突く笑い声。

さっきまでのオバサマの声とは、雰囲気もトーンもまるで違う。

何がそんなに可笑しいのか。

たしかに城を出たのは今日が初めてだし、オバサマに比べたら多少は世間は知らないのかもしれない。

しかし、何もそんな大声で笑わなくても良いのではないのでしょうか？

精細に頭に浮かぶオバサマの顔。

少し、ほんの少しだけ腹が立ってしまい眼を開けて睨む。

「えっ？」

飛び込んで来たのは、オバサマの顔じゃなかった。

足元にあるのは板張りでは無く石畳の路面。

自分は既に外にいた。

「そうですかそうですか」

背後から聞こえる声に振り返る。

そこには、相変わらず笑っているオバサマがいた。

その脇には開かれた木造のドアと、さっきまで自分がいた部屋がある。

自分はドアには一切触れていない。

ただ、想いを口にして進んだだけ。

「ふふふ、またいらっしやいアーシエ。次はあなたの為に」ご馳走を用意しとくから」

「オバサマ・・・」

腰に手を当ててにこやかに笑うオバサマ姿に、顔が自然と綻んでくる。

私に接する優しい表情とその言葉は、この家に来て一番嬉しかった瞬間かもしれない。

「感謝しますオバサマっ、それに」ご馳走様でした。おば様のお料理とても美味しかったです」

「気を付けて行くんだよ。あなたは女の子なんだから」

「はいっ！行ってきますっ！」

一指し指を立ててウインクするオバサマが、嬉しくて、可笑しくて、スカートを摘んで軽く挨拶して私は走り出した。

礼をする事も、振り返ってオバサマに手をブンブン振る事も気にしなくて良い。

王女である事を知っていても、私として接してくれる人もいる。それが嬉しくて、涙が出てくる。

目元を一旦拭くと、紅く彩られた空の下へ向かって急いだ。

「母さん、姫様を行かせて良かったの？」

不吉な物音が鳴り響く中、妹をやつと寝かしつけたルーは居間には出ないようにして母親達の会話を漏らさず聞いていた。

子どもながらに彼女の人並み外れな容姿はルーも妹も分かっていたことだ。

さつきまで一緒にいた彼女が街で噂をしていたシェーラ姫本人だった事は今でもにわかに信じられない。

そして、今、彼女が向かった先。

姉ならまだしも彼女のようなお姫様が行くような場所では無い事も分かっている。

だからこそ、何故あれだけ頑なに家から出そうとしていなかったはずの母親の行動が分からなかった。

「姫様だったら止めてたんだけどね・・・」

「どういふこと？」

僅かに自分より大きい母親を見上げる。

眩しそうに眼を細める母親のかろっじて聞き取れた呟き。

「さあ、あなたもお家に入りなさいな」

「ねえどういこと母さんっ」

ルーはぐいぐいと家の中へ背中を押されながら首を傾げるしかなかった。

第三話 「アシェラとアーシェ」（後書き）

次回予告

ティアと子どもを逃がして精霊と激突するアイン。

赤く燃え上がり凶刃を振るう精霊。

正に命を燃やしている姿には既に自我と呼べるものが存在していなかった。

魔物と化してしまった精霊を救うためにアインは真価を発揮する。

第四話

「紅い夜」

それは辛く哀しくて優しい選択。

同時進行で進めていきます、

『ヒトというナノ』

”精霊と魔法が混在する隠された真実世界”の物語。

良ければ併せてお楽しみ下さい！

第四話 「紅い夜」(前書き)

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争により、世界は二つに割れた。

そこで少年達は選択する。

こちらは”精霊と魔法そして人間が当たり前共存する世界”の物語です。

お楽しみ下さい。

第四話 「紅い夜」

視界を埋め尽した炎は、地に蹲る赤毛の少女とその腕に抱かれた小さな男の子のスグ両脇を避けるように左右を走る。

赤毛の前髪は熱風で持ち上がり、素肌を焼き、吸い込む酸素は肺の奥に突き刺ささる痛みを与えた。

しかし、それだけで済んだ。

顔を上げて素肌を晒している少女でその程度で済んだのだ。

腕の中にいる男の子は、炎に耐性がある自分が顔が内側に向くように抱いていたし、覆い切れない箇所はあっても軽い火傷程度で済んでいるだろう。

炎が過ぎ去った跡は石床が焼けて赤く発熱し、それがいかに高温だったかを窺わせる。

そんな精霊が生み出した業火をいとも容易く切り裂いた少年は剣を鞘に収めると赤毛と精霊とお揃いの赤い首輪がトレードマークの幼なじみに手を差し伸べた。

「大丈夫かティア？」

「ええ、あと少し遅かったらアウトだったけどね。んっありがとアイン」

「その子は？」

差し延べられた手を左手で握り起き上がるティアと、その脇に並んで立ち上がる男の子。

背丈はティアの腰にも届かない程に小さく、半泣きで現状の保護者の上着を握る姿は彼女の妹よりも幼い。年齢は3、4才といったところだろう。

この街では見たことは無い。

「うん・・・逃げ遅れたみたい」

「そうか・・・」

この騒ぎで親とはぐれただけなら良い。本当に逃げ遅れたのがこの子だけならば・・・。

今は混乱して本人も気付いていないが、この惨状を見る限り男の子の親と永遠の別れじゃない事を祈るだけだ。

アインが口にしなかった意図に気付いたティアは、眼下に目を向ける。

自らの妹よりも小さい男の子。

縋る様な手付きで上着を握るあまりにも小さい手に思い出したように怒りが込み上げてきた。

それに逸早く気付いたアインは口を開いた。

「ティアはその子連れて離れてくれ」

多少言葉は上手くなかったかもしれないが、刺激しないように穏やかに言っただけだった。

しかし、この状況で精霊を任せて離れるという選択は穏やかに話し

た所でやはり意味はなかった。
撤退しろと突きつけられたティアの感情は爆発した。

「何でよっ！許せないのよ！あの精霊に何があつたかは分からないわ！でもね！だからといって誰かを傷付けて良い訳なんてない！」

「ティア・・・」

「この惨状を見てよ！今だってこんな子どもに火を放つたのよ！」

ティアという人間は剣を持つには優しすぎる人間だ。

彼女は傷付ける事を嫌う。

だからまずは相手が傷付かない解決策を探す。

そして、平和に生きる争いとは無関係な人々が暴力に晒され傷付けられる事を最も嫌う。

「分かるでしょ！昼間まで平和にここで暮らしていた人達をアイツが焼き払ったのよ！」

長く一緒に時を過ごした彼女のそんな性格はよく知っている。

怒る理由もよく分かる。

俺もこの街の人間だから。

でも、今、ティアは戦うべきじゃない。

「感情だけで戦うな。ここで確実に終らせないといけないんだ、分かるだろ？」

「でもっ！」

ティアは火の属性を持っている。

赤い髪と情熱家のティアに相応しい属性だと思う。

でも、それだけに同じ属性で魔力の塊といえる精霊を相手にするには相性が悪く、また焼け爛れた右手は少なくとも根性で剣を握れるものでもない。魔力では分が悪く、二刀で実力を発揮するティアが片手しか使えないとなると結果は見えていた。

「あとは任せろって言っただろ。本気なんだぜ・・・俺は」

その言葉には二つの意味が込められている。

本気を出すから一人で大丈夫だ。

という意味と、

本気を出すから見ないで欲しい。

という意味。本気で戦う姿を見せたくない。

誰も知らない訳ではないし、見た事が無い訳では無い。

少なくとも、この街の住人の多くはアインの戦う姿を少なからず見聞きして知っている。

だが、アインの本気、その真価を理解している者はティアと見習い騎士だった時の俺の先生マスターのダグザくらいだ。

「私は！」

「分かってるよ」

気にしない、と後に続くだろうティアの言葉を先読みして打ち切る。

「お前が傍にいてくれるからこそ、いなくなつて欲しくない。できれば見て欲しくないんだ」

「アイン・・・」

ティアの両肩に手を置いて、目を逸らさず諭すようにゆっくりと話す。

これも、この言い争いを納める為のいつもの気持ち。いつもの言葉。長年一緒に過ごして育ってきた幼なじみ。

だからこそ、どんな言葉が続くかは分かっていたし、これは長年言い合ってきたことだ。

それはティアも同じ。

アインの心内を言葉足らずでも理解してしまうし、だからこそこれ以上何も言い返せなかった。

「だから、その子を頼む」

落ち着いてきたティアから、視線を下に向ける。

頭でも撫でてやろうか、と伸ばしかけた手を引っ込めて苦笑する。

男の子は震えながら確かな味方だと確信がある少女の服に縋り付き、見上げるように遥かに自分の小さな体躯より大きな青年を見ていた。

子どもというのは小さな程に素直な視界で純粹に物事を捉える。

培ってきた経験と知識が希薄な分、直感を優先的に判断材料とするからだ。

その直感は街を焼き命の危険を与えた精霊よりも、今日の前にいるアインに向けられていた。

その無垢なる眼には畏怖と警戒が込められている。

そして、それは静観している精霊も同じだった。

「早く、安全な所に連れて行ってやってくれ」

わかったと頷いてティアは、物言わぬ男の子の手を引いて広場を離れた。

去って行くティアとその手を握る小さな背中をアインはどこか哀しい表情で見つめていた。

しかし、それも短い間。

一瞬で見送ると、この元凶に対峙した。

――
――
――

ティアと男の子が去っていく間も、精霊は大人しかった。

というよりも、二人は既に眼中に無い。

この場にアインが現れてから、精霊は呻き声一つ上げていない。精霊に残された本能かなにかが警戒したのだろう。

「ちっ」

思わず舌打ちしてしまう。

漂う赤色の魔力に先程放った炎、巨大な熊がより凶悪化したような姿。

外観に多少の変動があるものの目の前にいる精霊は間違い無く、数時間前に見た試合会場で対峙したジェラルルと言っていた男の精霊。

騎士というモノが称号から、職業としての意味が強くなったのは大戦からだ。

しかし、望めば成れるというものではなく、決して騎士に成るという事は容易ではない。

おそらくはあのジェラルルといった名の男も、見習いとして相当の訓練を積んでいたはず。

たしか騎士に成る理由に金のためにと言っていたが、その考えに至った理由もなにかあったのだろう。

「馬鹿やろう・・・」

苛立ちの言葉は、精霊と共にいるべきはずの者に向けた言葉。

この場にジェラルルの存在は確認できない。

そして昼間の状況と、今、眼の前にいる一現状、《精霊》。

それが全てを物語っている。

今日という日のために彼が費やした月日も、彼が生きた人生も、こんなにも簡単に途切れてしまう。

精霊は魔力の塊とっていい。

魔法による、半身からフィードバックされるダメージは人より遥かに多い。

おそらくは肉体が心が耐えられずに壊れてしまったのだ。
最悪、この精霊は自ら共に在るべき昼間見た男を殺害してしまっている。

それは、この世界に存在する理由を自分で消してしまったということ。

残されたものは後悔か自分に対する憎しみか、それ以外全ての存在に対する怨嗟か、本能さえも残っているかさえ怪しい。

「大馬鹿やろうがつ！」

アインの叫び声に反応するように雄叫びをあげる精霊は、身体中からより強く魔力を巻き散らす。

赤いその身から精霊を形創る魔力が放たれ、周囲に火を灯していく。心も何も残されていない、負の感情が籠った魔力の塊。

眼の前の存在は精霊と呼ぶより魔物と呼ぶのが相応しい姿だった。

こうなってしまう可能性が読めなかった訳じゃない。

その兆候は試合会場で気付いていた。

この精霊が暴走する直接的な原因は対峙した騎士の己が過信と傲慢による結果にあるとはいえ、無様な敗北を与えた自分は間違い無く恨みの対象だろう。

恨まれても仕方ないと思った。

必死になって手を伸ばして届かなかった訳じゃない。
救えなかった訳じゃない。

自分自身にも過信と傲慢があつたんじゃないか、と後悔と救えなかつた事に後悔の念もある。

だが、それも今となつては救えなかつた命。
この場で散つた者達も救う事は出来ない。

だから、今出来ることを選択する。

「行くぜっ精霊！」

剣を鞘から抜き放ち走り出す。

グオオオオオオオオオオ！！

地響きが鳴るほど雄叫びを上げる精霊。
その叫びは戦闘というものが起こる為のファンファーレ。

精霊までの距離は直線30メートル

剣を下段に真つ直ぐ突っ込んで行き距離を一気に半分まで詰める。
精霊が再び雄叫びを上げると精霊の周りに無数の赤い魔法陣が浮かび上がり直径1メートル程の火球が飛び出してきた。
迫る魔法は同じ『火球』、火を発現し魔力が無散しないよう固定するだけの火の属性としては基本の魔法。

「この程度っ」

速度を落とさずジグザグにステップしてかわすと地面に接触した火球は爆発するように高く炎を巻き上げるが構わず疾走する。
ゴオッと音たてた一際大きな火球が眼前に迫っていた。

「ちいでかいつ！」

左手で左目を覆う。

ふっ、と息を吐き出しながら迫る火球を片手で切り裂く。
直接肌に触れなくても前髪を持ち上げた熱風は肌を焼き、アインの突進を止めた。

――残り10メートル

しかし、炎の分け目の先にいるべき精霊はいなかった。

「っ！」

上を見上げる事なく、直感で真横に飛ぶ。
ドッゴオオオン！と、その直後に立っていた場所へ上空から精霊が落下。

全体重を乗せて振り下ろされた右腕は轟音を立てて石畳を抉り地面を吹き飛ばす。

転がって膝立ちするように体制を立て直して土煙の方を睨む。

もくもく上がる土色の煙が赤く色付き、ボボツ！と破裂するように火球が飛んできた。

「ちいつ！」

――昼間よりやはり敏捷性も詠唱も段違いに速いつ！

ぶつうんと青白い薄い膜のようなモノがアインを包むと高速移動を開始する。

即座に迫る火球を真横に避ける、陥没した地面の中心からアインを

追い掛けるように次々と火の玉を打ち出す。

戦地をこの広場より拡大しないように一定の距離を保ちながら精霊の周りを旋回する。

ドオンツ！ドオンツ！と、街に連続して爆発が巻き上がる。

アインは割れた石畳を疾走し、垂直の壁さえ走り、半壊した民家の屋根へ跳躍。

魔力を体内で練り上げて肉体活性する魔術行使。

今のアインにとって、二階建て程度の建物なら単なる段差でしかなく、スピードに乗っているなら垂直の壁も地面と同義だ。

走った後に爆発が迫る。

建物の壁を斜めに走り蹴って跳躍する。

跳躍直後に建物は爆発し破片が舞う。

跳躍中の宙に向かって火の玉が連続して放たれる。

曲芸のように体をクルクルと横に捻って宙返りして避けると、火の玉は夜の虚空へと吸い込まれていく。

ずしゃっと、割れた破片が散らばっている地面に精霊に正対して着地と同時にすぐに移動する。

絶え間なく飛んでくる火球を左手は左目に添えたまま避け続ける。その中で思考する。

——近距離の問題は武器だな・・・

足を止めずに手元の剣をちらりと見ると、両刃のうち片側は溶けて使い物にならなくなっていた。

手の中に握られた鋼の塊。

半分溶解した剣でも、その重量は強固さを窺わせる。

しかし、剣がこんな状態では斬り込めば三回も耐えられない。

——全力を出して斬り込められる回数は良くてあと三回が良いと
こか、確実に決める

思考がまとまると精霊を視界に収めた上で距離を取る。

広場に隣接している建物の中で形を残している建物の上へ跳躍する。

分厚い岩石を削りだして作り出された壁は11番街では一番頑丈であり、この街で一番高さがあり、この広場で唯一つ崩れる事無く立つ建物。

そこは救いを求める者達の最期の堅牢なる拠り所『教会』。

「ティアは完全に離れたな」

教会の屋根に立ったアインは端から精霊と街を眼下に見下ろす。

炎は広場だけでなく既にここを中心に数百メートルに燃え広がっていた。

その原因は言うまでも無く精霊が放った炎が原因だ。

この広場の炎はただの炎ではなく魔法である。

魔法の炎が建物を焼き周囲に燃え移った炎は街の住民が水をかければ消えるが、この広場の炎は物質が燃えている前に魔力が燃えているのだ。

炎が材木を消し炭にして燃やすものが無くなっても魔力が燃え尽きるまで炎は消えはしない。

元を断たない限り、この惨状は終わらない。

目に添えていた左手を下ろして真っ青な両の瞳で精霊を見つめる。

グウオオオオオオオオ！――

灼熱の地獄絵図が再現された広場の中心で臓物に響くような雄叫びをあげる精霊。

崩壊した地面に立ち自身が炎の塊のように紅く、自身を形創る魔力が飛び散り火の粉を巻き散らしている。

その姿は苦しんでいるようでもあり、痛がって叫んでいるようでもある。

ただその理性の無い瞳だけが狂ったように、痛み、憎しみ、恨み、悲しみを真っ直ぐ自分にぶつけている。

『供に存りし者を失った精霊』

精霊がない自分は何しろこれこそが精霊の本来の姿なのかもしれないとさえ思ってしまう。

この姿を見てしまうと人間が内包している精霊という存在に恐れを感じてしまう。

精霊は、共に在るべき者を無くした時に選択しなくてはならない。

新たな存在理由を求めて世界に残るか、世界から消えるか。

この精霊は選択をしてしまった。

ただ消えるのではなく、

『自らの存在を形作る魔力が尽きるその時まで破壊し続ける』

生きる事を選択していれば受肉して肉体を持ち魔獣や果ては神霊と呼ばれるものにまでなっていたかもしれない。

この精霊のように恨みや後悔の念が強く残れば完全に消えることは無く、死霊や怨霊の類となるものもいる。

その可能性を生んでしまった原因と、この惨状の責任は少なからず自分にある。

しかし、もしかしたら、もしかすれば、なんてifを言ったところで意味が無いのだが、それでも思わずにはいられない。

もし、この精霊に理性と意志というものが残されているならば何を想うだろうか。

もし、この精霊と意思疎通が出来れば何を話すだろうか。
怨み言でも言ってくればまだ救われる。

今、俺に残された選択には救いという言葉はもはや残されていない。

目の前にいるのは人という納まる器を無くした破壊の権化。

文字通り塵一つ残さないように殺し尽くさなければならぬ。

焼け崩れた広場から逃がす事も無く、生かす事も無く、無慈悲にも、無情にも、今この場で一秒でも早く完全に滅殺するしかない。

消え去る前に何も言葉として残す事もなく、肉体なんて骨の欠片さえ残りはしない。

全ては、ただ世界へと還すだけ。

自分はその選択をしなければならない。

いつからだっただろうか。

左目に手をかけるようになったのは。

いつからだろう。

この左の瞳で違う世界が見えるようになったのは。

これは昔はアインのクセというものでは無かった。

最初はただこうして左目の視界を塞ぐ事で左目の視界がハッキリ見えただけだった。

俺はどうしてこんな眼を持ってしまったのだろうか。

神なんて存在がこの世界にいたとしたら、それは俺に何を見せようというのか。

少なくとも、使う時人前ではなるべく隠すようになったのは、あの男がこの眼を見て去ってからだ。

——精霊及びこの場の状況は全て記録した

——ティアと男の子も含めて周囲には無人なことも確認した

——精霊に対しても人に対しても自分に対しても、もう遠慮はいらない。

——ここから先には、いかに戦い、いかに殺すか

——思考はただそのみに集約しなければならない

「いま、楽にしてやる・・・」

青色の両眼が精霊だけを見つめる。

紅き獣に投げた呟きは熱風の風に散り、その左目に変化を始める。
ドロツと瞳の中で赤く濁ったモノが溜っていく。

それはナニかが器に注がれていく様でもあり、一人の人間を染めて
いるようでもあった。

そして、青の瞳を真紅に染まり左目の世界が反転する。

それは右目とは見える景色も色もまるで違う世界。

この世界には昼も夜も関係無い。

暗く闇であるはずの夜空はうつすらと青く。

建物や石ころも青く、立ち昇る黒煙もそのほとんどが余りにも希薄
で透けてさえ見える。

その透ける建物達の遥か向こうには、点々と彩りの光点が見える。

右目は青色のままで見える世界は変わりなく、左目の真紅が見るも
のは魔力そのものだ。

建物や水、石ころや植物に至るまで万物を形成する属性を持たない
純粋な魔力は青く見える。

右目では境目さえ分からない広場を埋め尽くす炎も、この右目で見
ればただの炎は青く、火の属性である魔法の炎は赤くその違いが顕
著に分かる。

それらを圧倒するように埋める色。

この瞳は強く濃密な魔力程色濃く映し出す。

眼下を埋め尽くす赤色。

その先にいる強く赤く発光する魔力の塊（精霊）がこの領域を赤く
染めている。

アインは両の瞳で、見る。視る。観る。診る。

右の青の瞳が燃え盛る広場にいる咆哮する赤き獣の姿を捉える。
左の真紅の瞳が赤く視界を埋め尽くそうとしている塊を写す。

獣の姿を形創る朱の塊。

中心が揺らぎ渦巻くと幾何学模様が帯状になって流れ出ていく。
幾つもの円形に浮かび迫る火球を両の瞳が見つめる。

―これより、魔力を行使する―

体躯の内側から瞬時に大量に流れ込んでくる異物を感じる。

血管が何倍にも膨れ上がり流れるように細部にまで染み込み筋繊維に絡み付く感覚。

それを一本一本まで意識して流していく。

両手で剣を右肩に担ぐように構えて身体を捻り猛禽類の如く飛び掛るために全身に力を溜める。

一直線に迫る火球。

その数は四つ、いずれも全身を大きく上回るサイズ。

薄い蒼光の皮膜に包まれてアインの身体が屋根から精霊に向かって弾け飛ぶ。

爆発的な加速と大量の魔力が籠められた一振りが全ての火球を切り裂き精霊に振り下ろされる。

ドッゴオオオン！と一振りは石畳を砕き大地を上空へと巻き上げた。

昼間の精霊だったらこの一刀で終わっていただろう。

しかし、今対峙するのは昼間の精霊と別物。

自身の身体が朽ちる事も厭わない獣は叩き付けられる殺意を本能と魔力を行使して凶刃を逃れた。

舞い上がる破片と土煙は剣を振ったアインの全身を包み隠し視界を覆う。

一刀目をかろうじて跳躍し中空に避けた精霊は砂塵の中にいる殺意の獣に向かって殺意と暴力を返す為に炎を生み出す。

青色の右目を塞ぐ土煙の中でアインは内にあつた大量の魔力を消費して放った一刀を避けられた事実を冷静に考察する。

——あと二回

真紅の左目は舞い上がる薄青の砂塵の向こうに紅い塊を捉える。

一刀目から一秒も立たないうちに土色の煙に紅い残光を残して高速移動を開始する。

爆発的に加速してスライドする景色。

どこまでも伸びていくと確信する全能感が身を包む。

「うっらああああ！」

空に跳んだ赤い塊が地に降り立つ前に真横から蒼い塊が吹き飛ばす。

剣による一振りではない。

あくまで体制を崩すために放った一撃はただの蹴り。

二足で立てば4メートルはある獣を180センチの人間が蹴りだけで広場の端から20メートルは吹き飛ばした。

『魔術行使』は、自分の身体を道具として自身に魔力と術式を注ぐ基本魔術。

そこで体现されるモノは魔力を添加剤にした身体能力の向上で、その効力はあくまで本人の魔力に比例する。

これは自身の存在を燃やして得る赤い精霊よりも単純に圧倒的な量の魔力を眼の前の人間が持っているというそれだけの事実。

瓦礫の上を転がる精霊。

追撃する為に疾走するアイン。

意識外で鮮明に頭に浮かび上がる呪文の数々、更に口頭で文言を詠唱する。

同時に地に浮かぶ幾つもの茶色の幾何学模様。

精霊は勢いが止まると即座に火球を吐き出した。

しかしそれは光と共に地から突き出る石柱の数々に激突し爆散した。

石柱と残骸の間を縫うように紅い残光が駆け巡る。

跳躍し広場から逃れようとするがその行動より先に石柱が壁の如く背後から突き出て阻まれる。

夜空の虚空へと飛翔した殺意の塊に向かって、咆哮というより悲鳴を上げて恐れという名の3メートルはある極大な『火球』を放った

——が、合わせ鏡のように全く同じ魔方陣から放たれた全く同じ『火球』がそれを相殺した。

精霊は恐怖したかもしれない。
逃げる事も出来ない。許されない。

すぐに自分（精霊）を圧倒する異質な存在が空から迫っているのだから。

真紅の瞳を爛々と輝かせたその異質は冷静に中央に佇む獣に向かって、蒼光を纏って流星のように上空から落下した。

――

アインは自分で自分の存在が今だによく分からない。

人間だと思う。

だけど、ただの人間だとは思っていない。

誰しもが持つ自分だけの法を自分は持っていない。

何故この瞳が赤く光るかも、何故この瞳が魔力だけを映し出せるかも分からない。

手で覆っても見えるなら、瞼を閉じても同じかもしれないのだが、どうやらこの瞳は視るという意識の切り替えが無いと意味を成さない。

俺が見る世界を擬似的に視覚化する魔術は存在するらしい。

失った視力の代わりに魔具を埋め込み処置を施す。

大戦中は戦力を増強する為に北の大国で眼を潰し魔眼とした部隊がいたという記録も存在する。

また、呪具の使用や呪いそのものの影響、もしくは自らの眼を捧げ制約することで魔眼とする術もあると聞いている。

しかし、何の処置も施していない純粹な生身の裸眼。
それに何の制約も無く使用している魔眼。

これは明らかに異質らしく、レギンレイブ城の『騎士の塔』にある
書庫にも様々な魔眼の記録はあれど俺の眼と類似した記録は存在し
ていない。

この左目を『真紅の魔眼』と名付けている。

他の魔眼と比べても例が無く、単純に見ただけでダグザとティア
が勝手に名付けた。

それに関しては、魔眼と呼んでいい代物かさえ分からないが俺も文
句は無い。

自分でも他に類を見ないこの眼については曖昧な点が多い。

『真紅の魔眼』について分かることは、

- ・ 自分の意思でいつでも顕現可能
- ・ 変化するのは左目のみ

ここまでは知っている者は多い。

11番街の住民や、今日屋外鍛練場の試合で見た者達も手で隠して
いない時に見れば分かる。

・ おそらく《……》魔力だけが写る

これは魔眼についての知識や精霊がいる者は予想出来るかもしれな
い。

精霊は、存在事態が異なる為に見える世界が違うと言われている。

この世界の物体から生身で生み出される人間は人間から生まれる。人間だけじゃなく、あらゆる動植物もそうだ。

しかし、精霊は世界そのものより生まれる。

精霊はその存在も構成も全く別物なのだ。

それに関しては様々な説がある。

触れられる物体ではなく触れられない物体、呼ぶ名は色々あれど世界はエーテルと呼ばれるものの巨大な塊であり、そこから種のように生み出されたものが精霊とする説。

この世界を創り出した神による奇跡の具現化した奇跡の一つ。

これは、長年魔導師や教会が延々と議論と研究を重ねているが答えは出ていない。

しかし、俺はこの説が両方正解で間違いだ考える。

『真紅の魔眼』が他に類似しない特に異質なものは二つ。

・この瞳が映し出すものは、写った世界をそのまま完全に記録、保存する

・この瞳が顕現すると一おそらく《……………》世界と繋がる

その真価と呼ぶべき特質を知っている者はティアと先生マスターのダグザ、この二人にしか話していない。

『この瞳が映し出すものは、写った世界をそのまま完全に記録、保存する』

これは魔眼というより体質なのかもしれない。

視覚で捉えた偶像をそのまま細部まで鮮明に脳に記録する。記憶ではなく記録する。

この一真紅の瞳で写したもののだけ、いつでもその時見た姿と頭に浮かべることが出来る。

それは記憶のように劣化する事無く、画家の絵より鮮明に脳内に映し出せる。

ただこの眼が写すものは魔力の世界。

生身の状態は記憶でしかなく、従って、記録し続けているものは魔力が形作る偶像や法だ。

そして一番の異質。

『この瞳が顕現するとおそらく（・・・）世界と繋がる』

普通魔眼は魔力を消費もしくは、何らかを犠牲にする制約の元に魔力を発現する。

しかし、俺の眼はその真逆に位置する。

この瞳は俺に魔力を注ぎ込む。

人間は個人それぞれ大なり小なり個人差はあるが器を持っている。持っているというより人間そのものが器なのだ。

魔法を使用する第一歩は、まず始めに自身の器とそこに溜まっている魔力を理解しなければならぬ。

魔法なり魔術なり使用する度に、必要な分器に溜まる魔力を汲み取り、汲み取った分使用する。

放たれた魔力は霧散して世界へと還る。

魔力自体は世界から人に流れてくる。

それを水に例えるのなら、ただの人は水滴をそれぞれのコップや桶

に受けるようなもの。

精霊は世界という大海に繋がる川そのもので、一大海《世界》から一川《精霊》に流れ込む。

精霊と共に在る者は精霊が内にいる間だけ蛇口から魔力を自分という器に注がれていく。

だが、俺はそんな普通のカテゴリーから外れてしまっている。

生まれた時から精霊がいない。

だから俺という器に注がれる蛇口というモノは存在していない。何故かは分からないが、俺という器はそれを必要としない。

『真紅の魔眼』が一顕現している時、俺という器は常に満たしても溢れ続ける程の大海の中にいる。

それは俺という器があるのだから、一回で汲み取れる量には上限があるものの汲み出す分には際限が無い。

”無限ではあるが無制限では無い”

人間でありながら精霊を上回る魔力量。

これが何らかの処置を施して起こした現象ならば納得する。

しかし、この瞳は自然なもの。

自然に成ったものでありながら明らかに不自然で異質。

そして、その異質なものは量だけに留まらない。

魔力というものは器に注がれ放出する時点で何らかの属性が付加されている。

ティアの場合は『火』の属性持つ。

それは『火』の属性を持つ精霊という川の特徴がティアに注がれた魔力だからだ。

その魔力は体内に溜まっている時は純粋な魔力として溜まり、世界に放出される時に『火』の属性として現れる。

つまり、内なる法や術で体内のみで使用する場合以外、体外の世界に使用する場合は個人の決まった属性が否応無く現れる。

だから、ティアは火の属性の魔法しか使えず、それがどんな英雄だろうと変わらない。

しかし、アインはそんな常識とされるその概念に一切当てはまらない。

『真紅の魔眼』が爛々と輝く時。

「アイン《器》がいるのは属性なんてものが一全て在って何も無い《・・・・・・・・》魔力の大海原。

それら純粋な魔力はそこにポツカリと空いた一穴《器》に向かって怒涛の勢いで流れ込む。

何者にも染められず、何者にも操れない純粋な魔力の奔流。

属性も何の指向性も持ち合わせていない魔力はその一流れ《属性》も自身の想いのまま。

それを受けるアインは一全ての属性を持っているがゆえに自身だけの法を確立出来ない。

誰もが持つ己だけが持つ法。

世界へ刻み描き出す法は、自身の心の反映。

特別な1を持ち得ない虚無感。

一人の人間が持つには強大に感じる力。

それを受けるからこそ自分の異質さに恐怖する。

神なんて存在がこの世界にいたら

——何を見せようというのか。

単純な力任せの回し蹴りで吹き飛ばした精霊の元へ疾走する。

左目で魔力を、右目で実像を、頭で記録を見る。

頭の中で魔眼で記録した地形、過去の映像を立体図として展開。

右目で捉える視界情報をリアルタイムに最新の映像として過去の映像と照らして脳内で更新していく。

今、この区域で動いているのはアインを除けば目の前の精霊だけで、アインは足元や周囲を確認などはない。

動いてるモノが精霊だけとなったこの区域では頭にある記録だけで周囲の瓦礫や小石の位置さえも把握している。

もはや、唯一動いている目標（精霊）から眼を離さなければ移動するためにも見る必要は無い。

圧倒的な力で追い詰めていても、心は冷静だがそれ程余裕が無いの

も確かだった。

アインという器に流れ込み、はち切れんばかりに内側から絶えず圧力をかけて満たし続ける魔力。

世界という大海の中では人の存在はあまりにも小さく、いつ飲み込まれてもおかしくない。

それはあくまで人間という器に留まるには余りにも圧倒的な量。肉体的な苦痛を伴うだけでない。

身体を駆け巡る圧倒的な力の流れはいわば毒だ。

それも意思を持った身体と精神を蝕む猛毒。

地の幾何学模様を世界に刻み、獲物を追い詰める為に石柱と残骸の間を縫うように加速していく。

心の中で躍動感と強者ゆえのドス黒い高揚感が鎌首を上げる。

それは――

――使え、

――使え、

――使え、

と呪いの如く身体に流れ込み、自身の視界さえも埋め尽くしている。

――ああ

――気持ち良い

――自我を失い自信を顧みない精霊さえも圧倒する暴力

――さあ・・・この紅い世界を踊り狂え

自身の味わう苦痛を考慮しても一撃を振るう度に他を圧倒するという快感がアインという自我を誘惑し溺れさせ飲み込んでいく。

真円の月を背に虚空に飛翔する。

上空から右目が鷹のように狙いを定める。

狙うのは爪が無い左手より、分厚い黒い毛皮を赤く染め上げてる右胸の二力所の切傷。

赤の獣が悲鳴のような咆哮と共に赤い幾何学模様を作り上げていく。魔眼がそれを内側から生み出されていく過程を記録から読み取り、瞬時に同じ魔方陣を描き出す。

魔法は己が内包する一法《心》を世界へ描くものである。

いくらこの魔眼でも一法《心》を読み取り理解する事は出来ない。

世界へ描かれる法を記録しても、それが理解出来ないと使う事は出来ないのだ。

『真紅の魔眼』はあくまで魔力を見て記録する。

世界に描かれる魔方陣を記録する事は、それはその完成する魔法の膨大なレシピを見て一瞬で記録するようなもの。

記録した魔法を脳内に浮かべて予防することは出来ても、全てが使用出来る程万能ではない。

基本から離れ、より己の法が色濃くなれば、記録しても理解出来ないものが多くなる。

防御や治癒といった魔法も使えない。

優しさなんて言葉が似合わない自分には、結局は誰かを傷付ける術しか知らない。

この身の内にはそんな優しい世界は理解出来ない。

精霊を追い詰めた『地』属性の魔法も元々ダグザの魔法を記録したもので、理解出来たから使えるだけだ。

そして、今、眼下にいる精霊と同じく世界に描いているものは火の属性で最も基本的な魔法『火球』。

その属性も籠められる魔力も、全ての属性を持ち膨大な魔力量を誇るアインが使えない訳が無い。

合わせ鏡のように放たれた極大な3メートルはある極大な火球は激突し、同等の魔力は相殺し合いその場で爆散する。

魔力量に物言わせて推し切る必要は無かった。

もう既に詰みだ。

下手に威力を籠めて精霊を吹き飛ばす必要性は無い。

両の手で握り締める鉄の塊を持って確実に息の根を止めるだけ。

蒼光を纏って落下していく様は流星如く。

それは、疾風というよりあらゆる物を無慈悲に薙倒す暴風だ。

身体を駆け巡る魔力と突き刺すような苦痛。

「はあああつ！」

それら全てを刃に籠めて青い火花を散らす剣を精霊に振り下ろす。
精霊は己の存在を削り赤い火花を散らして右腕を迎撃に振り上げる。

ガアアアアアアッ！

.....イ

精霊に理性が残されていたら、まさかと思っただろう。

魔力で構成される自らの身体を削り取り、命の灯火を燃やしての全力。

その全力を籠めても尚、漆黒の夜空より舞い降りた人間は打ち破り、

死神の鎌が更なる威力を持って右腕を刈り取った――。

――あと一回

獣の右腕を肩口から斬り飛ばしたアインは着地してカウントする。
全てを冷静に流れ作業のように行動した。

振り下ろした剣を水平に、あとは斬り込む易くなった右胸に向かって剣を薙ぐだけ。

「・・・終わりだ」

酷く冷たい眩きを洩らして腕の無い右側から内側に踏み込み精霊に肉薄する。

全てが余りにも静かで、滑り込んだ身体が剣を振るう――

「――えっ!?!」

――はずだった。

――イイン――

この聞き覚えがある幻聴が聴こえなければ・・・。

微かに視線をずらした左目には誰も写らない。
やはり幻聴でしかない。

戦闘が始まってスグに広場を旋回しながら、魔眼でこの区域付近の人間の避難状況を確認していたのだから。

しかし、現実はいつも真実しか写さない。
幻聴がした方向へと顔を向けていく。

——思考も止めを刺すはずの身体も停止する。

「……………なんで」

ソレは突然に世界へと飛び込んで来た

魔力が籠る左の視界ではない。

生身の右目の世界へと割り込んで来た。

その言葉のあとに続くのは、ここに来たんだ。なのか、魔眼に写らないんだ。なのか混乱する頭では分からない。たぶん両方だろう。

「アインっ！！」

熱風が吹き荒れる地獄の釜と化した広場の入口に、確かにここにいるはずの無い純白のドレスを身に纏った銀髪の少女の姿がいた。

——なんで彼女がこんな所に来たのか。

——なんで彼女がこの右目に写らないのか。

そんな疑問は今はどうでもいい。

少なくとも彼女がここにいるのは現実で、俺の右目に写らないという事は精霊にも見えていないのだから、そのまま立ち去れば彼女に危険は無い。

しかし、そんな俺の思惑とは真逆な行動を取った彼女に叫ばずにいられない。

「来るなあっ！来ちゃだめだっ！」

彼女は広場の中心にいる俺に真っ直ぐ向かって来ようとしていた。

彼女には周囲が見えていないのだろうか。

というよりも今彼女が駆け寄り俺の目の前にいる獣が見えていないのだろうか。

これまで精霊に対峙していたアインが近づいてくる彼女に意識を囚われたのは一瞬。

しかし、そのほんの僅かな時間とはいえアインは精霊から完全に集中が途切れてしまっていた。

予想外の出来事というものはそれが敵ではなく味方によるものだったとしても、戦場において予想外の出来事はつきものだ。

今は昼間行われた対戦相手が決まっていて、観衆の為に闘う試合なんじゃない。

戦場では僅かな隙が戦力差をひっくり返すこともある。

今はどんな時も虎視眈々と敵の命を削り奪い取る時を狙う命を賭けた殺し合いの最中なのだから。

グオオオオオ———！

この時が圧倒的戦力差を持つアインに一矢報いる一手。

「っ！？逃げろおっ！」

そして理性の無い精霊が取った行動は――

――目の前にいる一脅威アインより視界に写らない新たな一異質アッシュに矛先を変えていた。

領域へ踏む込んだ声の主。

その声と足音を知覚し、見えざる敵が存在する方向へ攻撃するために法を世界に刻んでいく。

アインが気付いた時には既にワンコンマ遅い。

精霊はいつの間にか魔法を構成し終えていた。

灼熱の赤い魔法陣が世界に浮かび上がる。

間違いなく射程領域に入ってしまったっている彼女を逃がす事も間に合わない。

差し損ねた止めを差す事も間に合わない。

そう瞬時に判断して呼吸を停止。

狙いを定め、目を開くとともに咆哮。

全身を長弓の如く引き絞り、一気に全身を駆け巡る魔力。

狙うは精霊でもなく既に完成した魔法――

「っうあああ――！」

――発動直前の魔法陣。

吼える。

剣を振るう。

蒼光が迸る。

それは火薬と砲弾が詰まり発射される砲塔に向かって、至近距離から砲弾を撃ち込む行為に近い。

全力の魔力を込められた剣は魔方阵を分断するように斜めに走る。

赤光を切り裂いていく蒼光は――

――膨大な魔力のぶつかり合いに耐え切れず内と外から砕け散った。

視界を紅蓮の炎が埋め尽くし光の渦は夜空を赤く染め上げその日一番大きな大爆発を引き起こした。

――
――

11番街の商業地区広場から2キロメートル北に離れた地点。

王都の外周部である11番街と隣接した内週部5番街に通じる門の手前。噴水があるこの街一番の広場は普段は行商に来た者内週部へに入る者や勿論住民達も待ち合わせ場所として、子ども達の遊び場所として憩いの場所にもなっている。

そして、今現在はこの街の決まり通り有事の際の簡易的非難場所に

もなっている。

11番街で起きた戦闘行為や火事の被害が大規模の恐れがあり、避難する必要があると判断された時に鳴らされる警鐘。

それが鳴ると取るべき避難行動は三つある。

現在鳴っている警鐘は『第二級警戒態勢』

この場合は戦闘区域周辺の半径1キロ以内の住民は避難箇所への退避をすること。

その二箇所のうちの一つが現在多くの住民が避難しているこの噴水広場だ。

もう一つは正に今、戦闘区域になっている場所にある教会である。

この二箇所に避難した者達は、王都の兵士が11番街にやって来た時点で保護され内週部へと避難させられる。

『第一級警戒態勢』は街レベルでの避難だ。

最寄りの街に避難させると同時に、街の境界を封鎖して街一つを完全に孤立化する。

最後の一つは、過去の大戦でも使われる事が無く風化しつつある。この一王都に《……》有事の際があった場合の避難というより最後の退避行動だ。

アインの家がある更に西側には大きな森がある。

普段は住民達が公園として認知し自由に散策していて、ツヴァイレヴァンテ家が表向きは保有、管理している。

管理といっても何も手を入れず自然のままにしているだけだなのが。

少なくとも、今使すべき避難場所としては不適當だろう。

その『源初の森』がこの王都にとって最後の砦に成るのはまだまだ先の話――。

「・・・良かった・・・」

3、4才程の小さな男の子が年若い商人らしき両親と抱き締め合っている姿をティアは眺めていた。

避難した住民達の中を男の子の手を引いて両親と一緒に探している最中はあの広場の惨劇と最悪の悲劇を覚悟したものだが、無事に両親に会えて本当に良かったと思う。

中々両親が見つからず不安がる男の子を慰めている時に、急に両親が現れて男の子を抱きしめた時は安堵が胸から込み上げてきて涙が出そうになったくらいだ。

涙ながらに謝罪を繰り返す男の子の両親に軽く会釈して、男の子の頭を軽く撫でた後に内週部5番街に避難する事を進めて彼らと別れた。

戦闘区域の広場から大分離れているが、もしかしたら母親と兄弟も避難しているかもしれないと思って探したが、やはり来てはいなかった。

その際に避難している顔見知りの住民達に現状の質問責めにあつた。現在広場で暴走した精霊を食い止めている幼なじみの名前を言ったら、皆口々に、それなら安心だ。なら精霊騎士様が頑張った後に街をまた綺麗にしないと、と笑顔になったのはどうしても嬉しくて、

自分の事のように誇らしかった。

これも、この街のよくある風景。

この街の住民は皆、この街を守り続けている自分の幼なじみを信頼している。

11番街は王都の一部であって王都の自治区ではない。

街には自警団のようなものが存在するが、兵士も騎士も常駐している訳では無いしその義務も無い。

もし、兵士や騎士がいたとしたら勤務外の状態で買い物にでも来ているのだろう。

そんな訳でこの11番街では相当な事が無い限り、兵士や騎士隊が来ることは無いのだ。

だからアイツはいつも一人で街を守っていた。

自警団や自分も協力して対処したこともあるけど、そのほとんどはアイツがいつの間にか解決していた。

その理由にあの黒髪の幼なじみがトラブルメーカーというのも大部分を占めているが、どうも自分の特異な力を他人に見せる事に恐怖心を抱いている。

気持ちには分かるけど、納得できない。

自分はどんなに間違っても彼を嫌うことなんてありえないのに・・・

・

「ああゝっもう決めたっ！」

急に大勢が犇く中央で大声を張り上げたティアを周囲の視線が集まる。

だが、良くも悪くも彼女は周囲の視線を浴びる事に慣れまくっている為に周囲の視線の動きとざわめきに気付かない。

悩むより行動派なティアは、右手の怪我も剣が一刀も無いことも気にせず噴水広場から足を進める。

向かう先は当然、11番街の南に位置する商業地区広場だ。

「今行くからねアインっ文句は言わせないんだからっ！」

足を引っ張ったとしても構わない。

自分だってこの街の住民であり、おまけに正式に今日騎士にもなっている。

そして、男の子を避難させた今、自分を止める者は誰もいない。

「待ちなさい、ティアちゃん」

—— いないはずなのだが……。

声の主は振り返らずともすぐに気付いた。

自分をちゃん付けで呼ぶ者は多いがその穏やかで厳格な声の持ち主は白髪を後ろで結わえた男性。

自分の憧れの人物であり——

「……おじさま……」

—— 幼なじみの血の繋がった父親なのだから。

ティアが振り返った先には幼なじみと同じ青い瞳をした荘厳な男性が白馬の上にいた。

『アッシュ ソル ツヴァイレヴァンテ』

馬に跨るその姿はこの国の英雄の姿であり、「聖騎士」と呼ばれる騎士最高の称号を持つこの11番街の誇りだ。周囲にいた住民は驚愕と羨望の眼差しでその英雄を眺めている。

その気持ちも分かる。

この街は11番街なのだ。

繰り返すが相当な事が無い限り、兵士や騎士隊が来ることはまず無いのだ。

ましてや、この王都の誰もが知っている英雄。

病床から出れない王に代わり政治を抜かせば、全てを任されているようなこの国の総司令官だ。

よく見れば、その後ろには左目に眼帯をした老年なれど筋骨隆々の巨漢の男。

もう一人の英雄でありアインの^{マスター}先生でもある將軍のダゲザ。

その隣には褐色の肌に白髪で短髪、長身の青年。^{マスター}自分の先生である隊長ヴァーリもいる。

そして、その後ろには軽く百人以上の騎士と兵士が続いていた。

これから戦争が始まると言っても信じるであろう、その面子と行列には言葉を失うしかなかった。

—— たかが精霊一匹の駆逐に向くレベルじゃない。

—— これだけの人員が動く一何か《・・・》が今この11番街に起こっているのっ!?

ティアに先頭にいるアッシュは馬上から手を差し伸べる。

「向かう先は一緒だろう。乗りなさい」

「は、はい」

固まっていたティアの思考と身体はゆっくりと動き出し、おずおずと手を握ろうとする。

その緩慢な動きを急激に突き動かしたものは時間でも無くアッシュでも無かった。

「えっ？なにっ？」

「むっ！」

炎上する区域から離れたこの位置さえ一瞬真昼のように明るくなった。

ドッゴオオオオオ・・・ンン！！

「キャアッ！」

光に照らされたそのスグ後に余りに大きな音と振動に思わず飛び跳ねてしまった。

とてつもなく大きな落雷が落ちたような大気が揺れる程の轟音はこの場にいた者のみならず、王都全土まで聞こえたかもしれない。

音のした方角、これから向かうはずだった方角に巨大な炎が上がっているのが見えた。

「アツシュ―っ！急ぐぞっ！」

「ああっ！分かっていますっ！」

先に動いたのはダグザだ。

ついで、アツシュが馬から飛び降りて一瞬でいなくなる。

「ティア、付いて来い」

「えっ？」

肩をぱんつとヴァーリが触れたと思ったら、ヴァーリもいなくなる。
三人はほんの僅かな青い魔力の残滓と三頭の馬と多くの人数を置き
去りに姿を消していた。

多くの兵士や、若手の部類に入る騎士は啞然としていた、が――

「皆アツシュ様を追うのだああ〜！」

――それ以外の騎士は事態の深刻さを素早く冷静に捉えて、馬
と足を走り出させた。

ティアもその行動の早さはベテランに負けず迅速だった。

「馬をお借りしますっ！」

魔力不足で魔術行使が一切出来ない状態だったティアはアツシュが
置いていった白馬に跨り広場へと急行する。

「お願いっ急いでっ！」

あの幼なじみが負けるとは思えない。

だが、アツシユやダグザといった英雄が向かわせる何かが起きようとしている。

それが、黒煙と火の手が上がる商業地区へ馬を走らせるティアの心をより一層急かした。

――
――

「ぐ・・・うあ・・・」

全身がハンマーで殴られたようにズキズキする。

魔法を咄嗟に切り裂こうとして爆発の奔流に飲み込まれた。

その瞬間は覚えている。

数秒前からの意識が無い。背中 of 固い感触から自分が地面に仰向けに倒れているという事だけはスグに分かった。

――精霊はどうなったのか

――彼女は無事なのか

それが自身の状態を把握するより先に頭に浮かび上がった。
上体を起こそうとする。

腹筋に力を入れると背筋に電気が走った。

背中と腰を強く強打したようだ。

おまけに呼吸をすると肺にドストスとナイフを突き刺さる、そんな激痛が走り深呼吸さえ上手く出来ない。

肋骨が衝撃で何本か折れているうえに、肺と全身至る箇所が火傷してるだろう。

上体をなんとか起こす。

それだけで苦戦する身体を労るように優しく頬を撫でる柔らかな肌の感触がした。

「——丈——？」

キーンという激しい耳鳴りの中に微かに混じる彼女の声。

うつすらと瞳を開くと所々が白濁した景色の中に確かに彼女がいた。

「——イン——丈夫？」

白銀の髪に紫水晶の大きな瞳がこちらを心配そうに覗き込んでいる。

心配そうにしている顔さえ可愛らしいと感じてしまうのはこんな状況だからだろうか？

怪我も無さそうだし、その姿に心底安堵する。

彼女が王女だからなんていうのは関係無い。

単純に彼女自身が無事で良かった。

——本当に無事で良かった。

彼女の無事が分かり焦りが消えると代わりに沸々と沸き出すものは怒りだ。

彼女のようなただの女の子が戦場に何の護りも無く現れたのだ。

それがどれだけ危険な行為か。

自分が護らなければ間違い無く無事じゃ済まなかったらう。

「な・・・んで、来た・・・っ!」

声がまともに出せたら確実に鳴りつけていた。
それほど怒っていたから。

「聞いている・・・のか、っ!?!?...」

しかし、そんなアインの心を気にせず流れていくのが世の中という
もので――。

――あなたが心配だったから――

――女というものはいつもアインの予想を遥か斜め上をいくもので
ある――。

急に彼女が倒れるように覆い被さって来たのだ。

首に廻された両腕と頭を撫でられる掌の感触。

耳と鼻腔を撫る髪の毛と暖かく優しい吐息に激昂していたはずの俺
のあらゆるものが一瞬で弛緩していく。彼女は耳元で静かな声でそ
っと囁いた。

「――っ!?!」

彼女は何事か呟いた後にその感触が遠くなる。

一瞬、彼女が話した言葉の意味が理解出来なかった。

感覚で分かる。

彼女は自分から離れて行っている。

「だめ・・・だ、行くなっ」

彼女が今しがた発した言葉をもう一度思い出す。

俺の心は僅かな嬉しさが込み上げたが、すぐに驚愕と焦りに満たされた。

——あとは私があの子を救います——

ぼやける意識を繋ぎとめて彼女を探す。

頭はグラグラと揺れて左目は血が入り込んだのか赤いガラス越しのように視界を染めている。

起き上がるうとするが腕に力を入れる。

四つん這いのような姿勢から立とうとしてもそこから力が入らない。

歪む景色で現状を把握する。

自分は広場の端に飛ばされていたらしく、見つけた彼女は広場の中央に向かっていた。

その中央にはいまだに精霊がいた。

そこは今の状態ではすぐには行けない距離。

呆然としている間にも彼女は立ち竦む赤い獣に向かって歩みを進めていく。

精霊が生きている事は少なからず予想出来ていた。

アインが無傷から瀕死になってしまふ程の爆発なのに、負傷していた精霊がまだ存在している理由は耐性の差にある。

精霊の極大な火の魔法が弾け飛んだダメージを多少は魔力をぶつけたおかげで楯になったかもしれないが、アインはまともに受けざるを得ない。

普通の人間と違い、アインが溜まる魔力は完全な純粋な魔力。それは体外に出す時任意の属性にも変換出来るが、体内においてはどの属性も一切無い。

普通の人間でさえ皆何かしらの耐性は持っている。それを1だとするなら精霊がいる者は3、精霊自体は5と言った所だろう。

しかしアインは全ての属性に対して0。

新米のいまだに見習い騎士の身でありながら、精霊を圧倒した精霊騎士の一番の弱点。

一切属性に対して耐性が一皆無。

万能の槍は万能の楯には成り得ない。

「ぐ・・・ぐう、ううああ・・・」

左手を左目に添える。

いつのまにか青に戻っていた瞳に紅が灯っていく。痛む体躯に大量の魔力が流れる。

流れる魔力に骨が軋み、激痛が上乘せされていく。

ガクガクと震える腕に力を籠める。

「く・・ああああ」

立ち上がろうとする。

折れた肋骨よりも、背骨も打っていたらしく腰に走る激痛が立ち上がる意思と力を刈り取っていく。

内から弾けんばかりに身体を満たし埋め尽くしていく魔力の奔流と痛みに意識が飛びそうになる。

しかし、それはより激痛を伴う原因となる。

精霊でも無いただの生身に人間に注がれるにはあまりに強大な力。満身創痍の今の状態では、ボロボロの身体に鞭を打ち込み、傷口に塩を塗り込み、それでいて走らせるために馬に背中を押させるようなもの。

魔力と体躯は本来の在るべき世界が違う。

この魔眼は何も法も術も用いずに別な世界を生身に流し込み映し出してしまっているのだ。

その行為がどれだけ危険な事で、どれだけ異質な事なのだろうか。耐え間無く遅い続ける激痛に嫌でも気付かされる。

やはり、自分はどこか外れている。

まるで別な世界に自分が存在している事を知覚する。

しかし、本来ならば立ち上がる事さえ出来ない程の状態。その身体を突き動かす事が出来るなら。

このような代償は些細なものではない。

「うっ、動、けえええ」

真紅の魔眼が爛々と再び輝き魔力をありのままに映し出す。

「・・・これは・・・っ」

しかし、今にも一足飛びで詰め寄れる距離、そこを近付こうしていた気持ちは左目を通して見た世界に憚れた。

紅い瞳を通して見えた世界に自分の焦りは杞憂だったと実感する。

精霊はかろうじて生きている状態と言って良かった――。

全身の身体は燃える様に火の粉を飛ばす訳ではなく、弱弱しく微かな赤光を散らしている。

全身は向こう側が透けるほど希薄で右腕が無くなった肩口、手足から末端の方は境目が分からない程透けている。

ティアとアインとの連戦に加え、肩口から右腕を切り裂かれた事と最後に放った魔法のダメージというよりも魔力の消費が決め手になったのだろう。

その身体がいまだに形を保っていられるのも時間の問題だった。

もはや、アインもその存在を危険だとは思わなかった。

禍々しく狂気が渦を巻いていた瞳は揺らぐことなく正面ただ一点のみを虚空の瞳でただ見ている。

そして、正面に立つ白銀の少女。

アインが思わず息をのみ、その場に立ち尽くした理由。単純にその光景を瞳に焼き付けたかった。

―それはとても綺麗で美しかった―

まるでお伽噺のような神話世界の一場面。

魔眼に映るのは廃墟と化した広場。

赤熱の魔力が漂い充満する魔都。

中心には堕ちた沈黙する悪魔。

その前に佇むのは悪魔に比べて半分にも満たないあまりにも小さい
降臨せし天使の姿。

純白の衣に全身の身を包み、腰まで延びる白銀の髪は風よりも軽い。
天使は悪魔の目の前から動く事も手を伸ばし触れる事も無くただ悪
魔の顔を見上げている。胸元で両の手を祈るように握りしめ、憐れ
な悪魔を見つめる青紫の瞳には怒りも憎しみも無かった。

ほんの僅かな悲しみと哀愁、慈愛を籠めて同属を見るような瞳を向
けている。

一人と一匹はお互い触れる事も無く、話す事も無く見つめあう。

そこに踏み込む事は簡単だった。

だが、その領域に踏み込み事も彼女がする行為も邪魔する事は無粋
に思えた。

そうして、どれくらいの時間が流れただろうか。

時間にしたら十秒にも満たない時間かもしれない。

それよりももっと短いかもしれないし、長かったかもしれない。

時間の流れが止まったように感じた。

もっと眺めていたいとも思った。

しかし、時間は永遠ではない。

滅びを選択してしまった精霊にも平等に終わりは訪れる。

獣の姿を形創る赤い魔力は足元から霧のように世界に霧散していく。それは重力に逆らうように光を発しながら宙に舞い上がり、赤光から蒼光に変わり段々と消えていく。

平和な街に地獄の炎を振り撒いた悪魔と化した精霊、その最期はあまりにも幻想的で儂く美しい。

脚から胴体、胴体から腕へと精霊の肉体を形創る魔力は薄れ、ゆっくりと崩れていく。

崩壊が顔へと進んだとき、ふいに精霊に残っていた左手が彼女の頬を撫でるように伸ばされた。

それは、精霊にほんの一握りに残されたかもしれない心だったように感じた。

頬を撫でる腕を攥ったそうに眼を細めた彼女は、そっとその手を握り最後の言葉を伝える。

「——さあ、あなたも世界にお還り——」

その言葉は、この世に最後となるこの精霊の眼差しを正面から受け続けた少女の手向けであり、お別れの言葉。眩きと共に精霊の最期の灯火が消えていく。

残っていた腕と顔も赤の光となり、彼女の身体が赤く仄かに輝いているように見えた。

己の最後を看取ってくれた者へのお別れ。

最期の一欠片も残る事なく世界へと散っていく様を彼女は眼を逸ら

さずに見届けた。

広場に散った赤い光が空に舞う。

街を燃やす炎がそのまま世界に浸透したかのように。

はたして精霊の瞳に彼女の姿は映っていたのかは分からない。

だけど、精霊が彼女の存在を感じていた事だけは確かだと思う。

魔眼を解き放ち、歩を進める。

肉体的な痛みなど今の彼女が抱える痛みに比べたら何も感じなかった。

側に近寄り小さな肩に手で触れる。

真紅の魔眼に映らない彼女。

両の瞳の中にはたしかに映る女の子はとても華奢な存在。

その少女はその一身にこの悲劇を起こした精霊の最期を引き受けたのだ。

きっと彼女は消えゆく精霊がどれだけ未練と憎しみの視線を向けたとしても、遺言を受け取るように物言わぬ精霊から眼を逸らしはしなかっただろう。

世の中を知る事さえなく、今日初めて世の中に足を踏み出した少女。そんな少女のたった行動がどれだけ尊い行為だったのか。

そんな少女が味わったものはどれだけ残酷だっただろうか。

慰めの言葉なんて何も浮かばなかった。

自分出来る事はこの惨状、この悲劇の結末を見届け、引き受けた小さな体を少しでも支えて、崩れてしまわないように両腕で強く抱

き締めるだけだった。

背中に回した手で白銀の髪を指先で鋤くように撫でていく。
指の間を流れる髪の毛は星の砂が流れるようにサラサラとしていた。

空に浮いた赤が蒼に代わり、光を失って消えていく。

その様子を二人で眺めていた。

広場に駆け付けた者達もその光景を沈黙を持って眺めていた。

全ては終わった広場は暗闇に包まれていく。

街を焼いた赤い炎はいつの間にか消え去り、銀の月灯りのみが二人を照らす。

静まり返った空間と自分胸に噉り泣く女の子の嗚咽が響いていく。

——とても長い長い17の誕生日——

間もなく終わりを迎えていたこの夜。

——この長い1日は——

——あと、

——もうっ少しだけ終わらない——。

第四話 「紅い夜」(後書き)

―次回予告―

17歳を迎えた波乱に満ちた1日。

一匹の精霊が起こした惨状。

崩壊した11番街の広場には避難した住民と多くの騎士達が集まっていた。

その中には、あの男もいた。

多くの者が見守る中で、一人の少女のために騎士が生まれる。

第五話

「That pipe dream she saw」

―少年は選択する、彼女が描く夢物語を―

久し振りの投稿です。

仕事も忙しくぎっくり腰になりパソコンにも迎えなくなるといふ波乱の私生活。

そんな中でお送りする第四話ですが、導入部ともいえる部分も次話でやっとなります。

一話に収めなかったものが五回に分けられましたが、五話投稿後、もう1つの物語も進めたいと思います。

同時進行で進めていきます。

『ヒトというナの』

”精霊と魔法が混在する隠された真実世界”の物語。
良ければ併せてお楽しみ下さい！

恒例としている「次回予告」ですが、これに関する意見を求めています。

必要か不必要か一報下さい。

第五話 「That pipe dream she saw 前編」(改)

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争により、世界は二つに割れた。

そこで少年達は選択する。

こちらは”精霊と魔法そして人間が当たり前に共存する世界”の物語です。

お楽しみ下さい。

10/10/15 一部訂正しました。

空に浮かぶ真円が輝く夜の時間。

その真下では安息と安眠を奪われた者達が活動していた。

多くの建物が焼かれ崩壊した11番街の住民はほとんど眠れない夜を過ごしたと言っている。

住民は城の兵士と協力して桶に水を汲み手渡しして燃え盛る炎に水をかけ、避難民の誘導と保護にあたった。

騎士達は水属性が扱える者は魔力による炎と炎上が激しい箇所の消火活動を。それ以外は、残された住民がいなか搜索、及び救助、燃え広がる先にある建物は騎士によって飛び火する前にわざと破壊されるか、魔法障壁による保護がかけられた。

月が次の日に跨ごうとしている頃に炎は全て鎮火して事態は縮小していった。

惨事の中心地であり大分見晴らしが良くなってしまった中心広場には事態の収拾にあたった多くの人間が集まっていた。

号令と共に隊列を組む騎士と兵士から少し離れた場所では怪我や火傷を負った者達の治療が行われていた。

軽傷の者は一列に立ち並び、重傷の者は敷かれた毛布に寝かされて治療を受けていた。

その重傷者の中に治療を受けていたアインがいた。

「はい。これで終わりです。骨折も火傷も完全に回復しましたが、あれだけの重症でしたから三日の間は反動で身体の体温は高いままでしょう」

そう言って、横になっていたアインから手を引く司祭服に身を包まれた眼鏡をかけた青年。

「おおく相変わらずルクス司祭の治癒魔法はすげ〜な〜」

地面に直接敷かれた毛布に横になっていた身体を起こして腕を回したり握ったりして自身の状態を確かめる。

折れた肋骨も全身の打撲、火傷、筋繊維に至るまで重症だった身体は嘘のように元通りに回復していた。

「う〜ん俺にも簡単な治療魔法ヒールングが使えればな」

治療魔法ヒールングを扱える一治療魔法使い《ヒーラー／ヒーリショナー》は魔法を使える者の中でも全体から数えてとても少ない。

単純に治療魔法に目覚める者の絶対数が少ないというのが一番の理由だ。多種多様な属性の魔力を持つ他人の体内にも干渉出来る魔法は、治療魔法に限らずそれだけで稀有な存在といえる。

一治療魔法使い《ヒーリショナー》だけでも少ないというのに、その上級魔法を扱える者一上位治療魔法使い《ハイクラスヒーラー》となると更に少なく、その価値は正騎士百人分とも言われている。

普通の治療魔法が肉体が持つ自然治癒の加速版だとすれば、上位の扱う治療魔法は『治癒魔法』。

その名の通り、完治まで自然治癒はもはや不可能といえる程破損した箇所さえも修復してしまう。

治癒魔法は現界した法で傷を修復、治療した箇所を完全に世界に固定し、定着するまで魔力を放出し続ける為に魔力消費が激しい。

治療途中で魔力不足で閉じた傷がまた開いたり、魔力が途切れて使用者が倒れては意味が無い。

そのため豊富な魔力量は勿論の事、正常な肉体を受肉させる為に医学にも精通していなければならない。

優秀な医者としても、大変貴重な上位治療魔法使いは50万人がいるこの王都にもたったの二人しか存在しない。

「人には誰だって得手不得手があるものですよ。だからこそ人間は補い合い助け合うのです」

「司祭みないな上級魔法は求めていないよ。ハイクラス簡単なものでも使えば、自分である程度は対処出来るのに」

「あなたが治療魔法を使えたらいつまでも無理するから駄目です！こうして倒れて動けなくなるくらいが丁度良いんです！いくら私でも失ってしまえば治せないのですよ！」

治癒魔法は例え、槍でスタスタに指し貫かれ致命傷に近くても治す事は出来る。

しかし、その法をもつてしても失ってしまったモノを補う事は出来ない。

溢れて垂れ流した血液は戻せない。

当然、欠損した箇所も無くした命も補えはしない。

仮にそんなものを補ってしまう法が存在するとしたら、それは人という名を冠する者が持つには手に余る奇跡の部類といえる。

「大体、いくらあなたが水属性も扱えるからって失神するまで痛みを堪えて消火にあたるなんて何を考えているんですか！って聞いてますかアイン！」

まあ、その貴重な人間の一人が目の前で説教をしている若き司祭様だったりするのだ。

この若さで王都を任される司祭を務めているのも、これが理由の一つかもしれない。

「聞ってるよ。大体治療が終わったならもう行って良いだろ。他にもいるんだからさ」

「あなたがずっと動き回っていなければとくに治療は終わってました！」

実際、精霊が消え去ってから軽く二時間は立つが俺が治療を受け始めたのはついさっきだった。広場に駆け付けた騎士達にアシェラ王女を預け、俺は魔眼を顕現して誰より先に炎上の激しい地域の消火にあたっていた。

背後で騎士に保護された王女や馬に跨がって駆け付けたティアが叫び声を上げていたらしいが、炎に突貫する俺には聞こえていなかった。

たしかに司祭の言う通り気絶して運ばれてきた俺だが、ここで一つ言い訳したい。

けっして自滅したんではない。

消火をしていたら急にヴァーリが背後から羽交い締めにしてきて、それから目の前に現れたジジイの拳骨で昇天させられ運ばれてきたのだ。

「姫様があなたをどれだけ心配していらしたか」

「だったら、この頭のタンコブも治してよ」

「ダ・メ・で・す！それはあなたへの罰です」

「分かったよ！相変わらず説教くさいところは変わらないね司祭は。それでティアはどこに？」

まだ他の負傷者を治療しなければならないハイスペック司祭様は質問にすんなりと答えてくれた。

去り際に、相変わらず反省の色が見えないのはあなたも一緒です。

明日は教会で説教ですからね。と、ぶつぶつ呟いていたのは聞こえなかった事にしよう。

まだジジイから食らった拳骨が頭に響いてるんだからそれも仕方ない。

司祭に教えて貰った場所は比較的軽傷者の治療をしている場所だった。

並んでいる人達、治療を受けている人達の中から幼なじみの姿を探す。

「えっと、ティアはどこにいるかな」。

「うっ……ん、厄介だな」

これだけ所狭しと人が密集している場所でも探し人は実に容易に見つかった。

何もしていなくてもいつも人が集まってくる幼なじみは格好も容姿的にもよく目立つ。

単体でも際立つ存在なのに、存在感がありすぎる人間がさらに二人も左右に立っていた……

「この三人のメンツは目立ち過ぎだろっ。行きたくねえ……」

遠くからでも一目で分かる鮮やかな赤髪、最年少で正騎士になった少女ティア。

地べたに腰を下ろして座るティアだけなら良かったんだけど。その両サイドに立つ二人が問題だった。

「右腕の具合はどうだ？」

左側に立つ黒衣に全身を包んだ長身の青年が地べたに座っていたティアに訊ねる。

「熱はまだ引いてませんが自分でつけた傷のせいかな、他の火傷程度より治りは早そうです」

そう言つて右腕を軽く振つて笑顔で答える。

治療魔法ヒーリングを受けた右腕の火傷は痕も残らず綺麗に治つていた。

ただ治療魔法を受けると必ず起こる反動、自然治癒で本来かかるはずだった時間を取り戻そうとするように治療した箇所が熱を持つのは仕方ない。

「……そうか」

私の言葉に嘘は無いと判断したのか、ヴァーリはそっけなく呟いた。

21才の若さで騎士隊の隊長を務める私の先生。

叙任式を受けずに正騎士になった二人の例外の一人。

皆からは実力も含めて、任務に対しての冷徹振りから怖がられたりもしている。

でも、私には僅かに安心したように微笑んでくれたのが見えていた。

「そうかそうかつ、やはり右腕の火傷はあの魔法だったかつ！」

こらっ、という叱声とともに頭をゴチンツと小突かれる。

「あうっ！」

「実戦ではまだまだ早いと言つたろうがバカモンツ！」

大体、同じ火の属性に未完成の魔法をけしかけるなんて何を考えとるっ」

右側にいた二メートル近くある隻眼の偉丈夫。

アインとヴァーリ、それからアッシュオジサマの先生になるダグザ。90才らしいのだけど、アッシュオジサマと比べると同年代ぐらいにしかとても見えない。

「うう…ごめんなさい」

たまに私もこうしてアインのようにお説教を受けてるのはヴァーリに言わせると、それだけお前たち二人の事を可愛がつてるんだ先生は。と言うけど、何回受けても痛いものは痛い。

勿論、私が女という事もあってアインに比べると相当加減されてる（・・・たぶん・・・そうよね？）けど、あのデカイ拳と私の胴くらいある豪腕が織り成す拳骨はホントに痛い。

こう脳天から突き抜けて骨にまで響く感じ。

「その魔法は自分の意志が強く現れる。

アッシュが戦争という戦いの中で得た答えがそこにある。

生半可な覚悟の心剣は降り下ろした所で容易く砕け散るぞ」

その時のダグザは怒っている訳ではなくて、自分以外の誰かを見ているような、そんな遠く哀しい表情をしていた。

「では、な。今夜はゆっくり休むんだぞ」

「はい。二人ともありがとう」

二人の騎士は去って行った。

ティアは遠くなる二人から視線を自分の手元に落とす。

「はあ……アッシュオジサマが得た答え、か…」

自身を焼いてしまった癒えた右手。

今は何も掴めていない掌を握り締めて今の言葉とそこに含められた意味を刻み付けるように心の中で繰り返した。

それは三人の様子を隠れて見ていたもう一人の少年にも疑問を残す。

「アイツの得た答えがティアの魔法にある……か」

ダグザの斜め後ろを歩いていたヴァーリは、尊敬して止まない自身の師匠に異議を唱えた事は滅多にないし、その行動を疑った事も無い。

しかし、先程の発言には疑問が拭えかった。

「先生…今の言葉を二人は理解出来るでしょうか？」

「どうじゃろうな、法が描くものは自信の心そのもの……これは与えられるものじゃなく自分で形にするしかない。

アヤツが得たのは戦い続ける日常が当たり前だった時代だ。剣を選んだ嬢ちゃんといまだ何も無い坊主…」

振り返った先には小さくなった少女と少女に近づく少年。

「同じ目標でも見るものが異なる二人じゃ理解は出来たとしても、その答えを得る事が不幸に繋がらない事を祈るばかりだな」

まだ幼さが残る二人の愛弟子にくるつと背中を向けて、二人は歩を進めた。

「さっきのは痛そうだったな」

「まったく、アンタいつから見てたのよ」

頭を撫でながら頬を膨らせるティアの隣に腰掛ける。

「丁度拳骨食らったとこ辺りからだよ」

あれは食らった者じゃないと共感出来ない痛みだ。

もうジジイを見てるだけで頭の腫れがヒドクなりそうなくらい。

余談だが、ティアがすぐ拳を振り上げるのもあのキレの良さもダグザに鍛えられた訳でも、何か秘伝の伝授があった訳じゃない。

ティアの手が早いのはあくまでも地だ。

「ホントに痛かったんだからね！」

「アハハそりゃ分かるよ。俺なんか気絶させられたばかりだからさ」

「アンタの場合は自業自得でしょっ」

「お前だってそうだろうがっ」

二人最初は小声で話していた声は段々ヒートアップしてきた勢いと共に加速度的にでかくなっていく。

「なっ！私はアンタみたいなバカな事はしてないんだからっ！」

「このっ！バカとはなんだ！自滅よりやマシだバカっ！」

「ア、アンタにバカ呼ばわりされたくないわっ！」

「うるせえ！いつもバカバカ言いやがってっバカ！」

「アンタがバカだから言ってんでしょうがっ！」

お互いに声を張り上げ始めた時に二人はやつと気付く。

「……あっ……」

ここが治療の場であり、野戦病院と化した広場には現在進行形で安静に休んでる者達が沢山いる事に。

無言でジト目の冷ややかな視線達に二人揃って謝った。

「ごめん。その、腕大丈夫か？」

「うん…もう大丈夫。それにアンタの方が重症だったじゃない」

「ああ。司祭に治して貰ったからな」

「……そう」

それから会話が途切れてしまった。

アインはティアに伝えたい事があって来ていた。

勿論、具合を見に来たというのもあったがどうしても今日中に伝えおきたい事だった。

だが、さっきの三人の会話が引つ掛かっていてその話題が喉から出てこなかった。

一方、ティアは先程の会話を相談したかったが、アインが父親の話題を嫌がる事が目に見えるがゆえに踏み出せていなかった。

沈黙は長引く程に口元を硬く引き絞る。

「あのさ」

先に口を開いたのはティア。

「そういえば、何であの時シェーラ姫と一緒にいたの？」

結局、踏み出せない話題は方向転換を持って進み出す。

あの時とは、ティアを助けに来た時ではなく精霊が消えた広場に戻って来た時だ。

「ああ、広場に来るまで姫さんとお前んちで一緒に飯食ってたんだよ」

さらっ、と爆弾を投下するアイン。

その難解な爆弾はティアの聡明な思考を持ってしても爆発まで数秒の時間を費やした。

「へえ……」

——言葉をゆっくりと咀嚼して

「私の家で、ねえ・・・ん？私の・・・家？」

——紐解くように吟味しその意味を理解する。

「えええええゝっ！！」

ウチでつつ！？アンタどのどなた様を私んちなんて招待してんのよっっ！！」

精霊の咆哮なんて目じゃない程の叫び声をあげてアインの襟首を掴み上げるティア。

「ぐう、あああゝく、ぐる、じい」

またかよ、なんて周囲の安静を求める声は幼なじみの大それた行動に吹き飛んでいた。

「そこらのオジサンを食事に招待すんのと訳が違うのよっ！」

「だっ！だって腹減ったって言うから、ら、ららっ、」

腹が減ったって言うから、

そんな理由で一国のお姫様を自分の家に自分の与り知らぬ所で勝手に招待したという超ド級バカバカバカの首を締め上げる。

「何だって私の家なのよっ！そんなの適当に12番街のレストランにでも行けば良いのよっ！」

「11番街が良いって言ったんだああゝ」

ガクガクと頭を前後に降られるアイン。

「他があるでしょっ！ほ・か・があっ！」

「さっ、最初につ俺んち案内したけど、飯なんて無かつ、た…から
ああああああ」

段々思考がホワイトアウトしていくアインは聞かれるまま答える事
しか出来なかった。

「あああああんた自分のウチに姫様を、つつつ連れ込んだ、の
つつつ！！」

身長178センチメートル体重60キロはあるアインの身体を胸倉
を掴んだその腕っ節のみで宙に持ち上げるティア。

余談だが俺の身長は王都の成年男性の平均よりやや低く、王都の平
均は他国よりやや高い。

レギンレイブの特徴でもある多くの騎士達が平均を底上げしている
からだ。

ティアは160センチで女性の平均とほぼ同じ。

つまりティアを基準にすれば比べた女性が大きい小さいか分かる。
あのお姫様はティアより5センチほど小さいから平均以下の身長だ
ったといえる。

ちなみに俺の魔眼の前では女の子のもっぱらの悩みなど実に簡単に
看破出来る。

背丈も体型も輪郭は服の上から透けて見える上に、成長具合は魔眼
を行使して過去の記録と照らし合わせれば一目瞭然である。

ただ、正直ティアのスタイルは俺から見ても相当良いのだがそれで

も本人に伝えると今朝のようになるからあまり公表しない。

オバサンによく言われるが女は秘密を持ちたがるのだ。

それに、この魔眼でも女の子の最大の一秘密《体重》ばかりは分からない（おおよそは分かるけどね）。

そして今の現状に話は戻る。

「おおおち、落ち着けティアっ！」

「落ち着けですって！？皆姫様が城から消えたから搜索してたのよ！その時に精霊が暴れてたのよっ！アア、アンタはっ！」

軽々と女の子に両手の腕力だけで持ち上げられ振り回されている俺。

「そんな時にっ！姫様を連れてっ！何してたっと言うのよっ！！」

「だ、ただだからっその姫様が案内してくれっと言っただあああ」

「そんな事信じられる訳無いでしょおおおがあああああゝっ
っ！！！！」

もはやこうなってしまったティアはアインには止められない。

街で暴れた精霊に剣を向けられても、暴走した幼なじみに拳は絶対に向けられない。

「だ、だれか、たすけ、て……」

気が遠くなっていく中で、その助けはやって来た。

―アインの言っている事は本当です―

そんな彼女の幻聴がまた聞こえた。

「彼に案内を頼んだのは私です」

急に現れたアシエラ王女にアインの襟首を掴んだまま呆然としてしまつてティア。

――えっ彼女があのにシェーラ姫様

――アシエラ王女・・・なんて綺麗なんだ

多くの兵と騎士を連れた純白のドレス姿の淑女の登場は治療中だった兵も横になっていた住民も釘付けになった。

彼女は声を張り上げる事もなくティアに話し掛ける。

「ティア ブリギット、貴女の家族には世話になりました。

貴女方の為に用意していたお祝いの席に他人の私を加えてくれた事に感謝します」

スカートの端を摘まみ上げ、あろうことが王女様が騎士とはいえあくまで庶民の職業騎士に頭を下げたのだ。

それはティアの頭を更なるパニックへとかつ飛ばす。

「ええとっ、シェーラ姫じゃなかったっアシエラ王女」

ティアは今の自身の発言の重要性に全く気付いていなかった。

咄嗟に口から出たものは今日まで秘匿とされていた噂の正体の暴露。

アシエラ王女が城から脱走という事をしていなければ、今日の式典の参加者以外は明日の御披露目まではまず知り得ない存在。

王女という国にとって最重要人物が城から姿を消したというのに、失踪後から１１番街をさまよっている間も、アインと出会い街を歩いている間も、街を散策する彼女が王女だと知る者がいなかった事が搜索を大幅に遅らせた原因にある。

皆にとって１１番街を楽しそうにフラフラと少年と歩く姿はパーティーと呼ばれた世間知らずなどこかの大貴族令嬢だと思っていた。何の情報も無く街を歩く彼女の姿を王女だと気付いた者はまずいないだろう。

城で働いていたティアの母が特殊であり、実際に先程まで搜索に加わっていた治療中の兵士でさえも今のティアの失言によって知った者が多かった。

この場にいる者達の大多数が突如姿を露にした王女が存在に騒然となったのも無理は無い。

「そんなお、おお礼を言われるなんてっ！

ウチの食事なんて大したものなんて出せませんでしょうし、お口に合うかというか弟達が粗相をしなかったか」

あたふたと頭を下げたり首と手を左右にブンブンと振るティア。解放され人知れず尻餅を付いていた俺になんて当然誰も気付きやしない。

クスクスと口元に手を添えて上品に笑うアーシェ。

それは同年代の親しい友人とお喋りを楽しむ年頃の少女のよう。

「あら、ソフィアさんのお料理はとても美味しかったわ」

ティアは思う。

城で見た彼女もこの場に最初に現れた彼女の姿も威厳に満ちた完成された芸術品のようだった。

「マリアとルーもとても仲良くして下さいました」

それがどうだろうか。

今、目の前で微笑む少女は花のように可憐で女であるティアでも魅惚れる程に愛らしかった。

「私にとってとても楽しくて幸せな一時でした」

「・・・そうですか」

彼女の心底幸せそうなのはに cand 微笑は見ているだけで心が和んでくる。

思えば、この瞬間からティアは彼女自身の人間性が好きになっていた。

これが後に背中を任せ見も心も分かち合う友となる二人の少女のファーストコンタクト。

そして――この二人が戦う運命になるのはまだまだ先のお話――

アーシェの独白をアインは地面に座ったまま静かに聞いていた。

しかし、それもスグに憤怒の表情へと切り替わる。

「そろそろ城に帰るぞアーシェ。」

王女が帰らねば、皆帰還する事が出来ない。これ以上ここに留まる事は更に皆に迷惑がかかる」

彼女のスグ後ろに控えていたアッシュの台詞はアーシェにアシェラ王女の貌を戻させる。

「ティア、貴女の家族にはその節の礼を近いうちに。それから・・・」

「
一歩進みティアの脇に屈んで——アーシェ《…………》は少
年に微笑んだ。」

「ありがとうアイン。一私の些細な願いを聞き遂げてくれて」

「ああ」

耳元で少年にだけ聞こえた微かな声。

「ありがとうアイン。守ってくれて嬉しかった——」

腰を上げて元の位置に立ち背筋を延ばす——そこには既に近づく事が許されないオーラを発するアシェラ王女の顔があった。

王女は俺達の本来の距離から場を締めくくる一言を告げる。

「今宵の出来事は全て私に責があります。二人には迷惑をかけまし

た」

「「「っ！？」」」

今の一言はこの場にいる全員に動揺と衝撃が走る一言だった。

そして、王女は城の者をぞろぞろと引き連れて二人の下を去っていった。

「ちょっとアインっ何よあの態度は！アシェラ様に失礼でしょう！」

ぶるぶるとまた怒り出したティアの声は耳に入らなかった。

「……っの、バカがつ、勝手に背負いやがってっ」

この怒りは自分の不甲斐なさに対しての怒りだ。

「なにぶつぶつ言ってんのよアンタ？」

私さっきそんな首締めたかしら？なんてティアが首を傾げていると急にアインは立ち上がる。

「ティアっ！」

「わっ！」

アインはがしつ、とティアの両肩を掴む。

「な、なななによっ！」

上目遣いで見上げると、至近距離にある真剣な表情に緊張して声が上ずってしまう。

ずっと見守っていた周囲の皆さんも、その急展開に息を飲む。

「俺行ってくるわっ」

——へっ……どこに？

緊張してしまった自分がバカみたいな突拍子も無いセリフ。

ティアも観客にも疑問符が浮く。

そんな皆を置き去りにアインは実に晴々とした顔で走り出す。

が、すぐにピタリと足を止める。

「あゝそっいゃ、さ」

そこは空気が多少読めなくても、言すべき目的はなるべく忘れないのがこの物語の主人公。

「このプレゼントありがとな、ちょっと焦げちゃったけどさ」

照れくさそうに頬を掻きながらそんな事を言うアイン。

幼なじみの予想外の攻撃にティアは一瞬で茹で蛸のように真っ赤に赤面して、

「気付くのが遅いのよ…ばか」

と、顔を逸らして背中を向ける少年に返すのが精一杯の反撃だった。

ぞろぞろと広場を横断する隊列を組んだ集団。

その中央にアーシェはいた。

兵を引き連れ、四方を騎士に囲まれ、英雄に手綱を引かせる馬上の少女に空間は完全に支配されている。

彼女に集まる視線は様々だ。

広まる新たな噂を信じて天井の存在を崇める者。

公表されていない存在に頭を下げるべきか悩む者。

先程の発言に疑惑を向ける者は兵の中にも存在した。

アーシェは城から迎えに来た馬車には乗らず、アッシュが手綱を引く馬上であえて一身に視線を浴び続ける。

それは明日までアシェラ王女として皆に名乗る事が出来ない自分にとって精一杯の宣言。

この騒動を拡大した原因が自分にあるのだと皆に知らしめる。

馬上で視線も表情にも揺らぎが無い完璧なる姿に見える白銀の少女。

しかし、アシエラ王女の仮面の中でアーシエは怯えていた。

城で初めて大衆の前に姿を出せた時は自分を彼が見てると思ったら他の視線なんて何も気にならなかった。

街に初めて来た時は彼を探すのに必死だった。

まるで感じ方が違う。

今日という日まで確実に味方であるごく少数の人としか接する事が無かったアーシエは他人の視線というものに初めて恐怖を感じた。出来る事なら今すぐにもあの塔に帰ってまた世間から隠れたかった。

でも、私は自分の世界を広げる楽しみを知ってしまった。

マリアとルーに次に会った時は偽りなく自分が王女だと話そう。もし、ソフィアさんが私の正体を話したとしても、きっとあの二人はアーシエを歓迎してくれる。

私のワガママを聞いてくれた彼はだろうか。

憧れだった少年に会えたから、あまりに嬉しくて楽しくて沢山はしゃいじゃったけど呆れられただろうか。

彼が心配でいてもたってもいられなくて広場に行ってしまった事を本気で怒ってたな。

言うことを聞かなかったから当然だよな。

彼が怪我をした時は不安で仕方なかった。

でも、同時に嬉しかった。

彼の行動が私を守ろうとしたものだ和理解出来たから。

だから、オジサマに無理を言って彼が目を覚ますまで城へ帰るのは

待つて貰った。

謝りたかったから。

お礼を言いたかったから。

目を覚ました彼には話しかけたけど、無言だった姿が胸に刺さる。突き刺さる。

彼の最後の姿を思い浮かべると言葉にならない恐怖が必死に伸ばしている背筋を腰砕けにしてくる。

17才になるまで全てが味方では有り得なかった環境で育ったアーシエは、胸を締め付ける初めての感情に自分で理解出来なかった。

それは恋など以前の問題。

ただ嫌われたくない、という普通に生きていれば誰でも芽生えるであろう当たり前前の感情。

頭に浮かぶのは少年の姿。

例え、少年がアーシエの後ろにいた人物のせいで無言だったとしても、誰かを嫌うという感情事態を知らないアーシエは、少年がまさか自身の父親であり私が大好きなオジサマを憎んでいるなどとは夢にも思わない。

遅すぎる新たな感情の覚醒に気付かないアーシエはひたすら怯えるしか出来なかった。

彼の姿を思い浮かべるところも怖いのに、彼の姿は鮮明に頭に焼き付いて離れない。

あれだけ出たいと思っていた塔に今はただ早く帰りたいかった。

それなのに乗っていた馬は足を止めてしまった。

まだ馬に乗ってから100メートルも進んでいない。

「っ、オジサマ？」

「ここにいなさい」

手綱を引いていたオジサマに理由を聞こうとしたら、オジサマは手綱を離して行ってしまった。

いつの間にか下を向いていたのか、アツシユの行く先を目線を上げて追うと列の先頭に人溜まりが出来ていた。段々と増える人の波。なんだか色んな人の叫び声も聞こえてくる。何も分らず不安が駆け巡る。

「あっ……」

広場の入口にこの場から行かせまいと立ちはだかる者達の群れ——に、見えてしまった。

その中にいた彼の姿に辛うじて保っていた仮面は割れ抑えていたア——シエが溢れ出した。

第五話 「That pipe dream she saw 前編」(改)

第五話は長くなってしまった為に読みやすいよう前編と後編に分けました。

勝手にホントすみません。

次回予告――

――当然ながら今回の後編です。

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き起こした戦争により、世界は二つに割れた。

そこで少年達は選択する。

こちらは”精霊と魔法そして人間が当たり前に共存する世界”の物語です。

お楽しみ下さい。

商業区中央広場の出口に先回りした俺は行列の先頭集団の兵士に足止めを食っていた。

「通してくれ。彼女に用があるんだ」

俺が用があるのはこの兵士の後ろ。

馬に跨がった一団の中央にいるただ一人のみ。

「彼女だと！？キサマあそこにいる方が誰だか知ってて言ってるのか！？」

「少なくともあんたよりは知ってるつもりだ。今じゃなきや駄目なんだよ」

隊列の進行方向に立ち塞がって隊列を割って行くこととする黒髪の少年を引き止める。

服装は上下の所々が破け穴が空き、腕なんかは完全に剥き出しになっている。

「無理だと言っている！貴様のようなボロボロの成りをした者が近付いて良い方じゃない！」

「そうだそうだ！貴様のようなそんな千切れたばろを着た者は近付かせる訳にはいかんと言ったんだ！進行の邪魔をしおって叩き伏せて牢獄にぶち込むぞ！」

正直、ティアから貰った服を貶したコイツらをぶち飲めしたい。

だが、俺に槍を突き付けるコイツらは間違っていない、職務を全うとしているだけだ。

確かに俺だって彼女の護衛をしていたとしたら、見ず知らずのこんな薄汚れた姿をしたガキを通したりはしない。

今、後ろにいる彼女はコイツらにとって間違いなく王都の最重要人物であり、俺みたいな庶民が気軽に会える存在じゃない。

彼女を四方から囲むように陣形を組む騎士達の元へ列の真横から行かずにわざわざ正面に回り込んだのも、王女としてあそこにいる彼女の為だ。

「くっ・・・お願い、します」

だから、彼女の為にも俺が堪えないといけない。

「お願いします！通して下さい！どうしても俺は会わなきゃならないんだ！」

必死に頭を下げる。

生まれながら王女である彼女のために。

何より、自分の願いのために。

「ええい邪魔だっ！」

しかし、どんなに無様に頭を下げて懇願しても彼等が俺を通す訳がない。

それは分かっていた。

それでも、彼らの後ろにいる一人の少女に会えるまで退く訳にいなかった。

「がっ！…くっ！」

いつまでも頭を下げたままその場から動かない少年を兵士は槍で柄で突き飛ばす。

しかし、すぐにムクリと起き上がりまた立ち塞がる。

「いい加減にしろ貴様！」

数人に囲まれ槍で何度も叩かれ弾かれる。

「ぐっ！」

魔力行使もせずに殴られるのはハッキリ言ってすげえ痛い。
鉄の柄は筋肉を越えて骨に響く。

「が、はっ！」

胸元を突かれれば息が詰まり吐きそうになる。

地に伏せても、進行方向から逸らされる事だけは気合いで耐える。
ガキーンと音が響いたと思うと目から火花が飛んだ。

——ああ頭を殴りやがって・・・せつかく治療して貰ったのに――

視界に血が滲んできた頃に攻撃は止んだ。ガシッと数人に両脇を抱え上げられ肩を掴まれる。

ああ、退かすのを諦めて拘束するのか。
それは、まずいかな。

まず、今日中に会えるとは思えん。

「離して、くれ」

捕まった腕を強引に振り解く。

「あ、れ？」

しかして、それは思ったよりも簡単に解けてしまった。
というより離せと言った時点で本当に離してくれた。

あっさり解かれた拘束に勢い余ってふらついてしまふとまた捕ま
った。

今度はさっきよりも優しい、まるで俺を支えるように。
なんで？と見ると俺の後ろには見慣れた人達がいた。

「よお！よお！あんたらのオレらの騎士様を随分と痛め付けてくれ
てるじゃねえかいっ！」

そこには俺の右側を支える屋台のオッチャンがいた。

「アインの着てるこの服はなあ！ティアちゃんがコイツに似合うよ
うにって考えて俺が端正込めて仕立てたんだ！文句はオレに言えや
！」

いつもティアと行く仕立屋が左側を支えていた。

「アイン兄ちゃんの服はお前らの代わりに精霊と戦ってぼろぼろに

なっ たんだ！」

どこからか角材のような棒を持ったルーが横にいた。

「大丈夫かいアイン？」

「オバサン！どうしてここに！？」

ルーがいるからもしやと思ったがやはりティアの母親ソフィアもいた。

オバサンにハンカチで額に垂れる血を拭われながら話す。

「そりゃあ私達もこの街の住人だからね。5番街に避難した人達以外は皆集まって来てるわ。」

そしたら、この行列にあなたが見えたのよ」

「えっ？みんな？・・・うおっ！？」

自分の後ろを見渡すと俺らがいる地点を境目に背後には大勢の住民がいた。

いや、背後だけじゃない。

よく見ると前面にいる兵達を取り囲むように広場を埋め尽くす程の人数。

その数はどんどん増えていく。

既に広場に入り切れない者達が四方に繋がる大通りに拡がり始めていた。

「こりゃ、兵が進めなくなる訳だな」

100名はいた兵士。

俺を無理矢理ボコボコにして道から逸らす事も、後ろにいる騎士に頼んで強引に魔法で吹き飛ばす事も出来たはずだと考えてはいたが、こうなつては俺一人をどうにかしても意味は無い。

「な、なんだこの数は？」

「お、お前達！いくら１１番街の住人だからってこんな事して良いと思ってるのか！」

さすがに兵だけでどうにもならなくなったのか、進まない進行方向に疑問に思つたのか青の外套を着た騎士達が続々と前面に湧いてくる。

「ああ？あんたらこそオレらの家族に手を出して１１番街から出れると思うなよ？」

「ーコイツ《アイン》はこの街の住人だ！家族の敵は俺達１１番街全員の敵だ！」

そつだそつだ！と、オツチャンと仕立屋の声に賛同する声が響き渡る。

「っ・・・みんなありがとう」

この商業区の一角に１１番街全住民が集まっていると言っても過言じゃなかった。

「なあに精霊騎士様にはいつも世話になってるからよ」

ぽんぽんと肩を叩いてニツ、と笑うおっちゃん。単純に嬉しかった。

それと同時に危ういと思つた。

――騒ぎが大きくなり過ぎてるな――

「き、貴様ら・・・騎士に刃向かうのかっ！」

帯剣した剣の柄を握る騎士達。

「生憎と俺らの認める騎士様はコイツくらいなんでな！」

この街の住人にとって騎士とは青の外套を指さない。

住人にとって騎士と呼べる存在は家族を守る者を指す。

だからこそ騎士達が威嚇しようとも怯む事は無い。

ぺつと唾を吐いて拳を握るおっちゃん。他の住人達も皆、角材やら割れたレンガやらを持拾ったり、素手の者は握り拳を作っていた。

「母さん。僕の後ろに下がって。」

棒を構えたルーが小さい身体で母の前に立つ。

「何を言ってるのルー。王宮の給仕は雑務だけじゃ無いのよ」

それを手で後ろに押し退けたソフィアはエプロンからナイフを二本取り出しヒュンヒュン回して両手で構える。

「大戦時、王宮給仕に戦闘技術は必須よ。あなた達にそれを教えてあげるわ」

エプロンを着けた元王宮給仕が騎士団につっこり笑いかけた。ソフィアのその勇ましさに誰かが鳴らした口笛が聞こえた。

「そ、そんな事初めて聞いたんだけどオバサン」

「そりゃそうよアイン。女に秘密は多いもの」

普段と変わらない笑顔であっけらかんと言うオバサンにまったくその通りだと思った。

きつと後ろでルーもそう思ってるだろう。

というか、そんな事思ってる場合じゃない。

集まった住人達は完全にやる気万全だ。

騎士達も皆剣を抜き放っていた。

両雄が戦闘体制でありお互いに引く気は無い。

まさに一瞬触発状態。

ヒートアップしていく中で冷や汗が止まらなかった。

——本格的にヤバくなってきやがった——

もはやアイン一人の問題から11番街対一個中隊の全面対決へと拡大した構図。

この場に住民がどれくらい集まったか分からないが軽く見ても1000や2000じゃとてもきかない数がある。

目の前の大体、兵100騎士20程度の数だけが相手なら良かった。それなら正直、城から応援が来る前に軽く勝利出来るだろう。

だが今ここにいる、その内の3人の騎士とは戦わせる訳に絶対にいかない。

彼女に会いたいただけなのに、この戦いはそれ以前に全く意味が無い。

拮抗が僅かでも傾けば総崩れ。

どちらか手を出したら泥沼の抗争になるのは目に見えていた。
こんな事は俺も彼女も望んでいない。

「ちょ！ちよつと！待ってくれオバサン！」

「なあにアイン？」

まず一番先陣を切りそうなオバサンから止めるべきだ。

両手を広げて立ち塞がる俺にナイフを構えたまま聞き返すオバサン。

「手助けはありがたいけど、俺は戦ったりする気なんて無いんだよ
っ」

おっちゃんと仕立屋も止めに入る俺に、どうした？という目線を送
ってくる。

そもそも、街の皆は俺が何でこの行列の前に立ち塞がっていたのか
さえ知らないんだ。

そんな理由も聞かずの完全肯定的な加勢は感謝しなければなら
ないが、今だけはまず原点に帰って騒ぎの縮小に努めなければいけ
ない。

「俺はこの列の先にいる彼女に会いたただけなんだよ」

「彼女？あら、どういう事かしら？」

ソフィアは、アインの言葉から出た単語に構えを解いた。

ただ、両手の武器を締ま^{ナイフ}ったりはまだしない。

アインに戦闘の意志が無いと判断しただけで、相手の出方次第では
スグに対応出来るように。

「おい、そういえばアインって名前の騎士に聞き覚え無いか？」

「ええ、私もコイツを城で見たことがありますね」

必死に住民を止めようとする少年の顔を見て年配の騎士が若い兵士に尋ねた。

その言葉に若い兵士も頷く。

それでも、こうして少しでも熱を冷ましていけば衝突は回避出来る

——という、俺の考えはやはり甘かった。

そのまま囲んでいた騎士と兵士が止まっていれば話は簡単だった。

しかし、人がこれだけ集まればそれだけ色んな性格がいる訳で・・・

「こんな小僧が騎士だとっ！はっ！笑わせる！こんなボロを着たヤツに騎士は似合わん！」

生憎と血の気もプライドも多い騎士がいた。

「あれ？そっぴやコイツ今日の式典にいなかったか？」

別な騎士が一人言のように呟いた。

「っ！？お、おいつ！待て！１１番街で精霊騎士ってコイツはあの方の——」

その呟きで、年配の騎士が目の前の少年がダグザ將軍が鍛えていた英雄の血縁者だと完全に気付く。

普段、下の名前を名乗らなくても自分は思ったよりも有名なのかもしれない。

だが、それは遅過ぎた。

血の気の多い騎士が剣の切っ先で俺の服の破れて垂れ下がった生地を切り捨てる。

その騎士一人の行動によって均衡は一気に傾く。

「っ！ティア姉ちゃんがあげた服をよくもっ！」

誰よりも早くソイツに向かったのは大好きな姉のプレゼントを汚されたルー！。

「のっ！ガキ！」

そして、次に動いた兵士の行動が均衡を崩壊させた。

それはあくまでも挑発と威嚇の為に本気じゃ無かったかもしれない。だが、それでも隣の兵士は騎士に殴りかかったルーにあるうことが槍の柄ではなく鋭く鋭利な切っ先を向けた――

「危ないルー！」

――瞬間、俺は動いていた。

息子の危険にオバサンが叫びナイフを投げるよりも、槍がルーに届くよりも早く槍を掴む。

「なっ！なにをするっ！離さんか貴様っ！」

兵士が掴まれた槍を動かそうと両手全身の力を込めるがビクともし

ない。

黒髪の少年の片手に握られ槍は宙に万力で固定されたように押しても引いても動きはしなかった。

この兵士は禁忌を犯そうとした。

「俺の家族に槍を向けたな・・・」

その行為は誰が相手だろうと許せはしない。

「・・・死ぬか」

瀕死にも至らない痛みなど一瞬で消え去り、代わりに圧倒的な力が全身を占める。

「ひっ・・・!」

兵士は恐怖した。

間近から覗き込んでくる紅く彩られた瞳。

そこから叩き付けられる極大の殺意に心が竦んだ。

蒼光を全身から発しながら腰から半ばで折れた剣を抜かれた時には全身が己の斬死を理解した。

僅かな時間で兵士が感じた恐怖は他の兵と騎士に伝染し、恐怖は心を通して体躯に反射を促す。

それは殺されそうな兵を助ける為では無く、目の前の恐怖を殺そうと槍と剣が動いてしまっていた。

五人の兵士が槍を突き、三人の騎士が剣を振り上げる。

その敵対行動に合わせてソフィアはアインが掴む兵士を除いた近い

兵士二人にナイフを投擲。

屋台のおじさんと仕立屋は反応に遅れるも手近な兵士に殴りかかる。

アインは迫る5の槍と3の剣、それに縋る矮小な9の塊を冷めた心でその死を予見、漲る魔力を解放して惨殺にかかる――

「っ！このっ！」

――それより早く2つ雷光が走った。

それは魔眼じゃなかったら何が起こったのか理解出来なかったろう。それほど二人は速かった。

「それまでだ」

刃まで黒い漆黒刀を翻して全身黒衣のヴァーリが言う。

一瞬のうちに宙のナイフと三本の剣を切り裂いた刃の形状は湾曲していてサーベルより三日月刀シミターに近い。

「どうしても暴れたいならワシが相手をするぞ坊主」

そしておっちゃん、仕立屋と騎士の間に立つ無手で眼帯を付けた隻眼偉丈夫。

この男は例え戦場に向かう時でも武器を持って行かない。使えない使わないのでは無く、わざわざ持つて行く必要が無いからだ。

「ジジイ・・・なんで俺に殴りかかった・・・」

五本の鉄槍を素手で叩き折ったダグザの右拳が俺の顔面に伸ばされ

ていた。

掴んでいた槍を離して全力で抑えなければ確実に夜空の星になっていた。

——このクソジジイ本気で殴ろうとしたな——

「ガッハッハ！暴れたら一番迷惑なのはお前だからな！」

いつもと同じ調子で豪快に笑うダゲザ。

大きな握り拳を抑えた左手を離そうとしたが、その左手をすぐにそのまま握っていた拳を拡げてジジイの右手が俺の掴む。

「アホか！暴れたりするか！離しやがれ！俺は冷静だ！」

ぎりぎりと手首を締め付けてくるジジイの右手。

折れた剣を鞘に戻し右手で解こうとするがジジイの馬鹿力が一層腕を締め付けて離れない。

「いいや、お前はワシらが止めなかったら確実にこの9人を殺していたからな・・・」

「くっ！」

大戦を戦い抜いた英雄ダゲザ。

歴戦の猛者たる迫力に吞まれる。

魔眼なんて不便なモノが無くて直感で感じとってしまう圧倒的強者の貫禄。

その内に秘めた力が眼に視えて分かるアインからは戦意が既に消え去っていた。

そして、瓦解した奔流は新たな三人目の出現により完全に鎮静化する。

——双方共に引きなさい——

10年振りに聞いた声。

「この争いに意味は無い」

父親としての責務より、騎士としての職務を取った男。

「アッシュ様！」

「ア、アッシュ様！」

一瞬で静まる場に声を張り上げる必要も無く、低く穏やかな声が住人の緊張を弛緩させ、姿が兵と騎士の乱れた統制を取り戻す。

ダグザのように筋骨隆々の巨漢でもなければヴァーリ程長身でもない、いたって平均的な身長 of 壮年の男性——なのに。

歩みと声がなくともそこにいるだけで安心してしまふ。

存在だけで落ち着かせる。

それは絶対なる守護者に対する崇高というより信仰に近い程の信頼。誰もが認める騎士が物静かな態度でアインの前に歩み立つ。

10年。

人間が変わってしまうには十分な時間だ。

体は成長して、記憶は霞がかかったようにうる覚えになる。

しかし、それでも変わらない者も確かに存在する。

10年振りに向かい合う二人の親子。

遙か昔に感じる聞き慣れた声の持ち主はやはり頭に焼き付いた相手だった。

フルネームはアッシュソルツヴァイレヴァンテ、俺の父親。

記憶にある白亜の髪は一筋に纏められていて記録より少し伸びている。

見上げる程大きかった背丈は10年の月日がを同じ高さの目線に変えたいらしい。

「何の用だ」

それが10年振りに息子に投げ掛けられた最初の言葉。

心なしか俺の腕を締め付けるダグザの力が更に増した気がした。

深く刻まれた眉間の皺、奥にある刃のように鋭い蒼の眼光を正面から同じ色の瞳が見据える。

10年という月日が立つ間、次に会ったら何を言つかどれだけ考えたか分からない。

「ジジイ・・・いい加減離してくれ。ジジイにも兵と騎士にも、勿論あんたにも俺は用が無い」

やけに落ち着いたアインの予想外の口調にダグザは、ほおくと感嘆

の息を吐いて腕を解放する。

兵と騎士は英雄に対する口調に進み出ようとしたが、アッシュが手だけで無言でそれを制した。

「ならば、何故ここにいる」

「この先にいる彼女に用があるだけだ。元々誰にも迷惑をかけるつもりは無かった」

10年振りの二人の会話は淡々としたものだった。

今、二人の会話に親子の情は無く、この場において二人は親子であつて親子では無い。

アインにとっては目的の前に立ち塞がる一人の障害（騎士）。

アッシュにとっては護衛する者の進行に立ち塞がる一人の障害（少年）。

表面上だけではなくアインの心はやけに落ち着いていた。

この場で対峙してダグザの会話の答えが分かってしまったからだ。

分かったと言うより、今更ながら理解したと言つべきか、――俺は答えを本人から直接聞いていたのだから。

「お前の言動はこの先にいる人物が何者なのか知った上でのものか？」

「ああ。一今あんたが守護する王女様だろ？」

11番街の住民達が俺の言葉に騒然となる。それをソフィアだけは静かに聞いていた。

「それを知りながら何故ここにいる」

「俺は別にアシェラ王女に誓いを立てた訳じゃない。それに誓うつもりもない」

さすがにソフィアも啞然となった。

住民と兵と騎士は驚愕のあまり硬直した。

今のアインの発言は騎士に真っ向から喧嘩を売ったに等しいからだ。ダグザは訝しい表情で見守り、ヴァーリはこの後を見極めようと静観する。

男は何も言わずに腰に手を伸ばす。

静寂のなか、鞘に納められた騎士の象徴が滑らかにすらりと引き抜かれる。

手に握るのは余分な装飾の一切無い刀身の腹が欠けた剣。

完全なる存在（騎士）と共に語り継がれ、その存在意義を追求した上に成り立つ完全なる剣。

あらゆる戦場を駆け続けた無敗の英雄と共に、最強と謳われた頂きから振り落とされ、切り裂き続けた1片を除き完全無欠の不朽の剣。鋭利にして強靱と強固さを兼ね備えた刃は記憶が確かなら、切ろうと思って切れなかった物は無く、切れないと思った事は唯の一度だけと聞いた。

月光を磨き抜かれた鏡面のごとく反射する姿は、剣の意味の頂きにあつて辿り着いたものだけが持つ究極に思える完成された鮮烈な美しさを兼ね備えていた。

そして、無表情に剣と蒼く灯る眼差しを―自分《息子》に突き付ける一英雄《父親》の姿は鮮烈だった。

幼き頃は一息子だったから見えなかった至高の剣。

目の前にいる男の存在は完璧で完全な一本の剣そのものだ。

何者にも染まらず、揺るがず、折れず、覆さず、ただ己の信を忠実に突き通す鋼の意志。

冷徹の中に宿る烈火の如く熱血の意思が剣を形創り、守る為に切り裂き叩き伏せる剣を選んだ男の姿がここに在る。

「あんたは分かっているはずだ。俺は後ろにいる女の子に用がある。だから王女を護衛するあんた達には用が無い」

大勢が固唾ん飲んで剣を突き付ける父とそれを前にして怯まず一歩も引かない息子、二人の親子を見ていた。

二人の視線が交差したまま時が止まったような沈黙が続いた。

先に動いたのは、意外にも剣を抜いたアッシュだった。

男は真正面から視線を受け止め続けた同じ色の瞳から眼を逸らすと、ただ一言、そうか、とだけ言っただけで剣を鞘に納めた。

それは予想外のやけにあっけない幕切れ。

現れた時と変わらない足取りで少年の脇を通り過ぎる。

道を塞ぐ住民達に近付いてその先頭にいたソフィア達に、通して貰えるかな、とアッシュが言うとソフィアはええ勿論よと笑顔で頷いた。

踏み出す騎士の歩みを止める者は誰もおらず、小波が引いていくように住民達は道を開き、街から産まれた英雄を歓迎するように歓声が上がった。

使え

振り返らずに歓声を聞いていたアインは、背中に掛けられた声に振り返る。

背後には既に住民の壁に隠れて声の姿は見えなかった。

その代わりに自分に向かって弧を描いて飛んでくる剣が視界に入り込む。

思わず反射的に落とさないようにそれを掴む。

「・・・なんで」

鞘に納まった見たばかりの剣を見て、それがあの男が投げた者だと分かる。

「良いから借りとけ、そんな折れた剣じゃ格好つかんだろ」

まあさっきの回答は及第点だがお前の答えとしちゃ上出来だ、とダグザはアインの頭をもみくちやに撫で回して城へ歩き出す。

「ガキ扱いすんな!」

「がっはっは! ヴァーリ! 見届け役は任せたぞ!」

「分かりました」

そうして二人の英雄は若者達を残し、広場から去っていった。

受け取った騎士の象徴を両手に抱えて俺は改めて呆然と立ち尽くす一団に告げる。

「そこを通してくれ」

今度は二つ返事で兵士も騎士も皆頷いて道を開けてくれた。
背中家族達の歓声を浴びながらアインは数歩だけ前に進んで止まる。

その数歩で目的地に辿り着いた。

「よお・・・待ったか」

屈強な男達の開かれたすぐ先で隠れていた人物——純白のドレスに包まれた白銀の髪少女がいた。

あの男が現れた時点で彼女が近くに来る事は分かっていた。

たぶん、動かずに待っている、くらいは言われていただろう。

だが、そんな制止の言葉を彼女が聞くはずが無いのは俺にもあの男にも予想の範疇だろう。

「よお・・・待ったか」

隠れ蓑が無くなって姿が急に露わになってしまった彼女は狼狽しているようだ。

ドレスの生地を握り締めて顔は羞恥で赤く染まり、表情には戸惑いと焦り、それに僅かな恐怖が窺える。

戸惑いと焦りは分かるが怖がられる覚えは、無いな。

まさか、俺に怒られると思っているのだろうか。

「え、えつと、あの……どう、したの……」

上目遣いで見上げてくるアーシェ。

紫の瞳は落ち着き無く、上下にいたりきたりを繰り返している。

それで、わかった。

彼女は俺の感情を窺っている。

別れる時にあんな態度をとってしまった上に、そんな俺がこんな現れ方をしたからだ。

全然俺とは違うと思ったけど、ちょっとだけ彼女に親近感。

「まだ全部は叶えてないだろ」

きよとんと首を傾げるアーシェ。

「それと安心してくれ・・・俺は怒ってなんかいない」

「・・・ほんと？」

「ああ、それに嫌いになったりなんかしない」

・・・自分で言っておいてなんだが、今の台詞は割と恥ずかしかった。

いや、かなり恥ずかしかった。

でも、まあ彼女の雰囲気も戻ったようだし良しとしよう。
むしろ、本番はここからだ。

「あのさ、屋敷での話覚えてるか？あれを、キミに誓わせてくれな
いか？」

「えつと・・・良いの？」

「ああ。今、誓うよ」

ベルトに括り付けられたサイドポケットから折畳まれた布を出す。
その取り出した青い生地と手に持つ剣で俺の意図を彼女は理解してくれたようだ。

「よく・・・飛び出さずに堪えたな」

夜の五番街を歩きながら、ダグザは独り言のように呟いた。

先程とは違って人気のまったくない閑静な街並みのなか、二人は夜の散歩をするようなゆったりとした足取りだった。

「必要ありませんでしたから」

「信じてたという事か」

「いえ、そこまで親バカでも無ければ、過保護のつもりもありませんよ」

「ほお、成長したな」

高い塀に囲まれて、それより高い建物達が並ぶこの街は昼と夜では180度別の顔を見せる。

微かに遠く聞こえた歓声がここでは嘘のように静かで、後ろ髪を引く月日と思いが背中を押してくれる。

アッシュは思い出すように眼を閉じる。

思い返す事はどれだけあれど、振り返る事は出来ない。

「私達も、いつまでも坊主じゃありませんからね」

ふっ、と目頭を緩めて笑みを見せたアッシュの顔はダグザに息子の姿を連想させた。

あまりにも似た親子の様にダグザは思わず吹き出して笑ってしまう。

城へと続く綺麗に敷き詰められた石畳を二人の英雄は進んでいく。

今だけ重荷のないアッシュの足取りは軽く、軽い歩調でダグザと並んで道を歩く。

ただそれだけの事なのに、二人は面白おかしく笑いあった。

綺麗な夜だった。

広場を埋め尽くす観衆の中心、ぽっかり空いた空間に三人がいた。

広場の中央に戻った俺の前にはアシェラ王女と司祭が並び立っている。

俺と彼女が何をしたいか分かっていたかの如く負傷者の治療を終えて爽やかな笑顔で待っていた司祭は、二つ返事で儀式を行う事を了承してくれた。

それでやっぱりあの男は分かってたんだなと実感した。

司祭曰く儀式を行うのに場所は関係無いらしく、今この場で執り行う事になった。

それに、一応俺は正式な叙任式は終えている訳で、豪奢な城なんかじゃなく、こんな場所こそが俺と彼女には丁度良いのかもしれない。むしろ、これでも規模が大きい。

「アインソルツヴァイレヴァンテ前へ」

「はい」

荒れた広場の天井に広がる満天の光の粒と円を作る大勢が見守る中アインは跪く。

それを街の住民は勿論のこと、ティアも家族と一緒に前列でその光景を眺めていた。

司祭が畳まれた青の上にある剣を王女に差し出すと、アーシェは剣を受け取り宣言する。

―我が名は、アシェラ バーネット レギンレイブ―

空に響く声。

―人が人より生まれ、精霊は世界より生まれる―

それはまるで天使の歌声。

神の言葉を借りたかの如く神聖で美しく、遥か高みから響く音色だった。

―精霊と供に存りし者、その軀に宿し理で法を世界に刻み込み―

彼女の手にあるのはたかが金属の塊。

―この剣で神に奉仕するすべての人々を守護すべし―

鐐鳴りの音から首筋に伸びる一筋の閃光が肩に掛かる重みと布越しに触れる冷たさを感じさせる。

ここにある剣というものは、ただの金属であることを凌駕する意味を持つ。

振り下ろす事でしか意味を成さず、岩も、鋼も、人も、精霊も、等価に断つ意思を持たぬ無慈悲な死の刃。

純白のドレスに包まれた白銀の髪の美少女と細い指が握る凶器。

まるで彼女の存在と相反すると思える長さ80センチ程の刃を向ける姿に思わず見蕩れてしまう。

彫刻のように完成された造形美をいつまでも眺めていたい。

その完全な美しさではどこかあの男に似ていると思った。

考えたら、二人の持つ雰囲気は少し似ている。

騎士で最上に位置する男、昼間と今日の前にいる彼女はこの国の王女。

どちらも頂上に位置するものとして近い存在なのかもしれない。

「アイン ソル ツウ アイ レウ アンテ

汝、忠誠を誓いますか」

これはアーシェにとってもこの場にいる大半の者にとっても聞くまでも無いこと。

問われる少年は、これまでもそうしてきたし、騎士になんてならなくてもきつと多くの者を救うだろう。

これからもそうだという確信がある。

だから、あくまでこれは形式的なモノに過ぎないし、本当はこの誓約自体に意味なんてない。

これは魔法による契約でもなんでもなく、ただ騎士と認められる為の儀式だ。

だが、彼女は王女であり全てを背負い込む覚悟がある。

主の敵は己の敵。

己の罪は主の罪。

即ち、騎士が殺した者は彼女が殺した者でもあり、その罪も覚悟も彼女は全て背負い包み込む。

世間知らずで小さな彼女にそれを背負せる事が怖かった。

今日、一緒に過ごしてみても少なからず彼女の人と成りを知った。

「はい。誓います」

バシッと剣の腹で首筋を叩かれて鞘にしまわれた剣。
剣を受け取るために立ち上がる。

本来ならここで剣を受け取って儀式は終わり――

――終わるのだが、立ち上がった後もアインは剣を受け取らない。
アーシエも剣を渡さない。

ここまでがあくまで通常通りの王女としての誓いであり、目的はこの先にある。

「そして、これは今あなたの目の前にいる一人の女としての夢であり願いです」

アーシエは王女としてではなく、同じ高さでアインと同じ目線で近付いていく。

その王女としての行動を逸脱した行為に周囲が動揺する。

アーシエは剣を抱きかかえたまま触れ合う程の距離で語りかける。

「アイン・・・大好きなこの街、こうしていられる愛しい世界、誰もが幸せに暮す世界・・・それが私の願い」

その願い。

純粹で崇高なる理想を告げた少女を誰もが見つめた。

それは、崇めるように。祈るように。

多くの人達がそれを願いながら、誰もが無理だと口にする尊すぎる理想だから。

その願いは、決して叶えられないものだ知っているから。

剣を振るう度、生きていく限り失うものがある。

救い守る限り隙間から抜けていくものがある。

彼女の願いは誰もが想い焦がれ、そして多くの者があまりの理想の高さに立ち竦む。

「この世界を救って、私に夢を見せてくださいアイン」

世界を救う。

それは誰もが心の何処かで思いつつも、心の底では否定してしまう。叶える事など不可能だと認めない、王女じゃなければ馬鹿にされる願いかもしれない。

しかし、今、ここに目の前にそれを真摯に願う少女がいる。

でも、それをこんな俺に期待して、どこまでも真っ直ぐに信じて疑わない。

塔の中のちっぽけな世界から、今日始めて外の世界に出れたという

のに世界を愛していると口にした彼女。
そんな世界で始めて出会った俺を信じるお姫様。

何の根拠もないけど――

例え、街で声をかけてきたオジサンが彼女に悪態をついても、俺があの時彼女を無視して街に置き去りにしても、あの精霊が町中を無残に殺しても。

きつと彼女は変わらない。

その願いはどんな事があっても揺るがない。

世界を愛して、願い続ける。

いいじゃないか。

一人くらい、それを本気で願っても。

今日初めて塔から出てきて、世界なんて全く知らず、幽閉されていたと言っている境遇に関わらず世界を愛しているお姫様。

彼女の願いは余りにも綺麗過ぎる。

だから、魅せられた。

心が震えた。

あの部屋で真っ直ぐに見詰められた時に撃ちぬかれたと言っている。

いいじゃないか。

それでも。

一人くらい、そんな事を本気で信じている彼女の願いを叶えようとして、そんな夢物語を守ろうとする馬鹿な男がいても。

キミが願うなら、俺はその願いを命を賭して守ろう。
きみの願いを守る事が俺の在り方。
騎士として誓うべき理由。

そんな願いの為に剣を振るえる事こそ、やっと見えた俺の理想。
彼女が与えてくれた俺が誓う理由。

俺が守るのは国にでもなく、誓うのは王女でもない。
守るのは彼女の願い。
叶えるのは彼女の夢物語。
だから、その名を口にする。

「アーシェ」

永劫不変の輝きと如何な酸にも溶かせない意思を瞳に宿した少女。
数多の宝石も天井の星よりも魅力する美しさの願い。
そのためだけに誓う事を待っていた俺は差し出された剣をしっかりと受け取る。

「キミの願いのために、キミの騎士になる事を誓うよ」

「はい」

アーシェは答えが分かっていたのに、安心と嬉しさで涙が出てきそうになっていた。

涙を堪えて司祭から受け取った外套を拡げる。

肩にふわりと青地に白の剣を持った精霊の紋章が入った外套がかけられる。

自分と同じ誕生日に17歳になった少年の肩に想いを乗せる。

今宵、この場にいる物達は一人の騎士の誕生の証人になった。

「ねえ騎士様……」

「ん、なんだいお姫様」

一歩下がって、ついつとスカートを摘まむアーシェ。

「私と一曲踊つてくれないかしら？」

「ええっ!？」

「これも私の願いよアインっ」

「今考えたる!」

勝手に手をしっかりと握られて、戸惑う俺を誘導しながら彼女はステップを刻み出す。

「こ、こんな曲も無いのにつ」

「あら、曲が無くても踊れるわ。それに、肝心なのは曲じゃなくて相手よ」

そんな事まで言われたら断る訳にはいかねえじゃねえか。

ちくしょう……自慢じゃねえがダンスは苦手だ。

パーティーの為にティアの練習相手はしてたけど、アイツのリズムは独特過ぎてよく分からなかったし、おまけにそのティアくらいとしか踊った事なんて無いのに。

こんな大勢が見てる中で踊るのは顔から火が出そうな程恥ずかしかった。

こんな俺を皆はどう思うだろうか。

街の皆は応援してくれる。

でも、大多数は嫌悪感を抱くかもしれない。

彼女のような特別な1を許しても、俺のような特別扱いは許しはしないだろう。

それが大衆の意見というものだ。

だが、そんな悪意なんていくらでも耐えてやる。そんなもの彼女が耐えるものに比べたら些細なものだから。

そう思つて赤面しながら、チラツと回りに視線を向ける。

アーシェが背伸びをしてアインに抱擁するよう手を首に回して外套を掛けてから急に踊り出す様を誰もが声を上げずにその光景を見届けていた。

この国の王女である少女と踊るダンスの下手くそなの若騎士の姿は良くも悪く微笑ましかった。

皆、悲しき出来事があつた場で踊る二人を不謹慎だとは思わない。

この世界には悲しい事が多すぎるから、それを楽しい事で吹き飛ばすのがこの国の風習だ。

だから――

「仕方ない。私達も踊るかつ、行くよルー！マキつ明かりを頂戴つ！」

「ちよつとやだよつティア姉ちゃん！母さゝん！」

小さな弟の手を引いて精霊を飛ばした姉弟が口火を切つてホールに躍り出れば、

「さてヴァーリ！私の相手をして貰おうかしら」

「ソフィアさん！？俺はそういうのはっ！」

「ダグザさんもダンスは教えて無いだろうから私が教えてあげるわ

っ

「それは助かりまつ、てっ！いいですよっ！」

「レディの誘いは断ってはなりませんよ」

「司祭っ！お前が踊ればいいだろうっ！」

「私は城に戻らなければなりませんから、あなたはダグザさんに見届けるよう言われてたのでしよう。ではごゆっくり」

司祭に切り捨てられ元王宮給仕に若き騎士隊長も踊らされ、

「ヤローなんざと踊りたかねえが、この街の騎士様が踊ってんだ！オレらも踊るか！」

「ああ！ダンスなんて上等なもんじゃねえが盛り上げてやらねえとな！」

楽器なんてものではなく、ただ手を叩き、物で音を出し、口笛で奏で、お互いの呼吸だけでリズムを取る。

街の皆も好き勝手に歌い、踊り出して少しずつホールは踊り手達で埋まっていった。

それは上流階級達が踊るような上等で上質とはとてもいえない夜の舞踏会が始まっていた。

そんな中、恥じらいなんて消え失せたアインはアシエラと踊る。

「なあ、聞いていいか」

「なあに？」

足を踏んだりしないように注意しながら、細い腰に手を回して密着しながらくるくると回る。

「なんで……俺なんだ？いくら俺の話を聞いていたからって、もっと有望な騎士なんかいくらでもいるだろ？」

「あなたは私が見つけた私の物語の主人公ですから」

即答の回答だった。

ちよつと意味不明な所があるがなんか恥ずかしくて、胸元で上目遣いのキラキラした綺麗な瞳を見ていられなくなる。

「・・・あまり期待すんなよ」

「大丈夫です——アインを信じてます」

「……………」

これも悩む素振りも感じない即答で、おまけにその笑顔は卑怯だった。

そんな真っ直ぐに言われたら何も言い返せなくなる。

でも、この距離で逃げ場なんて当然なくて、返事を催促されるように腰に回されている手に力が入ってより引き寄せられる。

「ならっ…………俺も最後まで信じてやるよっ」

そうだな。

どうせなら俺も本気で信じてやれば良い。

それでもって彼女が描く夢と一緒に見させて貰おう。

「最後って？」

胸元できょとした顔でどこまでも純粹な紫の瞳を向けてくるお姫様で真っ直ぐな女の子。

—そりゃ勿論—

今日の出来事は彼女に対しての同情であり、誓いであり、そして契りである契約。

俺は広場であの言葉を言ってくれた時のように微笑んでくれるなら何もいらない。

でも、騎士になる理由、信頼をくれた彼女に見返りに与えて上げるものなんて今は何も無い。

だから、せめて笑って見せた。

—もちろん、この物語の最後まで—

もしも終わりが来るのなら、その物語の結末まで覗くために。

「よろしくなアーシェ」

もう一度、キミの名前を口にする。

今宵、ここに誓ったのだという確かな証に。

これから自分の大切な女の子となるキミの名前を。

「はいっ。アイン」

眼を合わせたり、話しただけでは出会いとは言わないと思う。

だから、この時が俺と彼女と心を通わせた最初の出会い。

街の灯りが無い広場、人の持つ松明と精霊、騎士の飛ばした魔力による照明だけの薄闇の中、ただ月明かりだけが二人の笑顔を照らしていた。

この国の王が床に臥せてから久方振りに行われた騎士叙任式の日
夜に11番街で起こった悲劇。

一人の騎士とその精霊が起こした惨状は多くの建物を炎上し、全焼、
崩壊した建物は50棟、死者17名。重傷者18名の被害者を出し
た。

確認出来ていない行方不明者は8名で、それらは死亡として数えら
れ、その数の中には11番街に帰宅途中だった新米の正騎士と共に
精霊と交戦して殉職した王女搜索の為に訪れた兵士も含まれていた。
変わり果てた広場で午前中に行われた追悼式には王都中から多くの
人間が訪れて捧げられた黙祷時には広場を見渡し茫然自失になっ
ていた者、仲間の兵士や家族を失い泣く者もいた。

式典の最後に、司祭はアシェラ王女からの言葉を伝達した。

その内容は街の復興に尽力を尽くす事を確約したもので、11番街
にとつては街の出来事に国が関与する事を明言した驚愕な話題とな
った。

——その日の午後——

閉じられた豪奢で堅牢な扉の前にアーシェはいた。

昨日のように神々しく清潔な純白のドレスではなく丈が何メートルにも及ぶ海のように濃青のドレスに身を包み、うつすらと化粧を施して登頂部には金色に宝石が散りばめられたティアラを乗っている。

アーシェがいる場所はまた城内。

城外には正装した正騎士一同が隊列を組み終えて準備は済んでいる。背後を振り返る。

青の外套を纏った若き正騎士達も準備万端といった感じで今か今かと皆熱い視線を投げ掛けてくる。

扉越しに城壁の向こうから新たに生まれた騎士と王女を待ち望む人々の声が聞こえてくる。

「ふうつ」

胸に両手を当てて深呼吸する。

――心臓がトクトク鳴ってる

この扉を潜ったその瞬間から王女として大衆に認知され私はもう普通の人間として街を歩く事は出来ないだろう。

昨夜、城から飛び出した時からただ眺めていただけの世界へと飛び込んだ。

彼に街で声をかけられたあの時から今まで見るだけだった絵本の世界へと入り込んだ。

この向こうに広がる世界には私を呼ぶ声が聞こえる。

「姫様、そろそろ時間ですよ」

昨日と変わらず爽やかな笑顔を向けてくるメガネをかけた司祭に私は頷く。

「はい。開門して下さい」

司祭の合図とともに重厚な扉が開門する。

眼前にこの国の誇りである荘厳にして勇敢な騎士達がアーシェの姿に号令をあげる。

私はこの時を待っていた。

この門を越える時に私の物語が始まるのだと。

「参りましょう皆さん」

アーシェ王女を先導して騎士が歩き出し、街へ繋がる城門が開門された。

ここから先は私が願い、夢に見る世界。

この世界は儚く甘く優しく厳しい、だからこそ夢から覚める前に駆け抜けよう。

そう自分の胸に言い聞かせてアーシェは馬車に乗車する。

正騎士が馬車を先導し、馬車の後を199人の新しい騎士達が王都の中へと歩を進めた。

10年。

人間が変わってしまうには十分な時間だ。体は成長して、記憶は霞がかかったようにうる覚えになる。

しかし、それでも変わらない物も確かに存在する。

ここは王都を見下ろすような高台にある墓地だった。

街は初めて世間に御披露目となる王女様のパレードのせいにお祭りのように騒がしい。

しかし、今日はその騒がしさがより気持ちを嬉しくさせた。

ここに来るのはツヴァイレヴァンテ家に長年仕えるティミ婆の毎日の日課だった。

愛する夫がこの地に眠ってから随分と立つ。

夫とは子宝に恵まれ無かったがけして寂しくは無かった。

仕えるべき少年は主としてくられる存在では無く、家族であり老い先短い自分の楽しみであり、成長を見るのが幸せだった。

その生き甲斐を与えてくれた主が目の前に眠っている。

『ユミル ソル ツヴァイレヴァンテ』

墓石に刻まれたその名が、現在支えている家族の母親であり、自分の本来の主。

「あらあら、昨日は沢山の方がいらしたのですね奥様」

墓石の前には、沢山の花束が供えられていた。

愛する夫を失っても、日々の生き甲斐と楽しみを与えてくれた主へ

の報告がテミ婆の日課。

「母さん。オレ騎士になったよ、喜んでくれるかい？」

アインが花を置いた所には真新しい同じ種類の花束が二つ添えられていた。

墓石の下に眠る者の好みの花を知っていたのは今ではその夫とテミ婆しかない。

だから、アインはいつも自分の好きな花を供えていた。

「良かったですね奥様……ああ、今日だけは泣く事をお許し下さい奥様。」

「ああ。きつとユミルも笑って許すだろう」

男はぼろぼろと涙を溢して蹲る老婆の肩を優しく撫でる。

どれだけ二人がそうしていたかは分からない。

妻の墓石の前で嗚咽を繰り返す老婆を男は支えるように肩に手を添えていた。

一歩後ろから二人を眺めていたアインはそれをただ見ていた。

二人が語るのは墓石の下に眠る人物であり、今頭に浮かんでいるのは確かにその者が生きた情景で、自分は妄想が形作る者と墓石にか語る事が出来ない。

「それでアインが連れていらしたのが何と姫様だったんですよ。奥様にもお見せしたかった……」

泣き止んだテミ婆はいつもより饒舌に主に語る。

その隣に立つ男にアインは背丈は追い付いた。
しかし、同じ目線になってみても、過去の記憶と目の前の背中は何も変わらない。

ティアのイメージする魔法の原形、そのモデル。
その背中には10年立っても遠くに感じる。

「それにしても親父、小さくなったな」

それは誰にも聞こえない程の小さな呟きだった。

10年前と変わらない距離にいた男はテミ婆から手を離すと振り返る事もなくまた自分の元から去っていく。
進む先には白く輝く城がある。

別に今更、返答も親子の会話なんて期待しじゃない。
だから、あれはただの独り言だ。

10年という月日は、父親が側にいなかったからこそ俺を強くした。
今、またあの背中が振り返りもせず去って行くことも俺は傷付いたりはしない。

俺は小さかった頃とは違う。

そう考えていたから、男が去って行く後ろ姿を追う事を止めて俺も背を向けた。

父親がいなくても家族が住むこの街の、父親との思い出が残された
我が家へと足を踏み出す。

「17になったんだ」

言葉が返ってきたことに驚いた。
そんな他愛もないような一言。

たったそれだけの台詞。

今更親子の会話なんて期待しちやいなかった上にあの男が息子に話し掛けるとは思っていなかった。

背中を向けているから、後ろは分からない。お互い振り返ったりはしない。

でも、アイツの吐いた言葉は確かに足を止めて、その言葉が信じられなくて俺も足を止めた。

「私が小さく感じるのも、お前が大きくなったただけだ」

思わず振り返ってしまった。

男はそれ以上喋る事はなく、止めていた歩みを再び歩き始める。

俺は何も話し掛ける事もなく去っていく背中を見続けた。

そして、足音は離れて行った。

「結局、10年前と同じようにいなくなるんだな」

魔眼の能力が不幸にも鮮明に焼き付けてしまった、去っていく父親の背中での記録。

今日まで自身が10年間追いつけた記録は、今、新しい記憶によって書きされた。

自分を置いていく事も、見えなくなるまで父の背中を結局は眺めていた今も変わらない。

変わったものは、あの時と違い足を止めて話し掛けてくれた事と、自分の背丈がいつの間にか追いついた事、それと…

「覚えてたんだな。俺が今日で17になったこと」

それも妻の命日と同じで、あの姫様と同じ誕生日だからおまけ程度のものだったかもしれない。

今日、10年振りに再開した親子。

また、離れ離れになる父と息子。

母さんの命日にずっといなかったのは今でも許せない。
でも、その時も彼女の傍にいてくれたなら。

「悪い気はしないな」

それだけは確かで。

あの時と違って、今日、今だけは去って行った男を憎しみも無く自分の父親なんだな、と感じた。

見せてもらいましたよ。あなた方の選択を。
まったく、とても興味深い。

今暫くは見守らせて頂きましょう。

―― ■ ■ の理から外れたあなた方の選択を見せて貰いましたよ

―― あなた達の選択は決して簡単なものではありません

―― さて、どうなるか・・・見届けさせて貰います

それが誰の台詞だったのか聞こえた者は誰もいない。

誰にも知られる事も無く、誰にも気付かれる事も無く、その眩きと姿は喧騒に吞まれ、風に流され消えていった。

そして――

一人の少女が描こうしてる世界もまた、美しく優しく儚い夢物語。その長い長い物語が今、始まった。

――
――
――

―次回予告―

晴れて正騎士となったアインの元に友人のシンが二人の人物を連れて訪ねてくる。

一人は見慣れた人物、若き騎士隊長ヴァーリ。

もう一人の金髪の麗人はシンの従姉弟だった。

彼女は英雄アッシュに育てられたただ一人の女騎士『百剣』使いアリア。

アリアは唐突に口にする。

「君と手合わせがしたい」

第七話

「来訪者アリア」

―それは少しの戸惑いと葛藤の選択―

同時進行で進めていきます。

『ヒトというナノ』

”精霊と魔法が混在する隠された真実世界”の物語。

そちらも書き進めていきますので良ければ併せてお楽しみ下さい！

第七話 「来訪者アリア 前編」(前書き)

皆さんこんばんわ。

昼間の方はこんにちわ。

活動報告にコメントしてました通りぎっくり腰になってました。

が、元々なっていたヘルニアを悪化してしまい、パソコンに向かえず携帯で作業してるため投稿が遅延しています。

本来は「ヒトというナ」を投稿してからのもりでしたが、今回の話を前後に分けました。

尚、今回から視点切換を表示する場合があります。

御迷惑をかけますがお付き合い下さい。

by せんだいとりや

第七話 「来訪者アリア 前編」

明け方、夜空が東から昇る太陽により薄くなり出す頃。
儚い星達が地上を見下ろしているように、薄闇に紛れて上空からその様子を眺めていた者がいた。

「やれやれ、お転婆な事だな…」

眼下には小高い丘の上にある一軒家に向かう少女がいた。

嬉しそうに顔を綻ばせながら銀色の髪を靡かせて駆けていく少女。

屋敷の扉にノックもせず勝手に勝手に入っていく姿にヴァーリは人知れず溜め息を吐いた。

その訪問が独断専行の行動によるもので、屋敷の灯りが無い事からも確実に家主側には伝わっていないからだ。

本人は嬉しいかもしれないが、この時間に訪ねられる者の心境を考えると非常に止めたくもなるが、それは俺が関与すべきではない。

まず彼女もここなら大丈夫だろう。と、監視を兼ねた護衛に見切りを付けたヴァーリは屋敷に背を向ける。

朝焼けに照らされ出すレギンレイブ城の眩しさに眼を細目ながら城へと向かった。

レギンレイブ城にある二本の巨塔の内の一つ。

多くの兵や騎士の為の設備が入った騎士の塔の鍛練場では、朝から冷たい石材の床にシンが汗を撒き散らしていた。

「ハアッ！」

滴る汗を拭う事もせずにシンは剣を振るう。

朝日が射し込む室内に金属を打ち合う音が響く。

「打ち込みが甘いつ！こつやるんだっ！」

正中線を捉えた上段に迫る剣を避ける事が出来ずに剣で受け止める。

「ぐっ！」

ガンツという金属同士の衝突音。

精確且つ素早い一閃をいなす事も出来ず、その重すぎる衝撃に思わず腰が沈み身体ごと後方に弾かれる。

「隙は新たな隙を生むぞ！」

追撃してくる猛攻を防ぐ事に専念して辛うじて防ぐ。

一撃、二撃、三撃、と剣撃を受ける度に接触面からは火花が飛び、刀身が軋み、揺ぎ、剣からぱつと青い光が散っていく。

その光は自身の魔力。

一撃ごとに剣が削られていき悲鳴を挙げるように魔力が舞う。それにより一気に重みが増していく剣と身体。

「腕力だけで剣を振るうな！全身と心を一体化させる！」

叱咤の声と共に鋭い一刀が向かってきた。

「はあああつ！」

横薙ぎを迎撃するように剣を下段から斜めに振り上げる――

「あつ……」

――が横薙ぎは止められなかった。

剣同士が衝突した瞬間、僕の剣は空を飛んでいた。

手元には剣自身が明滅している容易く折れた残りだけ。

首筋に当たる冷たさに思わず唾を飲み込み相手を見詰める。

「ここまで」

剣を突き付けてくるピシッと背筋の伸びた金髪碧眼の女性は、まだまだだな、わざわざ剣に当てにしなければ今の間だけで八回は死んでいたぞ。と溜め息混じりに言って首から剣を外す。

その終了の合図に安堵したシンは力が抜けて床に膝から崩れ落ちる。緊張が解けると一気に息は乱れ汗を拭い持っていた剣を見ると、半ばから折れた剣は透けるように薄くなつて消えると僅かに目眩がした。

飛んでいった折れた部分も今のように消えただろう。

「しかし…驚いたぞ。まさか、王都に着くなり剣の相手をさせられるとはな」

「ごめんアリア姉さん。わざわざ付き合わせて」

既に何も持っていない手を腰に当てて呆れ顔の女性はアリア姉さん。僕と同色の髪と瞳した三歳年上の彼女は姉さんと呼んでいても姉弟ではなく、従姉弟であり僕の姉的存在の人物だ。

「いや、私はお前のマスターだからな。

鍛練に付き合うのは構わないが…」

差し出されたアリア姉さんの手を掴んで立ち上がる。

今姉さんが言った通り、彼女は僕を見習いとして指導してくれた先生で、今、僕が正騎士となれたのは先生である彼女の許可と推薦のおかげだ。

「四日もかけてこんな朝方に王都に帰ってきたのに真っ直ぐ鍛練場に連れて来られるのはいささか困る。

私だって女だ。

せめて、旅の汚れと着替えくらいどうにかさせて貰いたかった。

やっと入浴が出来ると思ったのに、また汗をかくことになるなんて

…（ぶつぶつ）」

「本当にごめんなさい」

服の汚れ具合を確認するように白いブラウスを摘まむんで愚痴を呟くアリア姉さん。

――汚れてるってどこがですか？

と言いたくなるくらい彼女のブラウスは真っ白で、悔しい事に汗だくでウェットな僕に対して少しも汗をかかずに実にさらっとドライでいるアリア姉さんに若干イラツとした。

しかし、王都に到着するや真っ先に鍛練場に直行で連れて来たのは間違いなく僕なので素直に謝るしかない。僕は姉さんと違って我慢強く寛容なのだ。

ここでアリア姉さんを少し紹介しておく。

彼女は叙任式を受けずして騎士になった例外の人物で、もう一人のように騎士隊の隊長を務めている。

騎士になる経緯と長身で端正な顔の作り、その美しい容姿も相まって隊長まで務める彼女の人気振りは絶大だ。

今思い出しても今朝の様子を見る限りその人気振りは衰えていなかった。

普段は水の国に常駐する騎士なのだが、先日成人した王女に挨拶とそれに伴い新たな辞令を受ける為に今朝王都に到着した彼女の荷物には、城に着くなり僕のように華麗な隊長だけを待ち構えていた衛士やメイド達が頼まずして喜んでかつさらっていたので、今頃は隊舎にあるいつまでも綺麗に掃除され続けている彼女の部屋（隊長クラスになると個室が与えられ、別の国に派遣されても部屋は無くならない）に本人が望まぬ沢山の花束やプレゼントやらを添えられて届けられているだろう。

彼女のファン達の話によると遠方の国に勤務する元祖お姉様は届かぬ憧れで、二世の存在は身近な希望の星らしい。
ちなみに二世で希望の星というのはティアの事らしく、二人のおかげ（・・・）で百合に目覚めた者も多いらしい。

「私から見てもお前は努力家だ。
無理な鍛練は無駄ではないが効率が良いとはいえないぞ」

「こうして休んでいる最中でも置いていかれるようだと不安になるんだ」

「何がそんなに不安にさせるんだ？」

「アインって知ってますよね？」

「ああ。色んな意味で有名人だからな彼は。
直接話した事はないが、数年前に見たことはあるし、私のマスターの御息だしな。
彼がどうかしたのか？」

「話してなかったけど、姉さんがまだ王都にいた頃に剣の勝負を挑んで負けてるんだ。
家を出たばかりで調子に乗ってたせいもあってか負けた時はショックが大きかったよ」

「そうか…それで家では腑抜けの練習嫌いだったお前が努力家になった訳だな」

「腑抜けはヒドイけど、まあその通りだよ。」

最初はあいつの事が嫌いでしたね。

無愛想で人付き合いも悪くて…でも、それ以上に凄い奴なんですよあいつ。あまり、努力なんてしてる所なんて見せないんです。

それでも分かるんですよ、次に対峙した時にはもつと強くなってるんです。

その時に思っんです。

ああ、コイツはまた僕よりも努力して強くなってるなって…だから、休んでる暇なんて無いんですよ。

アイツの隣に並ぶためにも」

僕の努力の理由についての独白を聞いていた姉さんは嬉しそうに微笑んで共感してくれた。

「そうか。良きライバルなんだな彼は」

「僕にとってはそうかもしれないけど、アイツの中にはたぶん後にも先にもライバルで目標なのはずっと一人だけです」

アインと初めて対峙して剣を交えた当時を思い出す。

彼は言っていた。

—俺と会えて良かったな—

勝負の最中に何言ってるんだコイツは？と思った。

—俺はお前と会えて良かった。まだまだ強くなるぜ俺達—

僕を見つめる黒髪の少年は嬉しそうに笑っていた。

その時の笑顔は力を誇示する事に躍起になっていた僕にとって羨ましいくらいに眩しくて、高みを見据えた彼に負けたくないと思う同

時に敗北を味わった。

「偉大過ぎる父親を持つ者は大変だな」

アリアの呟きにシンは苦笑するしかなかった。
しかし、次のセリフは笑えなかった。

「うん、そう話を聞いてみると会って話してみたいな」
「えゝっ!？」

一人腕を組んでうんうん頷くアリアに絶句する。

「なんだえゝっ!？つてのは。決めたぞ！これから案内しろ！」

「えゝっ!？これから!？」

ダメだ！

姉さんはアインと相性が絶対に悪い！

これは絶対なる自信を持って言える予感だ。

この真面目で硬過ぎる洗練潔白人と会わせる友人、恐ろしく我の強い二人は相性が悪過ぎる。

「そうだ！これからだ!・・・といっても、アッシュ様は城にいるとはいえ御子息に会いに行くにこのままの格好で訪ねては失礼にある。

汗を流して着替えるから、お前も着替えてから私の部屋に來い」

「ええ!？僕も行くんですか!？僕、今は隊舎じゃなく11番街に住んでるんですよ!」

いつの間にか自分も行くことになっている事と、11番街に行くのに11番街にある自分の家に行って一度戻るといふ矛盾にシンは抗議した。

だが、アリアはシンの必死の抗議を聞いても眉一つ動かさずそれが当然とした顔だった。

「それは手紙で知ってる。私はマスターの家の所在を知らんからな、お前が私を連れて行くんだ。だから早く帰れ。そして戻って来い」

この人は一度決めたらもうテコでも動かない。

そう思い、早々と友人と姉の接触回避を諦めたシンは言われるがまま従順に泣く泣く走り出すしかなかった。

「私は最低30分は入浴したいから、40分後にな」

背中に聞こえた呑気な声に、そんなん知るかあ！と叫びたい衝動を堪えてシンは鍛錬場を駆け足で出て行きながら、心の中では一騒動が起きる事を確信していた。

王都の象徴であり、騎士の総本山とも言えるレギンレイブ城には毎日三千人を越える人数が働いている。

外壁や城門の警備、都内巡回などの城外の者達も合わせると一万人という人数が日夜汗を流す事で王都が成り立っている訳だが、その内の約九割の人員が王都外の出身者であり、彼等が毎日寝泊まりする共同宿舎が王都の内周部西側、城に面した6番街にある。

宿舎には兵士と騎士だけに限らず、当然、給仕、執事、侍女に司書や宮廷調理人等と多くの職種の間人がまとまって生活している。ある程度の役職がある者なら希望すれば家族も同居可能な宿舎に住む事も可能であり、その家族も合わせると二万人という大人数で、彼等だけでちよつとした町が成立する。

それらとは違い、レギンレイブ城敷地内の騎士の塔と隣接した五階建ての建物。

その建物の一、二階には王宮勤務当直者用の仮眠と休憩を含んだ直室があり、上階層に隊長クラス以上の隊舎がある。

共同宿舎のように六人共同の団体部屋ではなく、各隊長クラスに与えられるのは団体部屋の者が憧れるプライベート空間。

個室部屋だ。

そして、四階にある個室部屋の一室。

暫く使われていなかったエリア部屋と同じフロアに、ここにも朝から一騒動に巻き込まれる事になる残念な人物がいた。

その部屋は他の個室部屋は元より、一般兵達の部屋よりも質素で飾り気が無かった。

備え付けのタンスとテーブルとベッドと机のみという、明け渡されてそのままの状態に近い室内。タンスの中は収納がほとんど使われておらず、テーブルの上は綺麗に重ねられた書類だけでランプさえ存在しない。

この部屋の持ち主はカーテンさえ付いていない窓からの月明かりだけで仕事をするのだろうか。

一番異様なのはベッドだ。

団体部屋の二段ベッドの者達からすれば、恋い焦がれる一人用の木製ベッドが存在するにも関わらず、その上には、あるべきマットどころかいるべき人物もいない。

しかし、この部屋の主は確かに現在進行形で寝ているのだ。

キイツと木製の部屋の扉がノックも無く開く。

かつかつとブーツを鳴らしながら入って来た人物は寝ている部屋の主を見下ろした。

「せつかくベッドがあるのに。相変わらず床で寝ているんだな」

アリアは部屋に入るなり部屋の隅にいる黒衣の青年に話かける。

部屋の主はベッドに引かれるはずの毛布を直接床の上に引いて壁に寄りかかって寝ていた。

「ああ。床以外で眠るとしたら起きる事が出来なくなった時だけだ」

間を空ける事無く返事をするヴァーリにアリアは眉を寄せた。

「変わらないな、お前は」

アリアの後に続いて若干緊張しながら室内に入っていたシンは、寝

ていると思ったのにさも起きているように喋りだしたヴァーリに驚いた。

実際に彼はさっきまで寝ていたのだろう。

それが部屋に僕達が入って来た時に起きたのか、はたまたその前に起きたのか、いずれにしても彼が常に熟睡は出来ないタイプなのだと思う。

そんなヴァーリの姿に呆れるようにアリアは笑う。

「全く、よくこんな固い床で寝ていられるな。痛くはならないのか？」

アリアは床に敷かれた薄い毛布を屈んで摘みながら訝しげに繁々と眺める。

挨拶も無しにあまりにナチュラルに会話を続けるアリアとヴァーリ。まともにヴァーリと話した事さえ無かったシンは、ヴァーリに挨拶するタイミングを完全失いただ二人のやり取りを観察していた。

「ところで何の用だ。見た通り俺は寝ていたんだがな」

ヴァーリは僕が今も身体の下に敷いている毛布を持ち上げるアリアに若干の苛立ちの視線をぶつける。

これがシンや普通の騎士達なら、平謝りして機嫌を取ることに尽力するだろう。

それだけ、このヴァーリという若き騎士隊長は実力を兼ね備えているからだ。

「こんな固い石床で毎日寝るなんて私には真似出来ないな。身体中が痛く無ってしまう」

しかし、ヴァーリの圧力よりも自身の興味が勝るもう一人の若き騎

士隊長は気付かない。ヴァーリはそんな変わらないアリアに毒気が抜かれて、方向性を変える。

「やれやれ、人の話を聞かないお前も変わらないようだな」

「むっ、相変わらず失礼だお前はっ。私は前々から疑問に思ってた事を口に出したただけだっ。

用件は当然あるっ！

あるが、私の疑問に答えたら用件を答えてやるっつ！」

「勝手に寝てるところを起こしておいてその態度を取れるお前に疑問を感じなくは無いが…

俺はお前の用事など聞かなくても困らん」

「なっ！

わざわざ訪ねて来てやったのにその言い方は無いだろうっ！？」

僕の記憶にある限り、アリア姉さんが血族以外の男性を訪ねてこんな親しげに会話している姿を見たことが無い。

男嫌いという訳ではないが、恋愛事なんか聞いた事も無い。

それに、元々男全てをライバル視していた傾向があったが「百剣」の使い手に認められてからはそれが強まった節がある。

ただ、姉さんがどんな感情かまでは分からないが、その顔にはヴァーリに対する明らかな好意を感じる。

「あまり薦めはしないが…まず、お前の方が痛くないはずだが？」

「ん？どういう事だ？」

「お前は女だなと言っているのだ」

「へっ…？」

「俺から見てもお前はそこらの女よりスタイルだって良いし、立派な淑女だ」

…更に嫌でも気付いてしまった。

明らかにこの男は姉さんをからかっている。

「そ、そうか。改めて誉められるとさすがに恥ずかしいな」

たしかに、姉さんは身内の鼻肩目抜きにしても鍛えてるだけあって無駄な贅肉等なく引き締まっていて、女性にしては長身でスタイルが良い。

おまけに麗人といって良いくらい騎士としても淑女としても品があつて美人だ。

だが！

ダメだ姉さん！

それは巧妙な罠だ！

照れてる場合じゃない！あの獲物に食らいつこうとする蛇のような眼に気付いてくれ！

「ね、姉さん…」

姉さんの肩に手をかけて揺する、が、既にアリアはヴァーリの放たれた蜜に誘われその甘言に酔っていた。ヴァーリは姉さん、という単語におやつ、と一瞬視線をシンに向ける、が、スグに悪魔の微笑

みのよいにニヤリと口の端を吊り上げてシンの発言を邪魔するように畳み掛ける。

「そうだなアリア。

君はとても女性らしくなった…その腰回りといい胴体といい女性らしく…肉付いたな」

ドォーン！と音がした気がした。いやバリーンか？

きっとヴァーリは胸とヒップの膨らみを言っているのだが、直接それを言わず遠回しに指摘している所に嫌味を感じる。

「それだけ大きければ仰向けでもうつ伏せでも痛くは無いだろう」

姉さんの身体は部屋ごと地震でも起きたかの如く全身がガクガクと震え出す。

危機感を感じて両手で肩を強く抑えると、シンの視界まで揺れていた。

「お、おおっお前というやつはっ！！

久し振りに会ったというのに憎たらしいくらいに変わってないなっ！！」

激昂し声を荒げるアリアの身に青い光が灯り出す。

「ちょ、姉さん！こんな部屋の中じゃまずいつて！」

外なら良いという訳じゃないが、少なくとも同じ血族としてアリアが何を発現しようとしているのか分かったシンはそんな冷静な思考

を働かせる余裕は無かった。

「うるさあああいつ！」

「うわあっ！」

シンの身体は青い奔流によって弾かれて壁に叩き付けられた。

アリアから発せられた魔力は凝縮するように右手人差し指に輝きを集め、左手の薬指と絡める。

アリアはその繋がりを振り抜き魔力を切って落とす。

パンツ！とグラスが割れるような音がして指先に集まった魔力が弾け飛ぶ。

それは自分と彼女の血族、ソレイユ家の血統のみが保有する系統固有魔法。

自分が苦勞してる魔法がこんな痴話喧嘩で出されるなんて、シンは心底頭が痛かった。

「こんな事で百剣を出すとは中身はやはり成長していなかったな」

怒り心頭のアリアに対して、最初から己のペースを崩さずにいたヴァーリは面倒臭そうな面持ちで立ち上がる。

180後半はある長身のヴァーリ。

あくまで女性の中で長身のアリアの身長は170センチで必然的に見上げる事になる。

「黙れっ！私が気にしている事をそうやっていつも指摘するお前は悪魔だっ！」

一瞬で手の中に握られた確かな質量のある自身が保有する剣をぶんと振るって正眼に構えてキツと上目遣いに睨み上げるアリア。ヴァーリは視線を受け流しながら肩に立て掛けていた剣の鞘を淡々と腰に括り付けてアリアを見下ろす。

その二人の様子を部屋の隅で怯えてシンは脅えて眺めていた。

姉さんがアインに会う前にもう一人連れていくから着いて来いなんて言うから来てみれば、なんでこんな事になってるの？

顔面どころか耳まで真っ赤になって目尻に涙を溜める姉さんなんて二人で遊んでいた小さい頃以来で、その顔を満足気に眺めてニヤリツと笑みを見せるほぼ初対面といっていいヴァーリ隊長がとても怖い。

とにかく二人を止めないと！

一瞬即発の二人の間に立って二人を止めるべく、シンは勇気を持って二人に近付いて行く。

「あ、あの…ヴァーリ隊長も姉さんはただ隊長を誘いに来ただけで…姉さんも止めましょうよ…ねえ」

しかし、既にお互い相手しか眼に映らない二人にはシンの決死の勇気の仲裁も届かない。

その顔を満足気に眺めてニヤリツと笑みを見せるほぼ初対面といっていいヴァーリ隊長がとても怖い。

とにかく二人を止めないと！

一瞬即発の二人の間に立って二人を止めるべく、シンは勇気を持って二人に近付いて行く。

「あ、あの…ヴァーリ隊長も姉さんはただ隊長を誘いに来ただけで…姉さんも止めましょうよ…ねえ」

しかし、既にお互い相手しか眼に映らない二人にはシンの決死の勇気の仲裁も届かない。

その顔を満足気に眺めてニヤリツと笑みを見せるほぼ初対面といういいヴァーリ隊長がとても怖い。とにかく二人を止めないと！

一瞬即発の二人の間に立って二人を止めるべく、シンは勇気を持って二人に近付いて行く。

「あ、あの…ヴァーリ隊長も姉さんはただ隊長を誘いに来ただけで…姉さんも止めましょうよ…ねえ」

しかし、既にお互い相手しか眼に映らない二人にはシンの決死の勇気の仲裁も届かない。

「ふんっ。俺のささやかな楽しみを邪魔した罪は重い」

「当然だ！知ってて来たんだからな！」

ええ…ヴァーリ隊長の楽しみって寝る事なのっ！？
って、姉さんも確信犯だったの！？

それを聞いてよく考えてみれば二人がぶつかるこの状況は必然だった気がして――

「乙女の敵！ヴァーリめ今日こそ覚悟しろ！」

「その三流セリフも聞き飽きた。やれるものならな」

もう勝手にして下さい。

——窓を開けて、今日も快晴だな。なんて現実逃避に走ったシンは二人を止める事を放棄した。

そういえばヴァーリ隊長がこんな話してるのも初めてだな。

そりゃそうか、二人は英雄の弟子で異例の騎士で同期なんだから。

なんて思って、姉さんのオリアアアという男顔負けの気合いに、乙女はオリアアアなんて言わないよ。と心と背中突つ込みを入れた瞬間——

「シンだったな、逃げるぞ」

——ゴオツと室内に突風が吹き荒れて、シンの体はヴァーリに掴まれたまま塔の窓から風によって中空へと放り出されていた。

「えっ？ええええええええええ！？」

当然人間は鳥のように羽も無ければ、魔法でも使わない限り空を飛べないもので。

生憎とシンは他者とは全く違う魔法を持つ人間で空を飛ぶ事なんて出来やしない。

そして、飛べない人間にとってはこの四階の地上への高さは恐怖に値する。

「ちよっ！？逃げるってそそそっ空にですかあああああ！」

パニックになっているシンは真下じゃなく風に煽られているせいか斜めにゆっくりと降りていく事に違和感を見出だす事が出来ず。恐怖の余り見ることを止めた。

主のいなくなった部屋では、騒ぐ弟を連れて黒衣の男が中庭の方へゆっくりと降りていく様子をアリアは窓から眺めていた。

「む…また、今回も逃げられたか…」

飛んで逃げたヴァーリをアリアが追いかけないと分かっているのに手段に文句を言いたげに大きく溜め息を吐いてアリアは振り返る。

「全く、逃がしては駄目じゃないか」

背後にいたのは背中に四枚の翹というか羽が付いた40センチ程の少女の妖精。

妖精は神霊や神獣といった神格化された存在には及ばないが人間よりも遥かに高霊な存在と呼ばれている。

緑色の髪で瞳がクリクリとした可愛い少女といった外見の少女は羽をパタパタと動かして緑の魔力を鱗粉を撒き散らすように光らせながらアリアの顔の高さに浮いていて、わ〜いゝ（^o^）ゝ、といった感じで満面の笑顔でアリアの顔面に飛び付いた、というか特攻した。

「っ！？おいおい、そんなしがみ付かれては前が見えないぞ」

アリアはむんずと妖精の背中辺りの服を掴み顔からひっぺがす。
離されても尚両手を上下にばたばた動かしてアリアに触れたくて仕方がない妖精さん。

全くキミは相変わらず可愛いな、と小さな顔の顎を擦ると羽を震わせて気持ち良さそうに微笑む姿が非常に愛らしい。

「あの男はやめて私の精霊にならないか？」

「（（、△、）？？？）」

アリアの冗談に声こそ出ていないが抗議するようにぱくぱくと小さな口を動かして、怒っているのかぷうと頬を膨らます姿が尚更可愛らしかった。

「アハハ、冗談だよ」

とはいえ、あの男の文句を言うとまた彼女が起こり出すから口には出さないが、この可愛さはあの男には似合わん！

一人思うアリアは、再び顔面に抱き付いてくる彼女を撫でている内に、『飛べないアリアを置き去りにヴァーリを逃がした的確な逃走手段』に対する彼女への文句なんて罪悪感の無い好意的な無邪気の笑顔でどこかへ飛び去っていた。

外に飛び出した後、思わず僕は目を瞑ってしまった。

やけに地面に落ちるのが遅いな？と、思っただけで恐る恐る目を開ければいつの間にか既に足が着いていた時は嬉しさと若干の恥ずかしさに笑ってしまったくらいだ。

シンは中庭の芝の上に座り地上を実感しながらまだ足が震えてる脚を揉みほぐしていた。

さっきまでいたはずの騎士の塔はここから見えないけど姉さんも移動してるだろうし、ヴァーリ隊長も多分姉さんを待ってるんですよね？たぶん…

「あゝ、良いんですか？姉さんをあのままにして」

中庭の植樹に目を瞑り寄り掛かっているヴァーリにおずおずと訪ねる。

シンの中でヴァーリは寡黙なイメージだったが、先程の二人のやり取りでそのイメージは壊れかけたものの、それはやはり間違いじゃなかった。

こうして二人でいると、まともな挨拶も交わしていない事も相まって若き隊長で間違いない実力者の無言のプレッシャーを感じてしまう。

「フム、そうだな…シン」

「ハッ、ハイッ！何でしょうか！」

そろゝと顔を窺う為に下から顔を覗き込もうとしていたら、急に名前を呼ばれてシンは驚いた。

何を言われるのだろうかと思わず緊張する。

「俺は中庭にいるからを呼んで来てくれ」

「ええっ！？僕がですか！？」

若き上司の命令は勝手に喧嘩しておいて実に理不尽だった。
しかし、隊長の命令に逆らう事も出来ず渋々承知すると。

「それと一つ、頼まれてくれないか。……ああ。それだけで良い」

ヴァーリ隊長の頼み事はさして難しい事では無かったので僕は軽い気持ちで了承して、『ここで待つ』というヴァーリ隊長を置いて姉さんを探しに行った。

意外にもスグに見つかった姉さんは上機嫌でヴァーリ隊長に対しての怒りも冷めていた。

姉さん曰く『アイツと私はいつもあんな感じた』らしいのだが、さつきから思っていた事をシンは口にした。

「姉さん。ヴァーリ隊長ってなんだか変わった人ですね」

「ああ…昔から何を考えてるのか全く分からん」

捉えどころが無い奴だ、と言う姉さん。

今日だけで姉さんは沢山の喜怒哀楽を見せていたが、この時の姉さんの顔は寂しそうだった。

これだけ感情を露にする姉さんとヴァーリ隊長の関係も気になる、
が。

「僕もそう思います」

と、踏み込む事はせず頷くだけにした。

その後、ヴァーリ隊長と合流しても二人はぶつかり合う事も無く、僕はヴァーリ隊長に遅れた挨拶と経緯を説明してから三人で11番街へと向かった。

シン サイド終了

第七話 「来訪者アリア 前編」(後書き)

今回の話からアリアとヴァーリ、二人のエースが活躍してきます。
携帯のレスポンスと変換の勝手悪さにめげず、ノートパソコンを勝
つておけば良かったと後悔しながらも、二人の関係とその実力を皆
様に早くお届け出来るように御頑張ります。

次回予告

当初の予定と変わって二つに分けてしまいましたが、次回は当然後
編です。
アイン達が出てきます。

第八話 「来訪者アリア 後編」(前書き)

謹賀新年明けましておめでとうございます。

新年最初の物語は非常に長いものとなっております。

どうか飽きずに2011年も『精霊騎士物語』、『ヒトというナの』
共々2つの物語に宜しくお付き合い下さい。

精霊と共存する事を選んだ国と精霊を使役する事を選んだ国が引き
起こした戦争により、世界は二つに割れた。
そこで少年達は選択する。

こちらは”精霊と魔法そして人間が当たり前に共存する世界”の物
語です。

お楽しみ下さい。

皆さん新年からすみません。予約投稿後、先程確認したら後半が
投稿されていなかったのので少し付け加えてさせて頂きました。
この二時間の間に読んで下さった皆さんすみませんでした。

2011/1/24 0210

第八話 「来訪者アリア 後編」

久方振りに騎士が生まれた叙任式、あの一騒動だった日から今日で4日立つ。

晴れて正式な正騎士には慣れたもののアインは正騎士になってからまだ何もしていなかった。

いや、正確には出来なかったと言っている。

――三日前

アシエラ王女の御披露目パレードにアインは途中から参加するはずだった。

母親の墓参りが終わった後、パレードのルートである11番街のメイNSTREETに辿り着いた時にアインの身体は急な高熱に襲われた。

原因は4日前の治療魔法の反動だ。

魔法によって治った身体というのは本来かかるはずだった自然治療の時間を取り戻そうとする。それが熱として治した部位に出るのだが、アインの『対魔力抵抗力が低いという特殊な身体を持つ』重症を全快にしまった分の全身にかかる反動と熱量は相当なものだった。

それがドカンと急に来たものだから、おかげで全く動けなくなって道端に倒れてしまい、パレードに見学に来ていた街の皆に家まで運

んで貰うハメになったのだ。

アインが倒れた事は近くにいたルーが11番街に行進してきた騎士隊にいたティアに伝えてくれたおかげで、こうなる事を予想していたルクス司祭の口添えもあって不参加を咎められる事も無く三日間の休暇を与えられた。

寝込んでいる間アインはアシェラの事を心配していた。

無事にパレードを終わらせたのか、国中から集まる国民に視線を受けて大丈夫なのか、この王都の住人は彼女を受け入れるのか。

世間知らずで少しズレたお姫様を心配しながらも大人しくせざるを得なかったアインだったが、そこはアインなんかが心配しなくてもアシェラは立派に王女としてやり遂げていた。

騎士として初の務めをアインとは違って立派に終わらせて看病にやって来たティアが、看病という名の説教を要所に織り交ぜてパレードでのアシェラの威厳ある振る舞いと住人の反応を熱く語ってくれた。

ティアの話によると式典とその後のパレードだけでアシェラは小さく可憐な姫として王都中の住民の心を掴んだらしい。

アインは自分が参加できなかった事に一抹の寂しさを感じながらも彼女の成功の報に安心して休息に専念する事が出来た。

ちなみに、

アインが倒れたその日の内にアインの見舞いにやって来たシン。彼は正騎士になった初日に寝込んでいたアインをひたすら馬鹿にしていた。

アインは言い返せる状態じゃなかったから反撃出来なかったが、

叙任式のパーティーで酔い潰れ、眼を覚ました時には王女搜索で無人の会場だった為王女失踪騒動を知らずに一人凹んでいた』奴を哀れんだ眼で見ていた事は誰も知らない。

ともあれ、アインはここ三日間が本当に辛かった。

高熱で汗が吹き出し頭がグラグラして、全身の血管をドロドロの鉛が巡っているようにダルく動けない、なのに身体は食事をひたすら求めるという状況。

それでも苦痛なのに、特に苦痛なのは失神も出来ない程度の鈍痛が続くため全く寝付けないという事だ。

寝ることが出来ない三日間がどれだけ辛いかわかるだろうか？

身体もまともに動かせず、暇潰しに本を読む事も出来ず、72時間もベッドの上で眠れず過ごす時間。

普通の状態なら暴れてもおかしくなくくらいのストレスだったが、そのストレスをどうする事も出来ず、アインはただひたすら熱が引く時を待った。

——そして現在。

一人で住むには少し広過ぎる11番街の西の丘にある屋敷。
その二階の南に位置した部屋がこの屋敷の現家主、アインのいる部屋。

けつして広くない室内。

窓から射し込む光が板張りの床を程好く暖め室内を明るく照らす。空いている部屋は無数にあれど、アインはこの部屋から別の広い部屋に移ろうと考えた事は一度も無い。

窓を開ければ11番街を見渡せる陽当たりの良いこの部屋の眺めはちよつとしたアインの自慢だつたりする。

壁際の棚には人形や小物が所狭しと並んでいて、日に日に増幅していく部屋の主に似合わない可愛らしいそれらは主に断りも無しに勝手に飾つていく少女の行為によるもので、もはや注意も諦めたといえる幼馴染みの趣味だ。

いつの間にか集められた雑貨も月日が積み重ねられればそれなりに愛着も湧いている。

窓際にある安物の小さなテーブル。

その上に置かれた鞘と半ばから刀身が砕けた柄だけの剣。激しい戦いの後を告げる剣の残骸が日の光を反射していた。

穏やかな朝の陽射しは部屋の中央のベッドで眠る者も照らし出す。

光を浴びても漆黒の髪は墨のように黒く、寝ている時はやけに幼くも見える少年の顔立ち。

まだ大人へと仲間入りし始めたばかりの少年がこの家の現主と言つて良い。

今では唯一人の住居人。

やっと昨夜に反動の熱も引いた現家主アインは三日振りの極楽快眠を貪っていた――はずだが、朝の陽気とは裏腹に苦し気に唸っていた。

「うっ、う、苦…しい」

今の自分の状態はどこがおかしい。

昨夜に苦痛からの解放を実感しながら心地良いまどろみの中に落ちていったのは覚えている。

熱がスーッと引いていき、身体が羽のように軽くなる感覚がして自然と意識が夢の中に落ちて行く瞬間は幸せだった。

それが…何故にこんな息苦しい？

というか、何故にこんな身体が重い？

昨夜までの三日間は自分で自分の身体がよく分からなかったが今は分かる。

熱はもう無い。

治癒の反動は完全にもう収まったはずだ。

何回も経験があるから分かるが、一度熱が引けば治癒を受けた箇所が完全に馴染み再び熱を持つことは無いのだ。

それは間違いない。

なら、寝過ぎたか？

いや、それも無いな。

身体がまだ睡眠を求めているし、現に眠くて瞼を開ける気にもなれないんだから。

「んん…なんだこれ？」

瞼を閉じたままもぞもぞと毛布の中を弄っていく。

すると細く柔らかい絹糸の束の様な物が指先に当たった。

いつまでも触っていたくなるような上品な触り心地は球型から伸び

ているようで随分と長く仄かに温かい。

頭に疑問符が浮かびながら、半覚醒のままこの物体が何か情報を更に得ようと掌を這わしていく。

すると次はモツチリとした感触だった。

例えるなら焼きたてのパンの中の生地を触ってるような感じ。突っついてても、摘まんでも温かくてむにむにして気持ち良い。それをちよつと強く摘まんでみようと思った時だった。

「ウウ〜」と、まるで小動物の威嚇のような唸り声が聞こえた。幻聴かとも思ったが、再度ソレを触ると今度は、

「ンム…」

なんて声が聞こえた。間違いなく生き物の声。

「なっ、なんだ？」

目を開けると視界の前の毛布が不自然にこんもりと盛り上がっている。

アインは中を確認する為に勢い良く毛布を捲り上げる――

「…えっ？」

――そこには少女がいた。

毛布が捲り上がった瞬間に視界に飛び込んだのは眩いばかりの白銀。そして、驚くべきことに自分の腹の上には銀色の髪をした女の子がうつ伏せで覆い被さるように眠っていた。

純銀を散りばめたような光沢のある細い白銀の髪。

長いまつ毛をした端整で可愛らしさと綺麗さを共有した顔。真っ白な薄手のワンピースは室内用の普段着としてのネグリジェだろうか。

「・・・・・・・・」

間違いなくこの国の王女様、アシェラバーネットレギンレイブだった。

王女が自分にしなだれてスピスピ眠っている。

その夢にも出ないであろう光景に口をあぐりと開けたまま停止すること数秒間——やがて時は動き出す。

「な、なんで俺の部屋につ！？いやいやまずなんでベッドに！？しかも気持ち良さそうに寝てる！？」

せめて野良猫やらだつたら可愛いものの、まあ横向きの寝顔は小動物等とは比べ物にならないくらい可愛らしいが、って違うな。

息苦しさの件の元凶は頭の上でアインが一人動揺していても全く起きる事無く気持ち良さそうに眠っている。

「お、おい・・・起きろよ」

俺のお腹と自分の腕を枕にして斜めに覆いかぶさる形で寝ているアシェラの肩を揺らす。

お腹の上から彼女をどかせば良いのだが、しっかりとシャツを握り締められていてずらすことも出来ない。

動揺していたアインは幸せそうに眠っていて目を覚ます気配が無いアシェラを眺めているうちに徐々に落ち着きを取り戻していく。

ただ、冷静さは取り戻しても胸の動悸は収まりはしなかったのだが。

——いくら自分が爆睡していたとはいえ彼女が毛布の中に潜り込まれても気付かないなんて騎士としては失格だな

なんて頭の片隅で思っていると、ほんの少しだけ悪戯心が湧いてきて彼女に触れる手が肩から頬へと伸びていく。

俺は彼女の柔らかな頬をぐいっと痛く無い程度に摘み上げた。

「さっき触ったのは頬だったのか」

なんて一人で納得しながら頬を摘み上げると、うつゝとさっきと同じ唸り声を上げるアーシェ。

眉間には嫌そうに皺が寄っている。

しかし、彼女はそれでも起きる気配は無かった。

「起こすべきか、起こさないべきか…それにしても軽いよな」

お腹に乗ったアシェラは腹部を圧迫する重荷には違いない。

しかし、人が乗っているとして意識してみると彼女の身体はとても軽く感じた。

起こすかどうかどうしようか、とアインは唸り声を上げるだけで起きないお姫様の頬を抓ったまま悩んでいた。

ダダダダダッ

「な、なんだ・・・？」

唐突に何かが二階に駆け上がってくる音がした。
それはこの部屋に近付くと

バンッ！

「・・・へっ・・・誰？」

ドアを蹴り破って少女現れた。

それも全く見たことの無い少女だった。

まずおかしいのはその外見。

白と黒のツートンカラーのエプロンドレスは給仕にも見えるが、給仕よりは直観的に侍女に感じた。

侍女服を着たボブカットの13か14といった幼い少女は酷く焦りに満ちた表情で部屋を見渡す。

「姫様っ！・・・っ!？」

ベッドの上で唸り声を上げる姫様を見つけて一瞬ほっと安堵の表情になった後、その頬を現在進行形で抓ったまま固まっていたアインを睨み付けた。

見知らぬ少女のアインを睨む視線は親の仇を見るような目だった。

「こ、この下郎がつ！姫様の神聖な柔肌に触れるなんてっ！」

その言葉で気が付いた。

この状況…。

毛布を床に投げ捨て、ベッドの上に横たわる自分。

その身の上に寝ている王女の頬を触れている姿はどう見えるのか。意識してみれば胸に暖かく柔らかいものが当たってる感触がする、甘く柔らかい女の子特有の匂いがしたがこれ以上意識すると色々almazinなのでアインはそれらを努めて意識外に追いやった。

「ちよっ！ちよつと待て！俺は彼女を起こそうと・・・」

エプロンドレスにポケットに両手をつ込み殺気を撒き散らす少女。その行動は早かった。

ポケットから抜かれた両手、その全ての指の間にはのナイフとフォークが握られていた。

「そこを動かなくなっ！！」

叫び声を上げて少女は身を翻すと片手に四本ずつ、計八本をアインに向けて投擲した。

「うおっ！」

迫るナイフを避けようと身体を起こす、が――

「んんっ？」と、唸り声を上げ寝惚けるアシエラが、まるでこの抱き枕は私のだ！と主張するように身体を強く抱き締められ動かなかった。

シュッ！ダダダ！

少女が投げたナイフとフォークはアインに一本も当たらなかった。身を起こそうとベッドに置いた右手、その広げた掌の指の間に驚異的なコントロールで八本が突き立っていた。驚愕するアインの背後に一瞬で回る少女。

「動くなと言った。身動き一つ許さない」

「は、はい」

少女の気迫に思わず頷くしかなかった。

メイド姿の少女は半身だけ起こした俺の首に背後から手を回して首にナイフを当て、眼球の前でもう片方で持った切り盛り用フォークをちらつかせている。

「姫様は3日間一睡もなされていない。だからこの粗末なベッドを譲り渡せ」

眼前にキラリと光る大きな二又フォークの先端。

耳元で囁かれる声と首筋に感じる食卓用ナイフのギザギザの感触。メイドによる完全な脅迫だった。

「お前らなんなんだよ一体。俺の至福な一時はどこに…」

アインは涙こそ流さないものの心の中で些細な幸せを横取りされた不幸とその理不尽さに滝のように泣いた。

そして、本来の朝を告げる人物が混ざり不幸は更に加速する。

——コンコン

と、階段を上る音がした。

その歩調は我が家のように落ち着いている。

段々近づく足音に汗が吹き出て意識が一気に覚醒した。

「げっ！？ヤバい！こんな所見られたらっ！おいっ！頼むから二人共ベッドからどいてくれ！」

「こら！姫様に触るな無礼者め！突き刺すぞ！」

「うるせえ！こんなとこ見られたらお前もアイツに殺されちゃうぞ！ほらっ！起きろよ！」

$$\begin{array}{c} \neg \\ Z \\ Z \\ Z \\ \neg \end{array}$$

慌てふためくアインが二人をベッドからどかさうと奮闘するも名前も知らないメイドは聞く耳を持たず、アシエラに至つては少しも起きる気配さえない。

胴体にはアシエラが、背中にはメイドがみついた状態では身動きも取れず逃げる事も出来ない。

そこへアインにとっての目指し時計――

「アイン入るわよ。調子はど・お・」

幼馴染みのティアが部屋に入って来た。

ティアはベッドでもみくちゃになっているアインらを視界に納めるなり固まってしまった。

•
•
•

⌈
•
•
•
⌋

⌈
•
•
•
⌋

アイン、ティア、ファイナの視線が交わる。

視線が絡み合い沈黙する三人。

「んんっ
…
Z
Z
」

と、夢の中から帰らない一人。

「よ、よお」

沈黙に耐え切れずアインが口にする。
入り口でぼかんと口を開けたまま固まっているティアにアインが声をかけるがティアは全く動かない。
アインは冷や汗を滴ながら痒くも無いのに頬を掻いて自嘲気味の笑みを浮かべた。

ベッドでアインがまだ寝てると思って入って来たティアは現状、いや惨状に中々思考が追いつかなかった。
ベッドの上では上半身だけ起こしたアインを女の子二人が抱き締めている。

背中から首に手を回すメイド少女とその上半身には白い薄手のドレスを着たお姫様がすがり付いていた。

どう見ても二人の少女がアインを抱き締めているようにしか見えない。

「こ、ここはアインの部屋…よね」

目頭を揉む様にしてティアは何度も辺りを見渡していた。
ティアにとってこの部屋は正にカオスだった。

「ハハハ、ナニヲアタリマエノコトヲイツテイルノカナ」

片言で話すアインを無視して現状を理解する為にティアの思考は答えを探す。

何度部屋を見渡してもティアの眼には女の子に前後から抱き締められたまま動かない（実際は動けない）アインが映る。

「ふふっ、そっかあ…」

何かを閃いたのか、それとも何かがキマってしまったのか一人納得をして不気味に笑うティア。

どんっ

「ひっ！」

たった一歩ティアが歩を進めた。

それだけでアインはだらだらと流れる汗が止まらなかった。

口から漏れる悲鳴に、ガクガクぶるぶると震え出す身体は長年この身体に染み込ませた・・・叩き込まれ続けた、この先の出来事に対する恐怖によるものだ。

怯えるアインを見詰めるティアが辿り着いた答えは――

「アンタわあっ！！！」

「ぶるああああっ！」

風より速く踏み込んだティアの拳がアインの顔面に突き刺さった。横っ面にめり込んだ拳が振り切られる。

ベッドからきりもみ状に吹っ飛んだアインは部屋の壁に叩き付けられた。

「朝っぱらからなんてことしてんのよアンタはっ！！！」

湯気が出そうな程顔を真っ赤にしてティアが叫んだ。

ベッドの上に男女がいる時点でする事は決まっている。

例えばそれが未遂であっても、女からの仕業だとしても、ティアはアインを責めただろう。

床で眼を回すアインに鬼の形相で向かっていくティアの横では、ア

インという枕を無くしたアシェラが目を覚まし始めていた。

「ん…。ふああ、おはようファイナ」

「おはようございます姫様。」

主の香気な目覚めにベッドの上からいつの間にかベッド脇に移動していたメイドが丁寧に頭を下げる。

二人の朝のやり取りは一連の騒ぎが嘘のように爽やかに行われていた。

アシェラはゆつくりと背伸びをしてベッドの上に女の子座りをする。眠そうに目を擦り辺りを見渡すと、いつもの目覚めと違う面子に眼を丸くした。

「ん？あなたはティアブリギット？あれ？なんでアインが床で寝てるの？？」

床で伸びているアインを見て可愛らしく小首を傾げていた。

正騎士になって四日目。

快適になるはずだったアインの朝はこうして始まった。

木造の簡素な四人掛けテーブルが置かれた室内。

一階にある客間にティアの一撃で気絶させられたアイン共々、ティアとアシエラとメイド少女はいた。
俺がベッドから吹き飛ばされた後にお姫様は一回目覚めたらしく、自らの足で客間に来たらしい。

気絶から眼が覚めたアインは腫れた頬を抑えながらティアが淹れた紅茶を頬に染みて痛そうに啜る。

「で、どういう事なの？」

一応そういう行為は無かった事を確認したティアが一連の朝の出来事を濃紺の侍女服を着たメイドに問いかける。

一人を除いた三人が座っているのは四人掛けのテーブル席。
ティアが俺の隣、お姫様は俺の向かい側でその隣は空席だ。

メイドは俺の向かい側でうつらうつらと半分寝ながら座っているお姫様の後ろに立っていた。

メイド少女の名前はファイナというそうで、給仕ではなくやはり侍女らしい。

つまりはアシエラの世話係だ。

ちなみにファイナは意地悪で立たせているのではなく、自分からそうすると言ったからだ。

なんでも、侍女が主と同じテーブルに着くわけにはいかない、らしい。

「私がここに来た理由は昨夜まで御多忙だった姫様を起こそうか悩みましたが、来客もあるため今朝方私が姫様を起こしに寝室に伺ったところ」

「あゝ、また城を抜け出した訳か」

ファイナの言葉に叙任式の日のアシェラの行動を思い起こし相槌する。

たしかあの日も彼女が城を抜け出したせいで大騒ぎになったと聞いている。

またかゝと思っていたらファイナがジロツと睨んできた。

「あなたは黙ってて下さい！あなたに話した訳じゃありません！」

「な、なんだと！」

「あなたとは口を聞きたくありません！…屑野郎」

ギャンギャン吠えた後にファイナはつゝん、とアインからそっぽを向く。

しかし、ぼそつと呟いた後半の単語はしっかりと聞こえる声量だった。

ファイナの変わりように驚いて眼を点にするティア。

「まあ。ちよつとアンタは黙ってなさい」

じゃないと話が進まないわ、とティアはアインに眼で語る。

「そうです！あなたは黙ってて下さい！」

「ぐっ…」

色々と言い返したかったが多勢に無勢。

ティアのお母さん、ソフィアおばさんからの教訓で基本的に女は強く、男は内輪では弱いのだ。

それにさっき思ったが、このファイナという少女は何故かティアに對しての対応は素直だった。

なら、ここはティアに任せよう、そう判断して俺は口を噤んだ。

しかし、分からない。

俺とファイナは間違いなく初対面だ。

何故にこんな敵視されなきゃならないんだ。

「それで、シェーラ様とファイナは何でここに来たわけ？」

「あ、はい。先日姫様が11番街に来てからこちらのお屋敷に来たことを聞いていましたので王宮以外で一人で来るのはここではないかと思ひまして、そしたら…その野蛮人の寢床に姫様が」

「なるほどね。結局はアンタに原因がある訳ね」

ジト目で睨んでくるティア。

そんな眼で見られても完全に濡れ衣だ。

俺が目覚めた時には既にアーシェがベッドにいたんだから。

「さつきも話したけど俺が聞きたいくらいだ。俺だって驚いてるんだから」

「はあっ、結局アシェラ様に聞かなきゃ分からないか」

お手上げのジェスチャーするアインを見て溜め息を吐いてテーブルに肘を着いて頬杖を着くティア。

アシェラはいつの間にかテーブルに突っ伏すようにして眠っていた。

「幸せそうに眠ってるわね」

「ああ。何の夢を見てるんだかな」

ティアは両手の上に顎を乗せてアシェラの寝顔を眺める。

「ふふ、可愛い寝顔。正直、こうしてアシェラ様の寝顔を見れるなんてね。なんかどうでも良くなってきちゃったわ。姫様が良ければいいんじゃないかな？」

「そうしてくれ」

一番大騒ぎしていたティアが良いと言うなら話は終わり。相変わらず熱し易く冷め易いティアに若干呆れながらもアインも同意する。

「少なくとも姫様は三日振りの睡眠なので、正直、こんなテーブルではなく王宮の寝室で睡眠を取って貰いたいのですが…先程のベッドといい、今といい、こんなに幸せそうに寝ていられては私はとても起こすに起こせません」

「ん？それじゃさつきは俺が姫様を起こそうとしたから、姫様を寝かしてあげたかったからあんな事したのか？」

あんな事とは、ナイフを投げつけたり突き付けたりの事。怪訝な顔で疑問を投げ付けるアインにファイナはぶすっと膨れっ面になっていた答える。

「そうです。というより起こそうとした事も触れる事も、です」

当然の事です。と付け加えて言うファイナに愕然とした。だってそうだろう？

いきら相手が姫様とはいえ起こすどころか触れるだけで殺されかけたんだぜ？

「勘弁してくれ。俺は被害者だっつゝの」

溜め息を出してガツクリと項垂れているアインの隣で、座っていたティアが立ち上がる。

「さて、と。まあ、アンタも回復した事だし、朝ごはん食べるでしよ？」

アインはいつもティアの家、ウエングス家で家族に混じって一緒に朝食を食べている。

長年それが当たり前になっていて、ティアがアインを起こしにやってくるのは、起こさないといつまでも寝ている為に家族がいつまでもご飯を食べられないからだ。

こうしている間も、オバサンやルー、特にマリアは食事に手を付けずアインが来るのを待っているだろう。

そう考えると、三日振りの睡眠にしては多少寝足りない気もするが行かない訳には行かない。

「ああ。さすがに二度寝する気も無くなっちまった。頼むわ」

魔法の反動で三日間寝込んでいる間、血肉を作ろうと身体が欲しただけで食欲だけは普通以上にあつた為、食事は沢山取っている。

だが、体調不良でベッドの中で大量に詰め込むだけの食事なんてものは美味くは感じなかった。

体調も戻った事だし、今日はどんなものでも美味く感じるだろう。

それが楽しい食事なら尚更だ。

期待に胸が膨らみアインがティアに続き席を立つ。

いつもの調子が戻って来た二人はもうさっきまでの出来事はどうでも良くなっていた。

アインもティアに負けず劣らず気持ちの切り替えは早いのだった。

「それじゃウチに行きましょう。何だか朝から大声出しちゃったから

「お腹が空きました」うん。私もお腹減ったわ」

「ああ。俺もやっと普通に食べれる…よ」

「………ん？」

アインとティアの日常会話に疑問が浮かぶ。

今誰かが割り込んだな、と思って二人が振り返る。

「お腹が空きました」

両手をお腹に当てて眼を覚ましたアシエラがいた。

瞳がやけにキラキラと輝いているのは朝日のせいだろうか。

ご飯の会話の最中に眼を覚ます辺り、彼女の食に対する異様な執着が窺える。

アインは嫌な予感がした。

予感というより悪寒。

「スグに食事を用意するか私に厨房を明け渡さない!!」

王女の要求に答える為にファイナがナイフを抜いていた。

「またかつ！どんだけナイフを持ち歩いてんだよ!？」

ナイフを振りかざしアインに飛び掛かるファイナ。

予想通りの展開に頭を抱えたかったアインだが、頭よりも今はナイフを押さえる事で手がいつぱいだった。

「うう、お腹が・・・ご飯」

「姫様が食事を所望なさっている！早急に用意しろ屑野郎！」

「それが頼む態度か！こんな状態でどうしろってんだバカメイド！」

お腹を撫でるアシエラに、取っ組み合いながら罵声を上げる二人。

「うゝん、この人数になると私の家じゃ狭いだろうし・・・どうしよう」

順応性が高いティアは止める事も騒ぐこともせずゆっくり椅子に座りなおして三人を眺めながら悠長に朝食をどうするか考えていた。

ティアは二人にご馳走するにも自宅に姫様達を連れて行っても席が足りない、というか誰かに床で食事させたくは無い。という理由で朝食をどこで食べるか悩んでいた。

「ウエングス家から場所を変えるなら、せつかなので外で食べましょう」

悩むティアにアシエラが提案した。

姫様が外で食べる事にファイナが許さないだろうと思ったが、以外に彼女は何も言わなかった。

「なら広場で朝食にしましょう。準備して持っていくわ」

そう言つて、姫様との朝食を当然の如く受け入れていたティアがやり取りを締め、四人の朝食は反対意見も無く11番街の中央広場でする事になった。

今日も威勢の良い喧騒が響く11番街の中央通り。

早朝の大通りはお祭り騒ぎの様に騒がしい。

通り沿いの店は勿論の事、通りに所狭しとテントや敷物を引いた出店が並ぶ朝市があるから尚更こつた返している。

朝市は住民の食卓を担う台所だ。

野菜、肉、魚、果物、その日早朝採れた様々の新鮮な食材を求め、住民のその日の食事を彩る材料となる。

朝市は食べ物だけなんて決まりは無いし、いつも同じ品が並ぶとは限らない。

雑貨や家畜、武器に布地、食器や家具も売っている。

建物としての店があるのに出店を出す者、店舗を持たずに朝市の出店だけの商人、他国から定期的に出店を開きに来る行商、たまたま今日だけ開く者等11番街の朝市は毎日が変化する。

だから掘り出し物や珍しい品々が売られてたりもするので、通りにはそれらを求めて内周部の街からの商人や見に来るだけの貴族等も

いた。

広場に向かって中央通りの人混みを縫うようにアイン、アシェラ、ファイナの三人が歩いていた。

街の住人としてアインは朝の活況の中を歩くだけで何だか元気が湧いてくる。

ティアは四人分の食事を取りに一旦家に帰った為に今は別行動中。さつきまでファイナが準備に帰るティアを手伝おうと付いて行っただけなのだが、ティアに『スグにやつつけちゃって（食事を）行くからファイナは二人を見張ってて』と言われて広場に向かおうとしていた俺達と合流した。

「あんまり離れるなよ」

「はい」

この光景に慣れているアインがすいすいと歩き後ろを確認する。人混みに戸惑いながらもアシェラは楽しそうだった。

「ボソッ…むしろあなたは姫様から離れて下さい」

「ちゃんと聞こえてっからな！ぎりぎり聞こえる声量で言うなやクソチビメイド！」

「ボソッ…姫様に聞こえず馬鹿にだけは聞き取れる範囲で言ってるのです。そんな事も分からないなんて無駄に大きな図体のせいで脳に栄養が足りないんですね」

「分かった！！俺に喧嘩売ってるんだな！？そうなんだな！？」

「ボソッ…今更ですか。見た目通りな知能ですね」

「このつくソガキっ！…あれ？姫様がいねえ…」

「アイ…ン！ファイナ…！これ今日だけしか売りに出ない特別品なんだって」

「姫様！そんな所に！それは商売の常套句です！今日どこるか明日も明後日も売っています！」

ヒートアップするアインの声も、通りの賑やかな喧騒と人混みでは容易く飲み込まれてしまい気にする人は誰もいなかった。

ふらふらと次の行動が全く読めないアシエラを後ろに控えたファイナが窺める様は世間知らずなお嬢様と侍女にしか見えなかった。

今、アシエラは最初に俺と11番街で会った時に来ていた白い外套を頭までスッポリと被っている。

そのままアシエラを街に連れ出そうしていた俺に合流したファイナが激怒して外套をアシエラに着せたのだ。

とても納まるとは思えないがエプロンドレスのポケットから外套を取り出した時には驚いたが、ファイナが俺に激怒した理由にも驚いた。

王女の姿がバレる事に怒っているのだと思ったが、意味合いが少し違った。

「そうだよお嬢ちゃん！その君のご主人にこの切れ味の良いナイフとフォークはピツタリだ！さあさあ！」

「なら代わりに私のこの銀のナイフであなたの足を少しずつ切り落として上げましょう。貴方みたいなウドの大木も私と同じ目線になれば私を小さいなんて言わない」

「……。」

客引きを一蹴し、その営業スマイルを一瞬で凍りつかせた妖艶に微笑するファイナ。

——小さいのを気にしてるんだ…。

今の台詞も俺が寝ている所に乱入して来たのも淑女としてどうなんだ？と突っ込みたかったが、それよりもファイナの背丈に関しては触れないようにしようとやり取りを見ていたアインは声に出さず誓った。

きつとこんな人混みでもナイフが飛んでくる。

彼女はきつと遠慮しない性格だ。

きつと誰かに当たっても「当たる人が悪いのよ屑野郎！」ぐらいは言つてのけるだろう。

怯える住人に同情しながらもアインは歩を進めていく。

少なくとも一緒に歩いてる人物がアシエラだというのはまだ誰にもバレていない。

街の住人も、また（・・・）姫様が護衛を連れずに城を抜け出してこんな朝方に街を歩いているとは思わないだろう。

フードをとらずに顔を隠していればまずバレないだろう。とアインが考えていた時だった。

「おお！アインにシエーラ様じゃねえか！」

「いつ！？」

メインストリートを歩いているアイン、アシエラ、ファイナ一行に一際大きな声が掛けられた。

三人が見ると屋台のオツチャンが鉄板の上でソーセージを転がしながら手を振っていた。

「よおーアイン！体調は良くなったようだな！」

「ちよっ！オツチャン！まずいつて！」

そういえばオツチャンはこのフードを被って街を歩いてる時の姿を目撃していた。

陽気に手を振るオツチャンに急いで近付いて、アシエラがいる事を黙るように耳打ちして説明する。オツチャンはスグに察してくれた。下世話な話が好きなオツチャンだが、オツチャンはアシエラ自身の人格を気に入っている。

今後アシエラがこうして御忍びで街に訪れる可能性も考えて気付いても彼女が自由にいられるように協力してくれる事を快く承諾してくれた。

他の街は知らないが、ティアヤルー、ソフィアオバサンに寝込んである間に聞いたが、この街の皆はアシエラ王女が心優しく親しみある王女として認知している。

噂としてだけ知っていたシエーラ姫の存在はこの街では彼女個人が今では英雄に並ぶ程の人気があるのだ。

それは叙任式の日御忍び騒動が噂として広まり、彼女がどれだけ外の世界に出たかったかへの同情であり、街を焼く業火の中心地へ駆けていく彼女の姿を目撃した者達からの尊敬であり、追悼式で彼女が見せた愛情に対する崇拜だ。

城だけに長く住んで世間を知らない彼女に同情している。

街を焼いた精霊に向かった彼女の勇気を知っている。

亡くなった者達へかける彼女の愛情を知っている。

11番街にとってアシエラ王女は只の国のシンボルでは無い。
愛すべき王女なのだ。

「具合は良くなったのかい？」

「ああ、もう大丈夫だ。運んでくれてサンキューなオツチャン」

「いやいや急に倒れた時は驚いたが元気そうで良かったよ」

アインと会話しながらもオツチャンは手を止めず動かしている。

鉄板の上で肉詰めが転がる度に溢れた肉汁が熱に焼かれてじゅうと香ばしい音と匂いが通りに拡がっていた。

「おはよう！今日もとても美味しそうです！」

「いやっはっはっは！そんなじゃ良かったら食べていくかい？」

「良いんですかつ！ぜひっ！」

朝の挨拶を交わしながらトテテと匂いに誘われて鉄板に近付いていくアシエラ。

フードの中では視線が既にオツチャンではなく鉄板の上にロックオンだった。慣れた手付きでソーセージを串に刺していくオツチャン。その様をじっと見詰めるアシエラには王女としての威厳は全く無く、行儀良くエサを待つ犬のようだった。

「ほいよっおまっとさんっ」

「わあっありがとうっ」

鉄板越しに差し出されたソーセージに眼が輝くアシエラ。

眼のキラキラ度が半端無い。

アシエラが受け取ろうと串に手を伸ばす。

だが、その指が串を掴む事はなかった。

「姫様お待ち下さい！」

「あつ……」

アシエラの指が串を掴む前に素早く伸びてきた手によって串は横から奪われてしまう。

オツチャンが持っていた串を先に掴んだのはファイナだった。

「姫様にどこの誰か分からない方が作った物を食べさせる訳にはいきません。毒が混入されてる可能性があるかもしれませんから」

「何て事を言うんですかファイナ！それを返して下さい！」

訝しげにオツチャンと奪い取った串に刺さったソーセージを見比べるファイナ。

無視されたアシエラは泣きそうになっていた。

「おいおいおりや毒なんて……」

ファイナの疑う視線に戸惑うオツチャン。

良かれと思った善意の行動に対して見知らぬ少女に悪意の疑いがかけられてるんだ。

戸惑いを感じるのも無理はない。

普通なら激怒するだろう。

ファイナの外見が少女のせいもあるが、怒らないのは優しいオツチャンの美点だ。

だが、寛容なオツチャンが怒らなくても、家族といえる11番街の住人に向ける疑いをアインはとも寛容出来はしない。

「なら、毒が入ってるかどうかお前が食ってみりゃ良いじゃねえか」

「あなたに言われなくてもそうします!!」

アインの挑発とも言える台詞に反発するように声を荒げてファイナはソーセージにかぶりつく。

隣では口に吸い込まれていくソーセージを取り返そうと手を伸ばしかけていたアシェラが寂しそうに声を漏らしていた。

それに気付かずファイナがソーセージを一噛み、二噛み噛み締める度にファイナの表情は驚愕のものへと変わっていく。

ソーセージを咀嚼していたファイナの目が驚いたように大きく見開かれた。

「んぐんぐ…主人!」

真剣な表情でオツチャンに向き直るファイナ。

ちゃんと飲み込んでから喋る時点に育ちの良さを感じる。

「ここにある立て札が価格ですか?」

「そ、そうだが・・・」

「やはりそうですか。あなたの作る品は確かな味と品質でした。特に塩と香辛料の加減が絶妙です…」

その言葉に居住まいを直していたオツチャンが胸を撫で下ろした。

アインもファイナの賛辞にほっとしたのだが、当のファイナは立て札を指差して眉間に皺を作っていた。

「しかし!この材料でこの価格なんて!あなたは商売をする気があるのですか!?!」

突然『納得がいきません』と地団駄を踏んでファイナが立て札を指す。

立て札には『ソーセージは一本、30ベニー』と書かれていた。
一人憤慨するファイナにアインは今度は価格で文句かよ…と溜め息を吐いた。

王都の通貨、レギンレイブ通貨では、

銅貨が一枚10ベニー

銀貨が一枚1千ベニー

金貨が一枚1万ベニー

白金貨が一枚100万ベニーとなっている。

一般階級の月給が10万〜15万とされる。

アイン、ティア、シン達正騎士の初任給が20万ベニー。

オツチャンの作るソーセージは低価格で庶民にとってとてもありがたい価格なのだ。

オツチャンはしばし呆然と頬を膨らまし不機嫌なファイナを眺めていた。

「お嬢ちゃん… たった一口で材料まで分かったのかい？」

「ええ… この味は… はむっ、んむんむ」

再びソーセージを食べるファイナ。

勿論それを見ていたアシエラが更に泣きそうになったのは言うまでもない。

ファイナは味を吟味するようにゆっくりと噛み締めて自身の推測に納得するように頷く。

「やはり間違い無いですね。これはルーザンブルグ産の特級鮮肉の豚肉に全て水の国の香辛料を使用されています。」

それに油は聖地で採れたオリーブによる物ですね」

口に含まれた物を飲み込みファイナは断言した。

オツチャンはファイナの優れた味覚に感心していたが、対照的にファイナは不満そうだった。

「こんな材料を使っているのに価格が30ベニーって……陸路にしても海路にしてもたった銅貨三枚ではあなたの取り分なんてほんの僅かも無いのでは？」

「そうだな。確かに材料は嬢ちゃんの言う通りだ。でも、水の国の友人が香辛料を運ぶついでに魔術で肉も香辛料も鮮度を保ったまま安く仕入れてくれるんだ。油は妻の巡礼のついでさ」

「安く仕入れているなら、尚更価格を上げるべきです。もっと価格を上げても客足は絶えないと思われます。内周部の街なら三倍の価格でもこの味ならば十分通用するでしょう」

オツチャンに説き伏せるように話すファイナの助言ともとれる話を聞いてアインはファイナの憤りの理由を理解した。

ファイナは一級品の材料を使い味も一級のソーセージなのに破格過ぎる価格で提供するオツチャンが理解出来ないのだ。

オツチャンの商売は、得をするのは赤の他人だけで本人は苦労しか残らない。

「良いんだよ。おりゃーこの11番街で生活出来るだけの金は貰ってるし、この場所が好きなのさ」

儲けを度外視したオツチャンのおよそ商売人とも思えぬ台詞にファイナは観念したように溜息を吐く。

「呆れました。とても商売人とは思えませんね」

小さな頭を下に向けて軽く振った後に再び頭を上げたファイナには
憤りも無く人当たりの良い笑顔で語りだした。

「しかし、この味は姫様もお気に召すでしょう。お人好しついでに
周りで王宮へ品を仕入れて頂けませんか？」

「お嬢ちゃん。おりゃゝは…」

説得を諦めたファイナはオツチャンに違う案を出す。

この街から移動して商売を移動する気が無いオツチャンはどう断ろうか少し戸惑っていた。

「ですが…。価格はこの価格で御願います」

ハッキリ断れないオツチャンがお人好しな事を理解していてファイナは畳み掛けるように二の次を喋らせず言葉を繋いでいく。

「私達がこの街に足を運ぶ変わりに御願いたいです。その代わりに王宮までの路銀として一本辺り90ベニー支払いましょう」

淡々と無表情になって言葉を続けるファイナ。
オツチャンは観念したように苦笑いで頷いた。

「分かったよ。お嬢ちゃんと…。何よりシェーラ様のためだから
な」

「ありがとうございます」

ニツと齒を見せて笑うオツチャンにファイナは一仕事を終えたように微笑み返して一礼をした。

結局ファイナは店主が心配だったのだ。

あくまで商売としての取引を演じるかなり遠回りのファイナの不器用な優しさにアインは苦笑した。

「お前も十分お人好しだよ」

「勘違いしないで下さい気持ち悪い！」

隣から笑いかけるアインを下から睨みつけるファイナ。

顔を赤くするファイナを小さい少女なファイナから見れば殆ど人間に見下ろされると思うが、特に彼女は見下ろされるのが我慢ならないのだろうとアインは思った。

しかし、真相は違っていた。

ファイナはアインにオツチャンへの配慮が気付かれた事が悔しく恥ずかしかったのだ。

それにアインは気付く事は無い。

「私は姫様の為を思つて・・・っ！」

言い訳するように顔を赤くしていたファイナが何かに気付いたように狼狽え始めた。

「どうした？」

カタカタと震えるファイナにアインは声をかける。

オツチャンとのやり取りに夢中になって侍女たるファイナも抜けて

いたようだ——王女という自身の主の存在を。

「……私の分……結局全部食べちゃんだ……」

すっかり三人に存在を忘れられていたアシエラは何も残っていない串を使って屈んで地面を突つついていた。

姫の毒見という役目とはいえ、貰えたソーセージをファイナに横取りされて全部平らげられ、あげくに存在を忘れられていたアシエラは一人いじけていた。

「申し訳ありません姫様！」

「いいもん……ファイナなんて……」

「そ、そんなっ……」

その後、いじけたアシエラが機嫌を取り戻すのにオツチャンがもう一本ソーセージを上げたのは言うまでもない。

これまでの謝罪も兼ねて深く頭を下げたファイナが今日だけでオツチャンに相当な借りが出来たのは間違いなかった。

余談だが、

王都レギンレイブでは氏名は基本的に3つの名から構成される。

「アシエラ バーネット レギンレイブ」

ならば、

「アシエラ」が個人名

「バーネット」一家

「レギンレイブ」が血族を指す。

つまり、意味は後ろから始まる訳で

「レギンレイブ」王族である「バーネット」王家の子「アシエラ」
となる。

ただ基本的に家名として名乗るのは末尾の名だ。
ぜひ、覚えておいてくれ。

閑話休題

大量に積み上げられている材木とレンガ。そこから男達がせっせと
肩に材木を担ぎ上げ、レンガを台車に乗せては運んでいた。

代わりにその隣に運び込まれ積み上げられるのは黒く焼け焦げた資
材。

11番街商業区中央広場。

拓けた広場には叙任式の日 of 惨状の面影は無くなりつつあった。

修復が不可能な程崩壊、全焼した建物は全て崩されて既に土台作り
が始まっている。

半壊、半焼した建物の無くなった壁には職人達が新しい壁を作って
いた。

いくら街の結束が強い11番街とはいえここまで復旧が早く進んで
いるのは国による全面的な協力のおかげ。

この広場にいる職人達はアシェラ王女の公約により王都中から集められたのだ。

アイン達が朝食にしようと決めた場所が、着々と復旧が進む商業区の広場だった。

広場に着いたアインら三人はというと…

まだティアは広場に来ておらず、そのため朝食もまだ食べていなかった。

「姫様…あの男は姫様の騎士という自覚はあるのでしょうか？」

重なった資材の脇に立つファイナが溜め息を交えながら口にする。その表情は心底呆れたといった表情だ。

「勿論。アインは私の騎士よ」

ファイナの呟きに断言するアシェラは重なった木材を椅子がわりに座っていた。

木材には服が汚れないようにとファイナのハンカチを敷かれている。

「自覚があつて姫様から離れていくとは騎士として失格ですね」

「アインは私だけの騎士じゃないわ。私より先にこの街の騎士だったんだから、彼が守るべきは私だけじゃないのよ」

「そうだとしても、ティア様と合流してからならまだしも今は離れるべきじゃないと思います」

あの男の行動は軽率です。と憤慨するファイナ。

資材に座っているアシェラは斜め後ろに控えていたファイナを仰ぎ見るように見上げる。

「大丈夫よファイナ。何をしていてもアインがきつと守ってくれるから」

アシェラは何がそんなに楽しく嬉しいのかニコニコと楽しそうに笑顔だった。

「・・・何故、姫様はあの男をそんなに信頼するのでしょうか？いくらアッシュ様のご子息とはいえ、新米騎士で実績も無ければ会ってまだ二日目では無いですか・・・」

ファイナに向けられた紫の瞳。

その瞳からアシェラの絶大な自信と安心をファイナは感じた。

「きつとファイナにもスグに分かるわ」

再び前を向くアシェラ。

その時に見せた幸せそうな笑み。

少なからずファイナは現在進行形で少し離れた位置で完全に二人の存在を忘れてしまっている男に嫉妬を感じた。

「私には…まだあの男が信用出来ません」

アシェラに聞こえない程の小さな呟きを吐いて、ファイナはアシェラがするように復旧作業を続ける一団へと再び眼を向ける。

嵌め込みが甘い所を職人達が確認して声を上げた。

アシェラとファイナの二人が眺めている広場の復旧作業。

その復旧作業の中に驚異的なスピードで建物を建てていく一団がいた。

「行くぞ」

骨組みだけの建物に向かって上に手を振るアイン。

その先には屋根に登っている11番街の大工職人達が手を振っていた。

「飛べっ！」

職人の合図を確認したアインが左目を手で覆い、足下にあった材木に右手を掲げる。すると資材の山のうち細長い数本の材木が緑色の魔方陣に囲まれていき宙に浮くと職人達が登っている屋根へと飛んでいった。アインが飛ばした材木は単純に上に飛ばしただけではない。それぞれの材木が適切な位置への配置、骨組みへ直接運び嵌め込んでいた。

「ちゃんと行っただか？」

「オーケーだ！」

アインは建設途中の骨組みと脳内に保存された建物の見取り図を照らし合わせて正確に運び嵌めていく。

ただアインが保存しているものは当時の状態の建物、その行為はあくまでそこにあつた建築物の再現だ。

記録には破損や老朽化した箇所もあれば、建築物として技術力が低いものもある。

だからアインが運ぶ資材を屋根に登る職人達が確認し、それを新しい知識と技を持って仕上げていく。

それを視てアインは学習し更に効率性を上げていく。

地上から屋根へと資材を運ぶという普段ならば数人がかりでロープで吊り上げなければならぬ時間のかかる作業がアインの魔法によってどんどん進んでいく。

異様なペースで建物を建てていく11番街の一団を王都が派遣した他の職人達が茫然と眺めていた。

一同は一緒に「なんで騎士がこんな事をしてるんだ？」と首を傾げていた。

その心中は皆貴重な魔力を振るうアインを街の復興の為に大層大盤振る舞いをしている騎士だなんて好意的に捉えたりはしていない。

騎士で魔法をこんな使い方しているアインがおかしいのだ。

魔法とは当然魔力を消費し、魔力が無いと魔法は使えない。

それは誰でも避けられない理であり、魔法が使えない者達でも子どもでも誰もが知っているこの世界の常識。

だから、魔法を使わなくとも出来る事には楽しみたいからといって無駄に魔力は使わない。

それが各国を守る為に派遣されるレギンレイブの精鋭、王都の誇りである『騎士』なら尚更だ。

魔力はどれだけあっても困らないが、肝心な場面で使いたい時に足りないなんて事があってはならない。

だからこそ、騎士は特に魔力には気を使い無闇矢鱈に魔力を消費しない。というのが国民の騎士に対する常識だった。

騎士の証である外套を積み上げられた材木の上に放り捨て、精密に見えない所から材木を運んでいるアインを派遣された職人達は異質な者を見るような瞳で見つめていた。

その視線に気付きながらもアインは作業を進めていく。

自分の力が街の為になるのが嬉しかったから。

それに、屋根に登る愛する職人達はアインが何をしようが気にしない。

いつも「さすが精霊騎士様だ」なんて恥ずかしくなる台詞を言うだけ。

魔眼を見せる事は抵抗があるからしないが、この程度の魔力を使う分には問題無い。

「どんどん行くぞー！」

「「おおー!!!」」

最初は広場の復旧作業は多少自分にも責任はあるし、ティアが来るまでの軽い手伝いのつもりだった。

しかし、街に自分の力が役立つのは嬉しく皆との作業は楽しかった。

「ティアが来るまでに完成しちゃうかもなっ」

既にお腹の減り具合は頭から消えている。

どうせなら完成まで手伝いたい、なんて考え始めたアインは意気揚々と次の資材に魔法をかけようと手を伸ばしかけた時だった。

「その少年」

そんな声が耳に聞こえた。

聞き慣れない声にアインは伸ばしかけた手を止めて声の主に体を向ける。

聞き慣れなれないのも当然だった。

声の主——背後で立っている蒼の外套を纏った女性は記憶が確か

なら見たことが無いのだから。

後ろ髪を結わい付けている金髪の髪に翠色の瞳にクッキリとした目鼻立ち。

黒のパンツと白のシャツに赤いリボンというシンプルで清潔感を感じさせる女性は背筋の伸びた姿が凛としていて貴族のようにも見える。

だが、大半の貴族が持つような高圧的さはなく、嫌みの無い清々しさを感ぜさせる高貴さだ。

外見は俺より少し歳上に見える。

女にしては長身でティアより若干大きく、眼がおかしく無ければ十人中十人が美人というであろう麗人。

「君がアインか」

「そうだが、あんた誰だ？」

大人っぽい外見に似合うハスキーボイスというか中性的な声だった。その女性騎士の問いに肯定すると、なるほど、と頷き値踏みするように俺を下から上へと眺め始めた。

女性は嬉しそうに微笑むと手を差し出して――

「私はアリア。君と手合わせがしたい」

――なんて言ってきた。

実に爽やかだった。

「ちょっと！姉さん！いきなり手合わせって何を言ってるんですか！？」

その声で俺もアリアと名乗った女性の発言の危険さに気が付いた。

手合わせがしたい。俺と戦いたい。

爽やかな笑顔とは対照的な危険極まりない発言だった。

向かい合って目線を交えてから数秒も立っていない。

それなのに、この女性は握手を求めながら『戦いたい』だなんて軽い挨拶のようなノリでそんな事を言ってきたのだから。

そのさらっとした言い様に俺はアリアの手を握り返そうと出しかけていたがすぐに引つ込めた。

爽やか笑顔に騙されところだった。

この手を握り返して戦いを了承した事になるのだから。

そこらの悪徳商人もビツクリな鮮やかで爽やかな不意打ちだった。

「初対面でいきなり手合わせなんてアインにも迷惑だよ！」

俺は心の中で会話に割り込んでくれた外野の加勢に感謝した。

下町育ちの俺は悪徳商法には免疫があると思っていたが、そんな俺を引つ掛けるとは女はやはり恐るべし。

綺麗な花には棘があるとは言うが、綺麗な顔をしたアリアは武器を向けあおうと言ってきたのだからそれ以上だ。

握手を避けられたアリアは空振りになった手を一旦見詰めて眉を寄せていたが――

「む、まだ迷惑かは分からないじゃないか」

そう言って再度握手を求めてきた。

「迷惑に決まってるだろが!!」

まだこの女は諦めていなかった。

対戦の誘いを俺が一蹴すると『そうか』と残念そうにアリアはガツクリと手を降ろして頭を垂れた。

諦めが悪いというか頑固というより、ただのわがままだった。

まあ、年上の美人さんが垣間見せた幼さがやけに可愛く感じてしまった事は誰にも言うまい。

レギンレイブ王家の刺繍が入った騎士のマントを着ている時点でアリアは間違いなく正規の騎士なのだろう。

誰かと似ているような気もするが、いくらアリアが正騎士だとしても初対面の女性と戦いたいとは思わない。

「悪いねアイン。姉さんが無理を言って」

「あれ？シンじゃないか？」

アリアとの望まぬ手合わせを回避してくれたのはシンだった。

ぽんつと俺の肩を触れて笑うシン。

その笑顔にいつもの爽やかさは無く、どこか疲れたような苦笑いだった。

「ん？アリア・・・姉さん？シンは兄弟いなかったよな？」

「そうだよ。アリア姉さんと僕は従姉弟なんだ。」

「そうか。誰かに似てると思ったらシンだったんだな」

シンの髪の毛の色は金色で瞳の色は翠色をしている。
似てるかな？とアリアと同じ金髪を揺らして笑うシンは少しだけ嬉しそだった。

よく忘れそうになるがシンは名家の嫡男だ。

出会った当時は内周部の屋敷に住んでいたはずだが、特別視される事を嫌い隊舎に住み、今はこの街に住んでいる。

本来ならば庶民が多く住む11番街に住むような家柄ではない。

なのに見習いの頃の安い給金で、わざわざボロい部屋を借りた時はおかしいんじゃないか？と思いもしたが、本人はこの街の暮らしを心底楽しんでいるようで、俺と仲良くなったのもその頃からだった。

「む？君は剣を持つてはいないではないか？。それにマントはどうしたんだ？」

シンと従姉弟という事はこのアリアも同じ一族という事になる。

名前を聞いた時にはピンと来なかったが、シンと同じ血族となるとその名前は有名過ぎた。

「むむつ、マントをあんなところに放り捨てておくんてつ。」

「マントを着る時は正装が必要な時だけなんだから、普段どこに置いておこうがあんたには関係無いだろ」

「ならあの剣はなんだ！」

「良いんだよ、あれは。鞘の中身は使い物にならない。刀身は半分も無いからな」

アリアが指を指す方向には重ねられる木材の上に外套が投げ掛けら

れている。

そこに立て掛けている剣は四日前の夜に砕けた剣だ。
あくまで外套と一緒に持ち歩いてるだけで使える代物じゃない。

「剣は騎士の誇りだっ！。君も騎士なら…」

「皆の生活の為の騎士だ。『剣』じゃ皆の生活は守れない。今ここに必要なのは俺達の誇りより尽力だ」

アリアは初見で俺がなんとなく苦手そうなタイプに感じた。
だからあまり接していたくもなかった。

だが、それは彼女自身の性格の話で彼女がああ『アリア』なら話は別だ。

「・・・それは、私を知ってて言っているのか？」

「ああ。女だからさつきは断ったが、アンタがああ男の弟子なら話は別だ。

百剣使い、アリア・アレイシア・ソレイユ。ガキの頃からアンタとずっと手合わせしたいと思ってたよ」

剣に異様に執着を持ち、自身は剣どころか鞘も持っていない姿。

ああ男が唯一人だけ育て上げた騎士が目の前にいる。

「普段なら女扱いを喜ぶんだがな…」

俺の挑発にアリアは頭に手を当てて顔を伏せていた。

「私は女だからと侮る輩は昔からその場で叩きのめす事にしている。
言っておくが手加減しないぞ」

「ここは丁度広場になったからな、俺は大歓迎だ」

再び顔を上げたアリアはさっきまでとは別人のような威圧感を発していた。

見た目には分からない肌で感じる強者が持つ独特の風格。それを兼ね備えたアリアは間違いなく強いとアインは感じた。

「ちょっと待つてよ二人とも！姉さんも！アインも止めようよ！」
さっきは制止する事が出来たシンだが、今度はシンでは二人とも止める事が出来ない。
立場は変わったが、アインが挑発しアリアは了承した状態なのだから。

アインは左手で左目を覆い、アリアは虚空に手を伸ばす。

二人はシンの制止も聞こえず、ただ己の相手しか見えていなかった。

そして、この時アイン達は気付いていなかった――

「アイン！後ろです！」

――彼らの背後で木材を吊り上げていたロープが今まさに千切れ木材が落下しかけている事に。

「下には人がっ！！」

それはずっとこの場にいた少女の声。
アインとアリアの臨戦態勢に入った意識に割り込む必死な叫びだった。

「「っ！！」」

二人は声に振り返る、そして見た。

今三人が近くにいた11番街の職人達が手掛けている建物の隣。三階建ての建物の屋根へと上げていた三本の木材は吊り上げ作業を操作していた真下の作業員へと向かって既に落下を始めていた。

「ちいつ！」

急ぎ魔力を解放するアイン。

だが、いくら魔法の顕現速度が早いといっても気付くのが遅かった。それは卓越した騎士であるアリアも同じだった。だが――木材が作業員へと落ちる事は無かった。

「常に周りを見ておくんだな」

その声が聞こえた時には魔眼の視界に緑光が走っていた。それは僅か一瞬の出来事。

落下していた木材は緑色の魔力によって、空中で殴り付けられるように真横に吹き飛ばされる。

木材は地面に二転、三転して誰にも当たる事無く地を転がった。

「騎士の本分は国民の命を護る事にある。やれやれ、俺がいなければ民間人が一人死んでいたところだ」

三人の側にはアシェラよりも早く落下に気付き、緑色の魔力の残滓を纏ったヴァーリが立っていた。

「た、助かって良かった……」

「ふんっ。お前の手柄じゃないだろう」

面倒そうに溜め息を吐いているヴァーリに三人は三者三様の反応をする。

シンは安心したように胸を撫で下ろし、アリアはムスツと何故か不機嫌で、アインはというと現れたヴァーリを訝しげに凝視していた。

「聞きたいんだが、その子はなんだ？」

アインはヴァーリを指差して口にする。

赤い光を失った視線が向かっているのはヴァーリの腰元、正確にいうと――その後ろ。

「お前は分かるだろうが、この子は精霊だ」

ヴァーリの後ろには黒衣の背に隠れながらアインを窺う緑髪の小さな女の子がいた。

第八話 「来訪者アリア 後編」 (後書き)

段々登場人物が増えてきました。

ファイナはけしてアシエラとは対等になろうとしない存在です。

気が付けばこんな文章が長く膨大になっていました。

日常描写がしつこいと思われた方もいると思います。

次の次の話？からは一気に物語が加速するのではと思っています。と嬉しいです。

次回予告

予想外の来訪者と出会った正騎士四日目。

広場での朝食を食べ終えたアインはアリア、ファイナと共に『職人街』と呼ばれる3番街にいた。

新たな剣を用意するためにアリアの薦めで訪れた工房「ディアン・ケヒト」。

そこでアインは正騎士になって最初の任務を言い渡される。

第九話

「実力」

—それはアリアによる確認と容認の選択—

同時進行で進めていきます。

『ヒトというナの』

”精霊と魔法が混在する隠された真実世界”の物語。
良ければ併せてお楽しみ下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2887/>

精霊騎士物語

2011年10月6日22時46分発行